

遊戯王Fool ～バー ガー中毒者の黙示録～

レルクス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

デュエリスト養成学校、『デュエルスクール・ボーダー』に、高等部一年生として編入してきた少年、あおしほけいゆう青芝恵遊。

編入試験が難関だと言われるボーダーに入って来た彼だが、極度の『ハンバーガー中毒者』だった。

常にハンバーガーが入った袋を持ち歩き、授業中以外は大体食べている変人。そんな彼のフェイバリットは、もちろん……。

※ライフは4000で、他は全て『マスタールール4』です。『ライフ4000』でた

りつかゴルア!』というツツコミはお控えください。

※作者はデュエル素人です。『そんなデュエルタクティクスでプロになれるわけねえだろ!』というツツコミもお控えください。

目次

第一話

1

第二話

26

第三話

62

第四話

92

第五話

124

第六話

164

第七話
(特例アリ)

191

第八話

215

第九話

239

第十話

262

第十一話

281

第十二話

300

第十三話

317

第十四話

345

第十五話

359

第十六話

382

第十七話

404

第十八話

418

第一話

壇上で、三十歳くらいの女性が話している。

「君たちがこの学校で学び、そして切磋琢磨し、新たなデュエルの世代を担ってくださることを期待している。以上だ」

実際のところ、色々と長いこと話していたが、その言葉を最後に、校長先生の言葉は終わった。

（新たなデュエルの世代……か）

編入生の一人、黒髪に青いメッシュを入れた男子生徒、あおしほけいゆう青芝恵遊は、それについて深く何かを言うことはしなかった。

★

デュエルスクール。

デュエリスト育成学校であり、毎年多くのデュエリストを輩出し、地方、都心部にしろ、多くの場で活躍する実力者を出している。

整った設備が多い学校で、資料室はかなりの量のデュエルに関する論文が存在するほどだ。

ただし、編入だけはやりずらいと言う意見もある。

中高一貫だが、多くの生徒は中等部から入っているようだ。

デュエルスクールの多くでは、クラス替えと言うものが存在しないパターンが多い。今通っている『デュエルスクール・ボーダー』も同様だ。

結果的に、編入してきた生徒には必要なものがある。

そう、自己紹介だ。

「さて、自己紹介よろしくー！」

担任教師、上村美冬先生うえむらみふゆからそう言われた恵遊は、内心溜息を吐いていたが、まあいいか。と思うことにした。

「青芝恵遊。得意なのはデュエルで、好きなものはハンバーガーだ。よろしく」

左手に持ったパン。パンにハンバーガーが詰まった袋を掲げて、恵遊は言った。

「うんうん。と言うわけで、皆仲良くしてね。青芝君。授業中は食べないでね」

「さすがにそれは分かってますよ。まあ、三年間宜しく」

三年間。と言う言葉は間違っていない。

実際にそうだからだ。

さて、面倒なことにならないければいいがな。

……ならないはずがなかった。

編入生と言うのは、存在自体珍しいが、実際問題。合格することすら珍しいといえるレベルなのだ。

筆記試験と実技試験の両方を受けて、その実力を測る。

個人だけではなくチームにおける勝負も求められるこの学校では、そう言った勧誘も大切だが、いろんな意味で、測ることも求められるのだ。

「……はあ。何かと面倒だな」

食堂でハンバーガーを補充して、ほとんど止めることなく食べ続けている恵遊。

まあ、最初は『ハンバーガーが好きなんだな』と思われる程度だったが、休み時間のたびに食べ続けて、食堂で大量に補充する姿を見て『なんか変』と思われるようになった。当たり前である。

「隣いいかな」

振り向くと、濡れ羽色の髪が特徴の女子生徒がいた。

クラスメイトの幸原茜だ。さちはらあかね

……胸でさえ。まあいいか。

きつねうどんがトレイに乗っている。

「ああ。いいぞ」

幸原は微笑んだあと座った。

「この学校はどう？」

いきなり聞いてきた。

「まあ、ほとぼりが冷めるまでは少々面倒になるだろうと思ってるよ」

「編入生だもんね。今年は二十人くらいだったかな。この学校は退学していく人もそこそこいるんだけど、私たちのクラスはあまりいなかったからね」

「それだと編入生と言うより補給生だな」

「いえてるね。まあでも、頑張れば大丈夫なのは何処でも一緒だよ」

「……まあ、そうだな」

確かに間違っではないだろう。

報われる努力をしているという確信を持てるものにとっては、と言う条件付きではあるが。

★

今日はデュエルの実技授業はなかった。

ので、なんだかんだ言っただけで学校ではデュエルをしていない。

「普通科高校とは違った雰囲気だな……まあ、それはいいが、編入生と言うだけでかなりみられるもんだな……」

編入生と言うのが珍しいのだろう。

結果的に、その属性だけで何かと言われるものらしい。

「……だな」

学生寮の五階。

全寮制のボーダーでは、本当に様々なことが学校の敷地内で完結している。

それはそれなりに必要なものがそろった施設ないようなのだそうだ。

一人部屋だし、もう何日か泊まっているので慣れたものだ。

「……」

ドアを開けて中に入った瞬間に目に入ったのは……。

「はあはあ、これが恵遊君の匂いが染みついた布団。すうううううはあああああ」

知らない女子生徒が恵遊の布団の上でドエライことになっていた。

「……おい」

「何よ！恵遊君成分を補充してるんだから邪魔しな……い……で……」

女子生徒はなんていうか……オナっているのを母親に見られた子供のような顔になった。

驚愕しているが、その顔立ちは整っている。

長い金髪はきれいなもので、腰までであるだろう。

年齢不相応の大きな胸も特徴の一つなのだろうか……まあそれはそれとして。

空気が凍り、時間が止まる。

そんな感じになっていったのだが……。

「凜子ちゃん！……ああ、手遅れだった」

幸原が部屋に勢い良く入ってきて、そしてその空気を感じて頭を抱える。

恵遊は説明を求める視線を幸原に向けた。

「ええと、クラスメイトの聖野凜子ちゃん。一応私と友達だよ」

「一応？」

「こんな子だとは昨日まで知らなくて……いやまあ、前々から好きな人がいるっていつてたのは知ってるけど……」

「ああ、うん。なんとなく察した」

恵遊も、こんな状況になっても恋愛感情が自分に対して存在するを感じないほど

鈍感ではない。

のだが……重すぎる愛も勘弁してほしいというのが正直なところだ。

というか、もうこれはどうすればいいのかわからん。

「こうなったら……恵遊君！つきあってください！」

「無理がある」

恵遊は即答する。

さすがになあ……。

「なら、デュエルして私が勝ったらつきあってください！」

デュエルで恋愛を決められてはどうしようもない気がするのだが……。

幸原は「断らないであげて」という、ある種の懇願のような視線を送ってきた。

「……いいだろう」

「よっしやああー！」

雄叫びを上げる聖野。

なんというか……凜という文字を名前に持っていても、凜としている訳ではないんだなと思った。

★

ボーダーでは多数のデュエルコートが用意されている。

特設アリーナも存在するのだが、基本的にそちらはイベントと、教師を同伴させて行われるデュエルが行われるので、そこまで使用されていないのが現状である。

基本的に予約が入っているものなのだが、何故か、電話一本でデュエルコートに入ることが出来た。

「これに勝ったら恵遊君と……フフフフフフ……」

デュエルコートの反対側に立つ聖野がちよつとヤバい雰囲気になっている。

これは……そこそこ本気で戦った方がいいかもしれないな……。

「惠遊君。頑張ってるね」

「ああ」

幸原が応援してくる。

こうなる前に何とかできなかつたのか。そう思うが、こうなってしまうては何もできない。

仕方がないと割り切って、惠遊はデュエルディスクを構える。

あと、ギャラリーがそれなりにいる。

観戦席で小声で話しているが、惠遊は地獄耳だ。

『おい、編入生がデュエルするみたいだぜ』

『誰だ?』

『青芝惠遊だ』

『ああ、ハンバーガー買い占めてたな。相手は?』

『聖野凜子だ』

『それって……』

『中等部二年から腕を上げてきた『暴竜の妄信者』聖野凜子だ』

『好きな人がいるって話だったよな』

『ああ。本人が言ってた』

『本人の目がヤバイことになってるってことは、そう言うことなのか?』

『俺、あんな彼女嫌だ』

『話を戻すぞ。どうやら『プライバシーブレイカー』によると、このデュエルで聖野凜子が勝利した場合、二人は交際するという話だ』

『編入生が勝利した場合は?』

『知らん。編入生が主導権を握れる程度のもんだろ』

なるほど、だいたい状況は分かった。

しかし………なんというか、世も末である。いろんな意味で。

「恵遊君。『恋は盲目』って言葉。知ってるよね」

「当然だ」

「自覚してるよ? 私は今のその状態だってこと。でも、そのおかげで私は強くなった」

「そうか」

「もともと、聖野家はデュエルモンスターの名門。滅私奉公を押し付けられたけど、そんなの無駄だった。恋の魔法で私は強くなった。だから、失望させないでよ」

期待に満ちた瞳でそう言う聖野に対して、恵遊はいいかえす。

「とりあえず言う………ぬかすな」

恵遊はカードを五枚引いた。

聖野もカードを五枚引く。

「デュエル！」

恵遊 LP4000

凜子 LP4000

「私の先攻。まずは『BF―朧影のゴウフウ』を特殊召喚」

BF―朧影のゴウフウ ATK0 ☆5

朧影トークン ATK0 ☆1

朧影トークン ATK0 ☆1

「制限カードを普通に初手に持つてくるとは……」

「これくらい普通だよ。ゴウフウとトークン一体を使って、『水晶機巧―ハリファイ

バー』をリンク召喚。効果で『ジェット・シンクロン』を特殊召喚するよ」

ジェット・シンクロン ATK 500 ☆1

「手札から『レッド・リゾネーター』を召喚。効果にチェーンして『レッド・ウルフ』の

効果を発動。レッド・ウルフを特殊召喚して、リゾネーターの効果で手札の『聖鳥クレ

イン』を特殊召喚。一枚ドロー」

レッド・リゾネーター ATK 600 ☆2

聖鳥クレイン

ATK1600 ☆4

レッド・ウルフ

ATK1400↓700 ☆6

一気に出してきた。

「レベル4の聖鳥クレインにレベル1のジェット・シンクロンをチューニング。『TGハイパー・ライブラリアン』をシンクロ召喚」

TG ハイパー・ライブラリアン ATK2400 ☆5

「これは……しばらく止まらん」

「その通り。レベル6のレッド・ウルフにレベル2のレッド・リゾネーターをチューニング。『レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト』をシンクロ召喚」

レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト ATK3000 ☆8

「ライブラ効果で一枚ドロ。手札一枚をコストにして墓地のジェット・シンクロンを特殊召喚して、スカーライトにチューニング、『琰魔竜 レッド・デーモン・アビス』をシンクロ召喚」

琰魔竜 レッド・デーモン・アビス ATK3200 ☆9

「ライブラで一枚ドロ。まだまだよ。デッキトップを墓地に送り、『グローアップ・バルブ』を特殊召喚。アビスにチューニング。『琰魔竜 レッド・デーモン・ベリアル』をシンクロ召喚」

琰魔竜 レッド・デーモン・ベリアル ATK3500 ☆10

「ライブラで一枚ドロウ。『ポジションチェンジ』を出して、ベリアルを移動。隴影トーカーを『リンクリボー』にして、ベリアルの効果でリンクリボーをリリース、アビスを蘇生する」

琰魔竜 レッド・デーモン・アビス ATK3200 ☆9

「『貪欲な壺』を使って、ゴウフウ、聖鳥クレイン、レッド・ウルフ、リンクリボー、ミラー・リゾネーターをデッキに戻して二枚ドロウ」

ミラー・リゾネーターなんていつ……ああ、ジェット・シンクロンの蘇生コストか。

「カードを二枚セットしてターンエンド。さあ、恵遊君のターンだよ」

「……」

手札五枚からスタートして、手札は二枚だ。ここまではいい。

で、フィールドには、ハリファイバーとライブラリアン。そして、カード効果を無効にしてくるアビスと、なんだかんだ言って攻撃力の高いベリアル。そしてポジションチェンジ。

あと伏せカードが一枚。

「ずいぶんとぜいたくなフィールドだ。俺のターン。ドロウ！」

さて、アビスの無効効果をいつ使って来るか……。

いや、フォーミュラが来るとすればレベル7も行けるからアイツも……ああめんどくせえ！

「まずはジャブだ。『手札抹殺』を発動。お互いにカードを捨てて、そして捨てた枚数分ドロウする」

「アビスの効果は発動しない」

手札をチラッと見た。

まあ、墓地に送っておきたいカードがあつたのだろう。多分。

惠遊は五枚捨てて五枚ドロウ。

凜子は二枚捨てて二枚ドロウした。

「手札から『カードガンナー』を召喚」

カードガンナー ATK400 ☆3

「で、手札から『機械複製術』を発動。どうする?」

「アビスの効果で無効にする」

だよな。

「だが、カードガンナーの効果発動。デッキトップ三枚を墓地に送って攻撃力を1500ポイントアップさせる」

カードガンナー ATK400↓1900

「なら、こっちはハリファイバーの効果を発動。『フォーミュラ・シンクロン』をシンクロ召喚扱いで特殊召喚だよ。ライブラとフォーミュラの効果で、二枚ドロウする」

フォーミュラ・シンクロン DFE1500 ☆2

相手ターンにカードを動かすだけで手札が増える謎現象である。

「そして、レベル5のライブラリアンに、レベル2のフォーミュラ・シンクロンをチューニング。『月華竜 ブラック・ローズ』をシンクロ召喚！」

月華竜 ブラック・ローズ ATK2400 ☆7

「レベル5以上が出てきたらそれをバウンスする能力だったな」

「そうだよ」

「なら、『月の書』を発動。悪いが、せっかくのブラック・ローズは裏守備表示にしてもらう」

「む……」

「あいにく、邪魔なんだな。魔法カード『儀式の下準備』を発動して、デッキから『ハンバーガーのレシピ』と『ハングリーバーガー』を手札に加える。『ハンバーガーのレシピ』を発動して、墓地の『儀式魔人デモリッシャー』と『儀式魔人プレグスター』を除外、『ハングリーバーガー』を儀式召喚！」

ハングリーバーガー ATK2000 ☆6

現れるハンバーガー。

イラストからすれば完璧に悪魔族だが、何故か戦士族。

闇属性であり、攻撃力2000と言う初期に登場した誰得カードなのだが、ハンバーガー中毒者である恵遊にとつては最大のフェイバリットカードだ。

「は……ハングリバーガー?」

「そうだ。手札の『最強の盾』をハングリバーガーに装備させる。攻撃力は3850になる」

ハングリバーガー ATK2000↓3850

構えた。と言うよりは添えられたと言う方が正しいと思われるが、まあそれはいいとして、『青眼の白龍』だろうと『究極完全態・グレート・モス』だろうと、正面から殴れる攻撃力になった。

「な……そっか。戦士族」

「そういうことだ。バトル!ハングリバーガーで、レッド・デーモン・ベリアルを攻撃!」

添えられた盾からエネルギー光線が放射されて、レッド・デーモン・ベリアルを貫いた。

凜子 LP4000↓3650

「むう……こんな簡単にベリアルが……」

「欲張りすぎだ。あと、プレコグスターの効果だ。手札を一枚選択して墓地に送つてもらう」

「儀式魔人か……厄介だね」

手札を一枚墓地に送った。

「カードガンナーで、セットされているブラック・ローズを攻撃。ブラック・ローズの守備力は1800だったはずだ。破壊可能」

カードガンナーの砲撃で、ブラック・ローズが吹き飛んだ。

「む……」

「俺はこれでターンエンドだ」

カードガンナー ATK1900↓400

「私のターン。ドロー！」

凜子はフィールドを見る。

少々計算外ではあったが、手札は4枚。フィールドにはアビスが残っている。

攻撃力では負けているが、十分だ。ここから巻き返せる。

『リビングデッドの呼び声』を発動。『レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカークライト』を墓地から特殊召喚！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカークライト ATK3000 ☆8

「そして、『チェーン・リゾネーター』を召喚。効果発動。デッキから『フレア・リゾネーター』を特殊召喚！」

チェーン・リゾネーター ATK100 ☆1

フレア・リゾネーター ATK300 ☆3

「てことは……」

何故だろうな。凜子の体が燃え上がっているように見える。

「私はレベル8のレッド・デーモンズ・ドラゴン・スカークライトに、レベル1のチェーン・リゾネーターと、レベル3のフレア・リゾネーターをダブルチューニング！」

紅蓮の悪魔の竜。

「シンクロ召喚！ レベル12『スカークレッド・ノヴァ・ドラゴン』！」

スカークレッド・ノヴァ・ドラゴン ATK3500 ☆12

「スカークレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力は、フレア・リゾネーターの効果で3000アップして、さらに、墓地のチューナー一体につき、500ポイント攻撃力を上げる。私の墓地にいるチューナーモンスターは七体！」

レッド・リゾネーター

グローアアップ・バルブ

フォーミュラ・シンクロン

ダーク・リゾネーター（手札抹殺）

バリア・リゾネーター（プレコグスター）

チェーン・リゾネーター

フレア・リゾネーター

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK3500↓3800↓7300

「な、7300だと!？」

「バトル！スカーレット・ノヴァ・ドラゴンで、カードガンナーを攻撃！」

「墓地から『超電磁タートル』を除外して、バトルフェイズを終了させる！」

「むう……『マジック・プランター』を発動して、リビンググデッドの呼び声を墓地に送っ

て二枚ドロウ。カードを一枚セットして、ターンエンドだよ」

「俺のターン。ドロウ！」

さて、これは少々計算外だ。

チューナーたまってるな。まあ、そのうち二枚は自業自得なので何も言えんが……。

「まずは『カードガンナー』の効果で、デッキトップを三枚墓地に送って攻撃力を上げる」

カードガンナー ATK400↓1900

「墓地の『ブレイクスルー・スキル』『ADチェンジャー』の効果を発動。アビスの効果

を無効にして、スカーレット・ノヴァ・ドラゴンの表示形式を変更する」

「そんな……」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK7300↓DFE3000

「守備力も高いが、俺のハングリーバーガーには及ばん。バトルだ。ハングリーバーガーで、スカーレット・ノヴァ・ドラゴンを攻撃！」

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴンで、攻撃を無効に……」

「デモリツシャーを素材にしたハングリーバーガーは、相手の効果の対象にならない」
「嘘!？」

エネルギー弾がスカーレット・ノヴァ・ドラゴンを貫く。

守備表示なのでダメージはない。

「でも、これ以上やることはないね！」

「いや『リミッター解除』を発動する。これで、攻撃力は3800だ」

カードガンナー ATK1900↓3800

「こんな簡単に……」

「もともと、カードガンナーを主軸にして、墓地のカードで補助しながら、ハングリーバーガーで殴るデッキだからな。『機械複製術』が入っているのはそういう理由だ。カードガンナーでアビスを攻撃！」

カードガンナーの砲撃がアビスを撃ちぬいた。

凜子 LP3650↓3050

「ターンエンドだ。カードガンナーは破壊される。そして、カードを一枚ドロ―」

「私のターン。ドロ―!」

凜子は少々焦っている。

手札は四枚ある。

ギリギリの手札でやりくりしている恵遊と比べれば余裕はあるが、それでも、いいようにされているのも確かだ。

異様に隙を突いて来る。

まあ、儀式魔人とともに、墓地から発動するタイプのカードをそれなりに投入しているデッキなのだ。ある意味当然といえる。

「私は『復活の福音』を発動。墓地からスカーライトを復活させる!」

レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト ATK3000 ☆8

何度でも現れる傷ついたレッド・デーモンズ・ドラゴン。

ドラゴン族ゆえにサポートが多いのは分かるが……。

「そして、『スカーレッド・カーペット』を発動。墓地から『チェーン・リゾネーター』と『シンクロン・リゾネーター』を特殊召喚して、スカーライトにダブルチューニング!

『レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント』をシンクロ召喚！』

レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント ATK3500 ☆10

「今度はタイラントか……」

「効果発動。このカード以外のすべてのカードを破壊する！」

タイラントが掌底を地面にたたきつける。

ハングリーバーガーは丸焦げになった。

「ち……全体除去には勝てんな……」

「バトル！レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラントで、恵遊君にダイレクトアタック
！」

「墓地の『クリアクリボー』を除外して、効果発動！一枚ドロウして、モンスターなら特
殊召喚して、攻撃対象をそのモンスターに変更する」

別にモンスターを引けなかったとしても負けないのだが、引けなかったら逆にまず
い。

「ドロウ！」

ドロウしたのは……。

「二体目の『カードガンナー』を守備表示で特殊召喚！」

カードガンナー DF E400 ☆3

「そのモンスターが出てくるなんて……」

タイラントはカードガンナーをプレスで焼き払った。

「破壊されたことで、一枚ドロ―！」

「通らない……私はこれでターンエンド―！」

さて、そろそろまずいことになってきたな。

恵遊のデッキは『ハングリーバーガー』を主軸としたもので、確かに『最強の盾』を装備すればそれ相応の攻撃力にはなるが、基本的にはファンデッキの域を出ない。

言ってしまうえば、決定打になるものがほとんどないのだ。あと、防御手段もいろいろと使いすぎている。

このままではじり貧だ。

「俺のターン。ドロ―！」

よし―！

「このターンで決める」

「―！」

警戒したような雰囲気を出す凜子だが、もう遅い。

「『死者蘇生』を発動。墓地の『ハングリーバーガー』を特殊召喚―！」

ハングリーバーガー ATK2000 ☆6

「そして装備魔法『魔界の足枷』を発動！タイラントに装備させる！」

「しまった！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント ATK3500↓100

【レッド・デーモン】関連のモンスターは攻撃力が軒並み高いので、破壊耐性を付与するだけでそれなりに場持ちがよくなる。

だが、こうして攻撃力を変えてやると、弱体化にはもってこいなのだ。

「ラスト！『アサルト・アーマー』をハングリーバーガーに装備させて、その後墓地に送ることで、二回攻撃を可能にする。バトルだ！ハングリーバーガーで、レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラントを攻撃！」

ハングリーバーガーは自分にはさんでいるトマトをタイラントめがけて飛ばした。

「うっ……」

凜子 LP3050↓1150

「さあ、決闘終了だ。メインディッシュダイレクトアタック！」

ハングリーバーガーは凜子めがけて、ついている旗（日本の国旗）を飛ばした。

凜子 LP1150↓0

勝者、青芝恵遊

「あー……疲れた……」

「やったね！恵遊君！」

ものすごく空気がだった幸原が話しかけてくる。

デュエルコートから降りた。

凜子がすごくどんよりした雰囲気で来た。

「むう……恵遊君を私のものにできると思ってたのに！」

「知らんわそんなの」

どうしろって言うんだ？俺に。

「まあいいよ。次は私が勝つ！」

「はあ……ぬかすな。次も俺が勝つ」

バーガーが入った袋を拾って、恵遊はデュエルコートを後にした。

★

恵遊は自分の部屋のベッドに倒れこんだ。

「凜子。本気ではなかったな。まあ、『本気で無かったのはお互い様』か。それにしても

……どこかであつたかな」

凜子に会った記憶がない恵遊。

自分に対して、まあ、かなり重いのが、好意を抱いているのは分かる。

だが、恵遊の方に記憶はないのだ。

「まあいいか。いずれにせよ、俺は市場よりも先行販売されるハンバーガーが多数あるからここに来ただけだ」

周りがそれだけを望むかどうかは関係ない。

良くも悪くも、ハンバーガーのことだけしか考えていない恵遊だった。

第二話

「フッフッフ。私の手にかかれば、合鍵を確保することなど容易いのだよ」

黒い笑みを浮かべながら鍵をもって恵遊の部屋に向かう凜子。

その瞳に宿るのは、獲物を見つけた肉食獣の欲望。

その集中力や情熱を他のことに活かせなかったのだろうか。

※自分が使用しない合鍵は、所持、作っただけでは犯罪にはなりません。ただし、犯罪を計画していた場合は予備罪が適用されます。みんなも合鍵の管理はしっかりしましょう。

「いざ、獲物の待つ場所へ！」

鍵を差し込む。

ガチャリ。と音を立てて開いた。

それと同時に、凜子はニヤツと笑った。

ドアを開ける。

「何をしているんだ？^{ひじりの}聖野」

はて？ 一体誰の声だ？

惠遊の声ではない。おっさんの声が聞こえるぞ？

凜子は首をかしげながら顔を上げる。

そこには……黒い髪をスポーツ刈りにして、赤いジャージを着た『生活指導の先生』が立っていた。

「ゲゲツ!?なんで先生が!?!」

「青芝から『フロントに預けていたはずの合鍵がなくなっているので、多分バカが部屋に入って来るだろうから現行犯逮捕してほしい』という要請があった。先生は丁度暇だったからな。安心しろ。部屋を間違えたわけではない」

「ちよつ、惠遊君は!?!」

「ハンバーガーを買いに行った。どうやら新作が出たようで、今頃は電車に乗っているだろう」

惠遊らしいと言えばいいのか、凜子がバカだと言えばいいのか……いずれにしてもいろいろな意味でガタガタである。

「とういうわけで、現行犯逮捕だ」

先生は凜子の手を掴むと、ズンズンと『生徒指導室』に向かって歩いていく。

「ちよ、待って!いやあああああああ!」

失敗。



「惠遊君。ひどいよ！」

「自業自得だろ」

惠遊が優位かつもつともない分だが、それを凜子が認めるかどうかとなると少々別の話である。

それと、男の部屋に本人の同意なしに突入しようとして生徒指導室に連れていかれた割に拘束時間が短いと惠遊は思ったのだが、まあ、それは考えても仕方がないので置いておくことにしよう。

……生徒指導の先生の『まるで暴竜のブレスを受けたかのような』チリチリの頭を見たからではない。決して。

「茜ちゃんもそう思うよね！」

「……それに同意するのは無理があるよ」

ごもつとも。

「むうう……それにしても、私は客観的に見てもかわいいはずなのに、まさかハンバーガーに負けるなんて……」

「まあ、そんなもんだ」

チーズバーガーをもしやもしやと食べながら惠遊はぶつきらぼうに言う。

「ていうか、昨日俺、君にデュエルで勝ったよな」

「それはそれ。これはこれ。だよ！」

デュエリストとしてあるまじき台詞セリフである。

「そもそもの話。俺、凜子にあつたことなんてあるか？」

「あ、私も気になってた」

あつた記憶が全くないのだ。

「私があつた時はフードで顔を隠していたからね。覚えていないのも無理はないよ」

「……ますます記憶にないな」

「それもそれで珍しい気がする」

まあいい。言いたくないのならそれで。

「それにしても、何でそこまでハンバーガーが好きなの？」

もしかやもしやと食べ続ける恵遊に向かって、凜子は呟く。

ゴクンと飲み込むと、恵遊は言う。

「……一目ぼれと言うか、出会いと言うか、そんな感じだ」

「何かいろんな意味でハンバーガーに負けた気がする！」

叫ぶ凜子に対して、『知らんな』と言わんばかりに新しいハンバーガーをとりだす恵遊。

人の話を聞いていないというより、明確な順位が本人の中で決まっているような感じだった。

「……ところで、新作を買いに行ったって聞いたけど、何だったの？」

『『ゴーヤモズクバーガー』というものだった』

「絶対に地雷だよ！」

「ああ。思いつきり踏み抜いた気分だ」

若干遠い目になる恵遊。

今でも思いだせる。ていうか今朝に食べたばかりなのだから当然といえば当然だが。

驚愕に染まった店員の顔。

店内に漂うチャレンジャーに対する好奇心に満ちた視線。

明らかに異様なオーラ漂うジャンクフードにかぶりつく変人。

そしてむせ返る姿を見た観客たちの同情の視線。

全てが『そんな体を体を張らなくても……』という雰囲気構成するには十分なものを持つており、恵遊は自分が哀れだと思つたものだ。

ついでに言うと、恵遊はゴーヤもモズクもどちらかと言うと嫌いな方である。

何故挑戦しようと思つたのかは、それがハンバーガーであつたからに他ならない。

390円をはらつて手に入れた感想は『地獄だった』である。

「……まあ、その話は置いておくとして」

「そうだね。私もおいておいた方がいいような気がしたよ」

「同感」

話題を変更しよう。

「そう言えば、この学校にはランキングみたいなものがあるんだよな」

学校案内には記載されていないなかったが、ランキングのようなものが存在するという話は聞いた。

「あるね。この学校。生徒数は中等部と高等部を合わせると1440人いるんだけど――」

微妙な人数である。

ちなみに、一クラス三十人で一学年八クラスあって、さらに、中等部と高等部を合わせて六学年あるので、結果的にそう言う数になる。

「上位十人に関しては『エキセントリック・テンス』って言われているんだ」

「……『常軌を逸した十人』と言う意味になると思うが……要するに、一位から十位までは決められているってことか」

「違うよ。一番の人は決められているけど、後はバラバラなんだよ。あ、でも、『序列零位』であることが決まっている人もいるね」

特例で認められたものでもいるのだろうか。

ただ、順位なので、そんなものを設ける必要はないはずだ。

「どういうことだ？ 零位って誰だ？」

「それは僕のことだよん」

「うおっ！」

急に後ろから話しかけられてびっくりした。

振り向くと、銀髪を切りそろえた飄々とした印象の男子生徒がいる。

「…………お前は？」

「お、やっぱ僕のこと知らないかあ。青芝恵遊君」

こちらのことを知っているようだが、恵遊は見たのは初めてである。

まあ、二日目ですんないりろ知っているものではないし、第一、恵遊は順位に興味はない。

売られているハンバーガーのみ、興味があるのだ。変人と言われるが。

「…………あんだ誰？」

「自己紹介が遅れた。僕は久我昇平くがしょうへい。学内ランキングの『序列零位』さ」

ふむ、だからどうということだ？

「あ、恵遊君。一応同級生だよ」

凜子が補足してきた。

「一応って何さ。まあいいけどね」

そういうながらカラカラと笑う昇平。

だが、意味がよく分からん。

「どういふことなんだ？零位って」

質問に答えたのは茜だ。

「簡単に言えば、『勝ったことも負けたこともない』ってことだ」

「……全部引き分けってことか？」

「そうだよん」

若干いぶかしげな表情になっていることを自覚しながら、恵遊は昇平の顔を見る。

「もしかして、今いる序列一位から九位まで、全員を相手にしているのか？」

「一回ずつやらされたなあ。だけどそれだけじゃないゾ。この学校で一番強いやつ、つまり序列一位と、この学校で一番弱い奴。つまり『ブロンズエリア』の一番下。どっちを相手にしたって、僕は引き分けなのさ」

それって、ある意味で最強と云うことなのでは？

それと……。

「……ブロンズエリアって何だ？」

「あ。そこから説明いる？」

「勝手にお前が話に入って来たんだろ……」

「そうだったな。この学校、半分から下が『ブロンズエリア』で、半分から四分の一までが『シルバーエリア』で、上位四分の一が『ゴールドエリア』で、上位一割が『プラチナエリア』で、上位十人が『マスターエリア』なのさ」

生徒数がそこそこいるので、それなりに区分けできるといふことか。

要するに、『エキセントリック・テンス』Ⅱ『マスターエリア』なのだろう。

「ちなみに、そこにいる幸原茜はプラチナエリア。聖野凜子はもうちよつとでプラチナになれるゴールドエリアってわけなんだよね。青芝恵遊。君はどこかな？」

試すような視線をこちらに向ける昇平。

「……俺が決めることじゃないだろ」

「確かに。順位なんていうのは所詮『手の内を明かした手段だけを見た結果』でしかないし」

クツクツクと笑う昇平。

それはそれとして、一つ気になることがある。

「で、昇平、お前、何をしに来たんだ？」

「一戦くらいやっておこつかなうって思ってきたんだよな。どうする？」

「……俺のメリットが皆無なんだが」

「マスターエリアのデュエリストを相手にできるんだゾ？」

「そう言うのは興味ないんだ」

「そうだったな。ハンバーガーにしか興味がないって噂だ」

「実質その通りだ」

「ひとつ聞いていい？」

「なんだ」

「なんでハンバーガーを頬張ったまま普通の声色で喋れるの？」

「ちよつとしたコツがあれば普通にできる」

そう、別に食べることをやめていたわけではない。

普通に今も食べ続けている。

え、太らないのかつて？ 太らない体質だ。

「面白いなお前」

「デュエルを全部引き分けにするような変人に言われたくはない」

周りからは『五十歩百歩だろ』と言いたそうな視線を受けるが、二人はあえて気にしない。

「一回だけやろうぜ」

「やだ、面倒」

一瞬でぶった切った惠遊。

実際問題。この学校で実績を積むことを考えている訳ではない。

昨日デュエルしたのは『なんかヤバそうな感じがしたから』であつて、まあ、先ほどの凜子のようなすから察するにあまり意味はなかつたようだが、それはともかく、メリットのないデュエルはする性格ではない。

「いいじゃないじゃない。一回だけやろうぜ。それに、挑まれたデュエルを拒否してたら、チキン扱いされるゾ?」

「別にいいだろ。順位なんて『手の内を明かした手段だけを見た結果』でしかないんだ。なら、手の内を見せないことに意味があるのは当然のことだろ?意味もなくデュエルする意味がどこにある」

上達思考がないという以前にめんどくさがり屋である。

そして、ハンバーガーの方が価値がある。いろいろな意味で。

……ずいぶんと訳の分からん思考だが、惠遊にとつてはそれが普通なのだ。末期症状である。

「まあ、君の言い分は分かつた。じゃあ、デュエルしてくれたらこれを上げるよ」

「ん?」

昇平が取り出したのは『ラスベガスバーガー』というものだ。

別にラスベガスなど全く関係はないのだが、別に悪いネーミングではないのでそのまま流用されるハンバーガーである。

ちなみに言うなら、既に恵遊が持っている袋の中に同じものがいくつもある。
が……。

「いいだろう」

「いいの!?!」

ハンバーガーをくれるのならみんな友達だ。

……なんとも安いものだが。

昇平はハンバーガーを恵遊に手渡しながら言う。

「そう言ってくれると思ってたゾ。さて、デュエルコートに行こうか。僕はマスターランクだから、電話一本でいつでも使えるんだよね」

「非公式だよな」

「非公式なのはエリア制度の方であって、『エキセントリック・テンス』の称号は別なの
ヤ」

「なるほど」

何故分けているのかと思ったが、そう言うことか。



デュエルコートに移動した。

「惠遊君。勝てるの？」

「さあ……引き分けにするってことは、それ相応の専用デッキを組んでいるはずだからなあ………というか、『する前から負けないことが分かっているデュエル』っていうのも妙な話だと思うんだが……」

さて、どうなるのやら……。

地獄耳でギャラリーの声を聞いてみよう。

『おい、今度は『天秤の使徒』かよ』

『アイツ人気だな……』

『今回のデュエルの背景は？』

『編入生が餌付けされた』

『だろうと思った。接点皆無だろ』

『話を戻すぞ。で、どうなると思う？』

『一度も勝ったことも負けたこともないんだ、どうなるかなんて想定できるかよ……』

『まあそれもそうなんだが……』

うーん……何ともあやふやだ。

「さて、恵遊君。始めようか」

「そうだな。ハンバーガー一個分のプレイングはしてやろう」

「そういう基準なのか」

「もちろんだ」

「一応言っておく、『僕は誰も倒さない』が、『僕を誰も倒せない』んだ。さあ、楽しいデュエルにしようぜ」

お互いにカードを五枚引いた。

「デュエル！」

恵遊 LP4000

昇平 LP4000

デュエルディスクが決めた先攻は昇平。

「さて、うまいこと揃うまではいつも通りに行くか。ていうか毎回初手には来てくれな
いんだけどなあ。まあいいか。モンスターとバックを一枚ずつセットして、ターンエン
ドだ」

「俺のターン。ドロロー！」

モンスターをセットしたか。

リクルーターなのか、それともまた何か別のものなのか……。

それにしても、昨日やった凜子とのデュエルとは違って、あまりにも遅い動い方である。

「俺は『おろかな埋葬』で『カードガンナー』を墓地に落として、『クレインクレイン』を召喚！墓地のカードガンナーを、効果を無効にして特殊召喚する！」

クレインクレイン ATK300 ☆3

カードガンナー ATK400 ☆3

「クレインクレインを使って蘇生するのか……」

「フェイバリットがハングリーバーガーだとするなら、カードガンナーはキーカードだ」

『禁止令』を使って『カードガンナー』と相手が言った瞬間にいろいろと止まるのだからマジで本当に。

「効果は無効にされるが、発動は別だ。カードガンナーの効果を発動して、デッキからカードを三枚墓地に送る」

……儀式魔人が落ちない。

「まあいいか……『儀式の下準備』を発動して、デッキから『ハンバーガーのレシピ』と『ハングリーバーガー』を手札に加える」

「昨日もそれ初手になかったか？」

「ハングリーバーガーの愛で初手に来てくれるのさ。『ハンバーガーのレシピ』を使っ

て、フィールドのクレインクレインとカードガンナーを材料にして、『ハングリーバーガー』を儀式召喚！」

ハングリーバーガー ATK2000 ☆6

「やつぱり来たか。だが、儀式魔人を使っていないバーガーなんて、怖くもなんともないゾ？」

確かに、昇平の言い分は間違っていない。

ハングリーバーガーのような儀式モンスターは、効果がなかったとしても『通常モンスター』ではない。

最初からエクストラデッキに投入されるモンスターもそうだが、効果がないだけで通常モンスターではないのだ。

効果モンスターではないので『ダイガスタ・エメラル』で蘇生できるし、『絶対魔法禁止区域』で魔法カードの効果をやっとダウンできるが、通常モンスターの共通サポートを受けられるわけではない。

……まあ、レベル3が多くランク4を作りにくい恵遊のデッキに『ダイガスタ・エメラル』は入っていないし、『最強の盾』などを使って攻撃力を上げる恵遊のデッキに『絶対魔法禁止区域』は入っていないが。

「だが、今のハングリーバーガーはただのハングリーバーガーじゃない」

「どういふことだ？」

「よく見るんだ。俺のハングリバーガーを！」

そう言うと同時に、観客も含めて、全員がハングリバーガーを見る。

気が付いたのは凜子だ。

「あ……具材が鶏肉！」

「そう、チキンバーガーなのさ」

ハングリバーガーは変なところを気にするのだ。

クレーンクレーンがすっかり調理されている。鶴が食卓に並ぶことは日本ではあまりないと思うが。

というかそもそも、種族は鳥獣族だけイラストから考えれば機械なのだが。

「カードガンナーは？」

「機械族なので食べられません」

「……で、それがどうした？」

「いや、別にたいしたことではない。が、せっかくモンスターが演出に貢献しているんだ。スルーされたらいやだろ」

「まあそれもそうだな」

からからと笑う昇平。

「デュエル続行！バトルだ！ハングリーバーガーでセットモンスターを攻撃！」

ハングリーバーガーがセットされている裏守備のカードに突撃する。

「残念だゾ。僕のモンスターは……」

カードが表になる。

それは……。

『方界胤ヴィジヤム』だ！

方界胤ヴィジヤム D F E O ☆ 1

「な……『方界』だど!?じゃあ、引き分けて言うのは……」

「察しの通り。僕のエースで、お互いのライフをフツとばすのさ。3000以下にならないように気を付けな！」

無茶苦茶な言い分である。

「方界胤ヴィジヤムの効果に寄り、このカードを永続魔法扱いで魔法、罨ゾーンに置く、そして、ハングリーバーガーに方界カウンターを一つ置く、アンディメンション化してもらおう」

ハングリーバーガー 方界カウンター0 ↓ 1

「うおっ！チキンバーガーが錆びていく！」

あまりビジュアル的には宜しくない感じになってしまったが、まあ、こうなつては仕

方がない。

「むう……俺はこれでターンエンドだ」

「僕のターン。ドロロー！よっしゃ。まずは永続魔法扱いのヴィジヤムをモンスターゾーンに特殊召喚！」

方界胤ヴィジヤム ATK0 ☆1

「そして、攻撃力1500以下のモンスターが特殊召喚されたことで、速攻魔法『地獄の暴走召喚』を発動！デッキから残り二体のヴィジヤムを特殊召喚！」

方界胤ヴィジヤム ATK0 ☆1

方界胤ヴィジヤム ATK0 ☆1

「ち……」

「僕はフィールドのヴィジヤム三体を墓地に送り、特殊召喚！現れる。『方界超帝インディオラ・デス・ボルト』！」

方界超帝インディオラ・デス・ボルト ATK0↓2400 ☆4
 「効果に寄り、800ポイントのダメージだ！」

恵遊 LP4000↓3200

「バトルだ！インディオラ・デス・ボルトで、ハングリーバーガーを攻撃！」

インディオラ・デス・ボルトの雷が、ハングリーバーガーを焼き払った。

恵遊 LP3200↓2800

「さあ、あつさり僕のドローラインに入ったな。僕はカードを一枚セットして、ターンエンドー！」

『引き分けの境界』か……初期ライフ4000だと面倒である。

「俺のターン。ドロー！」

方界は予想外だったが、それでも、何もできないわけではない。

ただ、クリムゾン・ノヴァのバーン効果は嫌いである。

墓地から発動するタイプのカードや手札誘発のカードをそれなりに多く投入している恵遊だが、そういったカードは、『モンスター効果として相手の効果を無効にする』ので、ほとんどの防御カードがクリムゾン・ノヴァには通用しないからだ。

『ダメージ・ダイエツト』などを使えば半分に抑えることが出来るといっても、そもそもクリムゾン・ノヴァは攻撃性能が高いので押し切られる可能性もある。

『プリベントマト』は入っているが、まだ来ていない。

「俺は手札から、装備魔法『契約の履行』を発動。800ポイントのライフを使って、墓地の『ハングリーバーガー』を特殊召喚！」

恵遊 LP2800↓2000

ハングリーバーガー ATK2000

「……ん？チキンバーガーじゃないのか？」

恵遊のフィールドでジツとしているハングリーバーガーは、普通の牛肉が使われていた。

「ハングリーバーガーがネタに走るのは儀式召喚時だけだ」

「ていうか、あれだけライフを減らさないように注意しろって言ったのに……」

「3000以下なら全部変わらん。それに、開き直れるくらいの感覚じゃないと、ファンデッキだと一瞬で食われるからな」

「……バーガーだけにか？」

「バーガーだけにだ」

本っ当に面倒である。

「俺は『巨大化』を使って、攻撃力を倍にする」

「何っ!？」

ハングリーバーガー ATK2000↓4000

なんだかんだ言って大きくなるハンバーガー。

すごくシユールな光景である。

「バトル！ハングリーバーガーで、インディオラ・デス・ボルトを攻撃！」

巨大ハンバーガーから射出される円盤型の牛肉がインディオラ・デス・ボルトをぶち

抜いた。

「うおおっ?!」

昇平 LP4000↓2400

「だが、インディオラ・デス・ボルトの効果発動。墓地のヴィジヤム三体を特殊召喚！」

方界胤ヴィジヤム DFE0 ☆1

方界胤ヴィジヤム DFE0 ☆1

方界胤ヴィジヤム DFE0 ☆1

「そして、デツキから方界カード『暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ』を手札に加える。悪手だったな」

「んなこと知らん。俺はカードを一枚セットして、ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロー！」

「畏発動。『針虫の巣窟』！デツキからカードを五枚墓地に送る！」

恵遊は昇平が舌打ちしたのを見逃さなかった。

「……『プリベントマト』でも落ちたか？」

「ああ。そうだが」

「なら、せめてそのバーガーをどうにかするか……ていうか、昨日の『最強の盾』といい、今日の『巨大化』といい……元々の攻撃力が2000とは思えない攻撃力だゾ？」

「愛だ」

「……もう何も言わんぜ。ヴィジャム三体を墓地に送り、今度はこつちだ。『方界超獣バスター・ガンダイル』!」

方界超獣バスター・ガンダイル ATK0↓3000 ☆4

「そして、永続魔法『ドン・サウザンドの契約』を発動」

「うぐ……」

「このタイミングでそれか……」

「発動時の効果処理として、お互いに10000のライフをはらう。そして、カードを一枚ドロウする」

恵遊 LP20000↓1000

昇平 LP24000↓1400

やはりと言うかなんとか、入っていたな。

実際問題、この契約を初手で発動すれば、その瞬間にお互いにライフが3000になる。

そこからクリムゾン・ノヴァを出せば、そのターン終了時にデュエルが終了するのだ。カード二枚を使ってお互いに吹き飛ぶのだ。某上司のセリフを使わせてもらおう。

「まるで意味がわからんぞ!」

「そして、このカードの効果でドロウしたカードと、このカードが存在する状況で引いたカードを公開する。この効果で魔法カードを見せていると、通常召喚はできないぜ」

「ち……………ドロウ！」

「ドロウ！」

惠遊が引いたのは……………。

「俺が引いたのは『ハネワタ』だ」

手札誘発の効果ダメージに対する防御カードだ。

これで何とかなる。

ついでに言うともンスターなので、通常召喚も阻害されない。

「僕が引いたのは……………『一時休戦』だ」

「……………」

「……………」

「……………惠遊君」

「……………なんだ？昇平」

「何か言えよ」

「無理」

昇平は一時休戦を魔法、罨ゾーンにたたきつける。

『一時休戦』を発動。お互いにカードを一枚ドロ。次の君のターン終了時まで、全てのダメージが0になる」

一時休戦で恵遊が引いたのは『馬の骨の対価』で、昇平が引いたのは『強欲な瓶』だ。
「一枚セット、ターンエンドだ」

瓶を伏せたか。

「俺のターン。ドロー！」

「契約の効果だ。開示してもらおう」

「……『至高の木の実』だ」

なんか、一歩遅かった感じがあるな。

「まずはバトルだ。ハングリーバーガーで、バスター・ガンダイルを攻撃！」

今度はレタスを射出する。

『一時休戦』の効果でダメージはなしだ。バスター・ガンダイルの効果で、墓地のヴィジャムを三体、特殊召喚する！」

方界胤ヴィジャム DFE0 ☆1

方界胤ヴィジャム DFE0 ☆1

方界胤ヴィジャム DFE0 ☆1

また出やがったなパーツども。

「そして、デツキから『流星方界器デューザ』を手札に加える」

むう、それか。

まあいい。

「『至高の木の実』を発動。ライフを2000回復する！」

惠遊 LP1000↓3000

発動しない理由にはならない。

ちなみに、惠遊の方がライフが多くなったので、攻撃力が変化する。

ハングリーバーガー ATK4000↓1000

今度は逆にものすごく小さくなった。

「そして、ハングリーバーガーをリリースして、『馬の骨の対価』を発動。カードを二枚ドロースる」

「馬の骨なんて使われてないだろ」

「知らない」

「ここで凜子が聞いて来る。

「というより、該当するモンスターがハングリーバーガーしかないと思うけど、何でいれるの？」

ドロースースとしては他のカードがいいのでは？と言うことだろう。

「いや、ハングリーバーガーに変な効果が付与されると困るからな。俺のデツキはハングリーバーガーを活躍させるデツキだから、相手によつて変な付与をされると回避しにくいから、リリースして手札に変換できるカードを入れてるんだ」

ハングリーバーガーはレベル6の儀式モンスターで、閥属性・戦士族だ。

やろうと思えば「儀式聖刻」でもいいし、ディアボリックガイが投入される「シンクロダーク」で無理矢理投入することも不可能ではない。

そうなれば、ビヨンドやレベル8のシンクロモンスターも採用できるので、安定するかどうかは手札次第だが、少なくとも打開力の問題は解消される。

だが、そう言ったデツキは、ハングリーバーガーは展開の軸になるだけであつて、ハングリーバーガーが活躍するデツキではない。

だからこそ、恵遊は、できる限り「正規儀式」に『ハングリーバーガー』を軸にしてデツキを組んでいるのだ。

「……でも、ハングリーバーガーでそこまでのデツキ構築ができるんだから、絶対ほかのデツキでもうまくできるよね」

「最初は「カオス・ソルジャー」で練習してた」

そのセリフを聞いたみんなが思った。

『そのまま使つてればいいのに』と。

「あ、恵遊君。契約の効果は、カード効果でドロートしたカードを含まれるよ」

「え？あ、そうだったな。俺がドロートしたのは『儀式の準備』と『カードガンナー』だ」
ドロートしたカード二枚を昇平に見せる。

当然といえば当然だが、昇平は苦い顔をした。

「俺はこれでターンエンドだ」

恵遊の手札は四枚で、その内三枚は『儀式の準備』『カードガンナー』『ハネワタ』と分からね一枚。

三枚も見せている感じだが、いずれにせよ、そこまで苦労はしていない。

「僕のターン。ドロート！なんか調子が狂うな」

「よく言われるぞ。というか、こんな変態アツキにここまで苦戦するなんて思ってもいなかっただろ」

「まあぶっちゃけな……」

「何のカードをドロートしたんだ？」

「ああ……」

昇平はドロートしたカードを見る。

……が、ドロートしたカードをこちらに見せようとしな

「……どうしたんだ？」

「あ……いや……僕がドロートしたのは、『ゴーストリックの雪女』だ」

——空気が凍った気がした。

ゴーストリックの雪女。

言ってしまうば、『ロリ』である。

「……」

「……」

「……惠遊君」

「……なんだ？」

「どうしたらいいとおもう？」

「いや、まあ、なんだろう。効果はそれなりに強いし、いいんじゃないか？」

ゴーストリックの雪女

効果モンスター

星2／闇属性／魔法使い族／攻1000／守 800

自分フィールド上に「ゴーストリック」と名のついた

モンスターが存在する場合のみ、

このカードは表側表示で召喚できる。

このカードは1ターンに1度だけ裏側守備表示にする事ができる。また、このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動できる。このカードを破壊したモンスターは裏側守備表示になり、表示形式を変更できない。

カードwikiより引用

セットして置けば、何も知らなければとりあえず攻撃はされるだろう。

そうなれば、相手モンスターが裏側になるし、表示形式の変更もできないので、はっきり言うと、恵遊のような『低ステータスの特定のモンスターを活躍させるデッキ』にはかなり刺さる。

『対象に取らない』上に、『ダメージステップでの発動』なのだ。

なんだかんだ言って発動されると厄介なのは間違いない。
が……なんだろうなっておもうのだ。

「……デュエル続行！」

昇平は無理矢理に進めることにしたようだ。

あんなに飄々としていたのに、今ではややくそな男である。

まあ、自分のデッキのアイドルカードが暴露されてしまったのだ。無理もない。

さて、『ゴーストリックの雪女』『暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ』『流星方界器デューザ』

伏せカードの一枚である『強欲な瓶』はまだ使っていない。

どう来るのだろうか。と言うより、方界カードを引きこまないとクリムゾン・ノヴァを出すことは不可能なので、それ相応にギミックは必要になるが……。

「まず、『流星方界器デューザ』を召喚して、デッキから『方界業』を墓地に送り、除外して、デッキからクリムゾン・ノヴァを手札に加える」

流星方界器デューザ ATK1600 ☆4

二枚目をサーチしたか。

「そして、ヴィジヤム二体で『アカシック・マジシャン』をリンク召喚して、リンク先のデューザを手札に戻す」

アカシック・マジシャン ATK1700 LINK2

守備表示で特殊召喚しているヴィジヤムは一体なら残しておいてもいいと思ったの
だろう。

……ん？

「そして、伏せていた『悪夢再び』を使って、ヴィジヤム二体を墓地から手札に加える。
そして、デューザとヴィジヤム、クリムゾン・ノヴァを見せることで、特殊召喚！現れ

ろー！『暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ』！」

暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ ATK3000 ☆10

「ついに来たか……」

「そうだな。で、ターン終了だ。お互いに、3000のダメージを受ける」

「チェーンして『ハネワタ』を墓地に送って効果ダメージを0にする」

「僕もチェーンして、『ピケルの魔法陣』を使って、ダメージを無効にする」

「これで、昇平の瓶以外の伏せカードはなくなった。」

「俺のターン。ドローー！」

ドローしたのは……。

「『サイクロン』だ。いい加減に鬱陶しい『ドン・サウザンドの契約』を破壊する！」

契約が吹き飛んだ。

これで手札の公開は終わりである。

「俺は『カードガンナー』を召喚して、効果発動、デッキから三枚を墓地に送って攻撃力を上昇させる。『儀式の準備』を使って、デッキの『ハングリーバーガー』と、墓地の『ハンバーガーのレシピ』を手札に加える。そして、『ハンバーガーのレシピ』を発動。手札の『サクリボー』と、墓地の『儀式魔人プレサイダー』と『儀式魔人デザイナーズ』を使って、『ハングリーバーガー』を儀式召喚！」

カードガンナー ATK400↓1900 ☆3

ハングリーバーガー ATK2000 ☆6

「サクリボーの効果で一枚ドロ。ハングリーバーガーに『最強の盾』を装備」

ハングリーバーガー ATK2000↓3850

なんだかんだ言って攻撃力が3000を平気で超えるハンバーガー。

これでハンバーガーの株が上がれば……どうなるんだろうな。よくわからん。

「バトル！ハングリーバーガーで、クリームゾン・ノヴァを攻撃！」

「……」

昇平 LP1400↓550

「プレサイダーの効果に寄り一枚ドロ。そして、カードガンナーで『アカシック・マジ

シャン』を攻撃！」

「『強欲な瓶』を発動して、一枚ドロするゾ」

昇平 LP550↓350

一体何を引いた？

「これでターンエンドだ」

「ま、そんなもんだと思ってたゾ。手札の『D・D・クロウ』を墓地に送って、恵遊君の墓地の『プリベントマト』を除外する」

「な……しまったー！」

このタイミングで、ピンポイントでクロウを引いてくるとは……。

「僕のターン。ドロー！」

カードを引いた昇平は、手札に残っていたエースを手取る。

そして……。

『流星方界器「デューザ」』『方界胤「ヴィジヤム」』『方界業』

暗黒方界神「クリムゾン・ノヴァ」 ATK 3000 ☆10

「楽しかったぜ。恵遊君。またやろうな」

ターンエンド。と、昇平は呟く。

恵遊 LP 3000 ↓ 0

昇平 LP 350 ↓ 0

★

「まさか。あそこで鳥が飛んでくるとは思わなかったな……」

「恵遊君は墓地に防衛カードをため込むスタイルだから、攻撃されても問題はなかったけど、効果ダメージに対しては若干防衛しづらいもんね」

「クリムゾン・ノヴァをあそこまで喜々として採用する人が相手っていうのもあるけど

……」

それはまあいい。

「マスターランク……か。あんなのがあと九人もいるってことだよな」

「タクティクス的には、多分ちよつとしたじゃないかな。引き分けでずつといるわけだし」

「それもそうだが……」

強いやつもいるってことなんだろうな。

「まあ、関係ないか」

「あ、そう言う感じなんだ」

「だって、別に順位に興味があるわけじゃないからな」

どこまで行こうと、恵遊の動機は変わらない。

ハンバーガーを食べられるのなら此処にいるし、食べられない環境になるのなら退学だって視野に入れる。

その優先順位は、恵遊の中では変わらないのだ。

ただ……恵遊としても忘れられないことはある。

それは……。

「そう言えば、昇平君って、『ゴーストリックの雪女』を入れてるんだね」

「そこは触れない方がよいぜ」

誰もが一度は通る道だ。多分。

第三話

「美咲様。どう思いますか？あの編入生」

デュエルスクール・ボーダーには『エキセントリック・テンス』と呼ばれる十人のデュエリストが存在する。

ただし、彼らは『エキセントリック・テンス』と言う名の『称号』が与えられているだけで、学校内で権限を持っている訳ではない。

ただし、実力者であることも確かで、ボーダーと提携している企業や団体が用意する特設サービスを利用できる。

久我昇平のように、デュエルコートを丸ごと一つ『常備』されているほど。

ただし、彼の『序列零位』というのはあまりにも特殊なもので、与えられているサービスがやや中途半端なものになっているが、それでも、エキセントリック・テンスであることに変わりはない。

一位と零位が決まっており、二位から九位は決められていない。

ただ、これがどういふことなのかと言うと、『最強』が誰なのか判明している。ということだ。

かみしろみさき
神代美咲

ボーダーの中では最強であり、他者を寄せ付けないデュエルセンスを持っている。金髪を伸ばしており、容姿も完成しているといっても過言ではない少女だ。

中等部三年であり、まだ高等部にすらなっていないが、それでも、スタイルもよく、風格はある。

そのそばに居るのは、黒髪を肩のあたりで切りそろえた少女。

名前は鹿島朱里。
かしまあかり

エキセントリック・テンスではないものの、非公式ランキングではプラチナエリアで、『女王の門番』の二つ名を持つデュエリストである。

「どう思う。とは?」

「久我昇平とのデュエルを見ましたが、そこまでのタクティクスを持っているとは思えません」

「そうでしょうか。私は、『ハンバーガー一個分のプレイングをする』と言って、あのデュエルをしていると記憶しています」

「ですが、そんなものは建前でしょう」

「ふふふ……私はデュエルを試みたいものです」

美咲は微笑む。

そこには、久我昇平とデュエルをする恵遊のデュエル映像が写っている。

「……美咲様が相手するほどのデュエリストではありません」

「それはいいのです。彼が私とデュエルをする理由はなく、私が彼とデュエルをするメリットはない。ただ、私は戦ってみたい。それだけですから」

美咲は微笑む。

朱里は、普段は見せない『本当の笑顔』を見せる美咲に驚くが、すぐに表情を戻す。

「……今日、私がデュエルをします。美咲様とデュエルするほどの者ではないことを証明しましょう」

そういつて、朱里は部屋を出ていった。

美咲は、そんな朱里を見ながら、あらあら、と呟く。

「さて、どうしたものでしょうね」

そういうながらも微笑む美咲は、面白いものを見つけたような顔だった。

★

「青芝恵遊。私とデュエルをしろ」

有言実行。即断速結。

鹿島朱里というのはそう言う人間である。

証明する。と言った以上、デュエルをしに来るのは分かり切ったことだ。

しかし……。

「やだ」

惠遊の方にやる気がないのもまた事実である。

というより、この変人。頭のネジが外れているというより、そもそも頭がネジで止まっっていない。

一応、誘拐されたのでそれを助けるためにデュエルで勝つことが必要だったり……まあ、ハンバーガーが関係なくとも、別に人としてクズではないので、それ相応の事情があれば、さすがの惠遊もデュエルはする。

だが、今回の場合は完璧に朱里の私情であり、そもそも、惠遊の方は朱里とは初対面で、どんな人間なのか、誰の近くににいる人間なのかがさっぱりわからないのだ。

「何故だ。デュエルに挑まれたらするのがデュエリストの義務だろう」

そんな義務はありません。低評価が発生することはあっても、別に義務はありません。

「まあまあ、朱里ちゃん。惠遊君はハンバーガーがないと交渉の余地もない人だから……」

「何を言っている。たかがハンバーガーでデュエリストがデュエルを拒否するなど、言語道断だ」

言っていることが正しいのか、正しくないのかよくわからない次元の話である。

というより、朱里のようなタイプの間人は、人が何を言っているのか、そして、自分が何を言っているのかをあまりわかっていないタイプの人間だ。コミュ障とも言う。

ちなみに言うと、彼女の主人（？）である美咲は先ほども言ったが中等部三年で、朱里は高等部一年だ。

「そもそも、なんで俺がデュエルしなけりやならんのだ」

「美咲様の相手をするまでもない相手であることを証明するためだ」

「ええ？」

恵遊は「何言ってるのこイツ」見たいな目で朱里を見るが、朱里のような人の話を聞かない上に自分の意見を通したがる人間の特徴、『途中経過の説明がない』がモロに出ているので、はつきり言って意味が分からない。

だが、こういうとき補足説明してくれる人間と言うのはいるものだ。

幸原茜である。

苦労人の才能がある彼女は、こういうときに察してくれるのだ。

「ええと……朱里ちゃんは、エキセントリック・テンスの序列一位の人の従者なの」
「ふんふん」

「多分、その人が、恵遊君とデュエルをしたい。見たいなことを言ったんだと思う」

「ふむふむ」

「それで、朱里ちゃんが暴走して、恵遊君をコテンパンにすることで、証明すると言った感じだと思うよ」

「私は暴走などしていいぞ」

暴走していい。というの、あくまでも『いつも通り』と言う意味である。

恵遊のような人間とは少々視点が異なるのだ。

「……なら、君の主人に伝えておいてくれ。『青芝恵遊は期待外れだった』ってな」

「バカにしているのか！」

「バカにしているじゃないさ。俺だって、自分が最強じゃないと思っっているし、最強になりたいわけじゃない。デュエルに関して、そこまで上達思考があるわけもないしな」

デュエルスクールに通う生徒としては珍しく、デュエリストとしてのプライドがない。

あくまでも、存在するのはハンバーガーに対する愛だけだ。

今もむしやむしやと食べているし。

「それよりも、食べながら話すのはマナー違反だということを知らないのか！」

「……今更マナーなんていわれてもなあ……これが俺の普通だぞ」

一応、朱里に分配がある。

惠遊がハンバーガー中毒者だということはみんなも知っているが、食べながら話すことがマナー的によいわけではない。

「第一、ハンバーガーなんて下らないものに執着していることが理解できん」
周りの人間は、この瞬間、『おっ』と思った。

惠遊はハンバーガー中毒者である。

そして、ハンバーガーを愛しているといつても過言ではない。

そんな惠遊に向かって、ハンバーガーが『下らないもの』といったのだ。

惠遊がいつもと違った反応をするのではないか？と思ったのである。

が……。

「人の好みは好き好きだろ」

別に対して気にしていないようだ。

周りに「あれえ？」という空気が充満するが、あまり気にしている様子はない。

「むう……とにかく、私とデュエルをしろ。これは命令だ！」

「却下」

取り付く島もない。

まあ、朱里も朱里だが、惠遊も惠遊。

そもそも頭の中がハッピーセットなのだ。

でなければ、攻撃力的なデツキパワーで普通なら負けるはずの『レッド・デーモン』を上から叩いて倒すなどと言う暴挙には出ないだろう。

というか、恵遊が使うハングリーバーガーは、カードに愛されていることもあるだろうが、攻撃力がインフレししやすいのだ。

昨日に至っては、サイエンにタイマン張れる攻撃力になったのだ。攻撃力が高いからどうか言っているサイバー流が血の涙を流しても不思議ではない。周りからすれば意味が分からない。

「まあまあ、恵遊君。私のこのハンバーガーを上げるから、一回だけデュエルしてあげなよ」

凜子がハンバーガーを持ってきた。

「おっ。これは……」

予約で、しかも先着十名しか入手できないハンバーガーだ。

恵遊はこれを食べようと思っていたのだが、実は予約品がもうひとつかぶっていたので、一つをあきらめるしかなかったのだ。

さすがの恵遊も、体が二つあるわけではない。

「いいのかわ？」

「うん。いいよ」

「なるほど。いいだろう。相手をしてやる」

「ついでに私と交際しよう！」

「却下」

即答する恵遊である。

あからさまにしよんぼりする凜子。

「な……なんだこれは、私に変なのか？」

……どうなのだろう。

別に、朱里が特別、変と言うわけではないだろう。

世の中には人の話を聞かない人間も、自分の言っていることがいつも正しいと思っ
ている人間も、どこにでも一定数いるもので、身近にいるかどうかはともかく、別に珍
しいものではない。

朱里は変と言うよりは『厄介』である。

少なくとも、ここまでハンバーガーに執着する恵遊の方が珍しいと判断できる。

まあそもそも、昨日の恵遊と昇平のやり取りを見ているものからすれば、デュエルを
挑むときはとりあえずハンバーガーを持ってきておけば、必要な会話を地平線の外まで
蹴り飛ばしてデュエル出来ることは分かる。

それはそれとして、デュエルすることは決まった。



で、デュエルコートが空いていたので、そこに行くことにした。

ここで、ギャラリーの説明が聞こえてくる。

『次は『女王の門番』か』

『かなりの実力者を連続で相手してるぞ』

『聖野凜子だつて、ほぼプラチナエリアだもんな』

『ああ。で、どんな感じなんだ？』

『プライバシーブレイカーによると、神代美咲が青芝恵遊とデュエルしたい。みたいなことを言つて、バカが暴走したつて感じた』

『……デュエルをしたいという主人の意見を尊重するわけではないんだな』

『今更だ』

『話を戻すぞ。で、勝敗によつてはどうなるんだ？』

『わからん。おそらく、今回のデュエルだけで何かが決まるわけではないと思うぞ』

まあ、いろいろ話しているが……デュエルすることには変わりはない。

朱里が反対側でデュエルディスクを構える。

「証明するためだ。本気で行かせてもらおう」

「手加減できるような器用さを持つているようには見えないけどな……まあいいや、折

角の良いハンバーガーをもらったんだ。その分は答えよう」

恵遊もデュエルディスクを構える。

そして、お互いにカードを五枚引いた。

「デュエル！」

恵遊 LP4000

朱里 LP4000

「私の先攻。手札から、フィールド魔法『機動要塞フォルテシモ』を発動！」

「な……フォルテシモだ?!」

あたりの景色が機械的なもの変わる。

このカードを発動するということは……。

「【機皇】デッキってことか……」

「その通りだ。私はフォルテシモの効果で、『機皇兵スキエル・アイン』を守備表示で特

殊召喚！」

機皇兵スキエル・アイン DFE1000 ☆4

「そして、手札の『機皇兵ワイゼル・アイン』を召喚！」

機皇兵ワイゼル・アイン ATK1800 ☆4

「それぞれの効果が適用され、攻撃力が上昇する」

機皇兵ワイゼル・アイン ATK1800↓1900

機皇兵スキエル・アイン ATK1200↓1400

まあ、スキエル・アインは守備表示なのであまり意味はないが。

「さらに『機皇帝の賜与』を使って二枚ドロ。攻撃できないデメリットはあるが、先攻のため関係はない。カードを二枚セットして、ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロー！」

さて、機皇には驚いたが、本場のシンクロドレインは恵遊を相手には影響力を持つものではない。

ただ、そう言ったことが関係しているような雰囲気はない。

となれば……。

「『カードガンナー』を召喚して、デッキトップを三枚墓地に送って攻撃力を上昇させる」

カードガンナー ATK400↓1900 ☆3

「毎回出て来るな……」

「そうじゃないとデッキが回らないからな。ついでにこつちもあるぞ。『儀式の下準備』を發動して、デッキから『ハンバーガーのレシピ』と『ハングリーバーガー』を手札に加える」

「貴様のハングリーバーガーは精霊でも宿っているのか？」

呆れたような朱里のツツコミに、恵遊はニヤツと笑う。

「さあ、どうだろうな。俺は『ハンバーガーのレシピ』を使って、墓地のカーズエンチャンター、デイザーズ、手札のサクリボーを素材に、『ハングリバーガー』を儀式召喚！サクリボーの効果で一枚ドロ。『最強の盾』を装備」

ハングリバーガー ATK2000↓3850 ☆6

「カーズエンチャンターを入れているとは……」

「まあ、刺さりにくい時はあるが、不必要と言うわけではないからな」

エクシーズや融合、リンクを防げるわけではない。

ただ、シンク口を何とかできるというのは、ある意味で強みだ。

とはいっても、今回の場合はあまり意味があるとは思っていないが。

それに、3850のハングリバーガーを見ても気にしていないようだし。

「バトル！ハングリバーガーでワイゼル・アインを攻撃！」

「罫カード『マジカルシルクハット』を発動。フィールドのワイゼル・アイン、デツキの『機皇城』と『歯車街』をセットして並び替える」

因みに、スキエル・アインの攻撃力はこのタイミングで変化しているが、守備表示なので大した違いはない。

「し……シルクハット……しかもその二枚か」

一応合理的ではあるが厄介なことをするやつである。

「……真ん中のシルクハットを攻撃する」

「破壊したのはワイゼル・アインだ。的中したのはいいが、どうする?」

「ここでカードガンナーで攻撃してもあまり意味はない。

スキエル・アインはリクルーターだ。

攻撃しても、多分、グランエル以外の機皇兵が飛んでくるだけである。

「バトルフェイズは終了だ」

「この瞬間、セットしていた機皇城と歯車街が破壊される、そして、この二枚がフィールドで破壊されたことで、それぞれの効果を発動。城の効果でデッキから『機皇帝グランエル∞』を手札に加える」

「グランエル……ワイゼルじゃないのか?」

ワイゼルは魔法カードの効果が無効にできる効果がある。

ハングリーバーガーを強化していくデッキである恵遊を相手にするのなら、そちらの方がいいと思うのだが……。

「どうするかは私の自由だ。街の効果で、デッキから『古代の機械巨竜』を特殊召喚!」

古代の機械巨竜 ATK3000 ☆9

熱核竜じゃない。ということは、レベル8を利用するギミックが存在するのか?

「……だが、俺のハングリーバーガーの方が攻撃力は上だぞ」

「一昨日から思っていたが意味が分からん」

サポートが豊富なんだよ！

「墓地のADチェンジャーでカードガンナーを守備表示に変更。カードを一枚セットしてターンエンドだ」

カードガンナー ATK1900↓DFE400

「私のターン。ドロー！まずは『一族の結束』『補給部隊』を発動して、スキエル・アインを攻撃表示に変更。バトルだ！ガジェルドラゴンで、カードガンナーを攻撃！」

古代の機械巨竜 ATK3000↓3800

機皇兵スキエル・アイン ATK1200↓2000

「チツ……カードを一枚ドローする」

少々面倒だが、まだ越えられないはずだ。

「ふむ、まあいい。グランエルをサーチした意味が分からないと言ったな。確かに、普通なら貴様が言った通りワイゼルだろう。だが、このカードがあることで、その常識は覆るのだ。罫カード『デストラクト・ポーシヨン』を発動！」

「な……デストラクト・ポーシヨンだと!?!」

「この効果により、古代の機械巨竜を破壊して、その攻撃力分、3800ポイントのライ

フを回復。そして、モンスターが破壊されたことで、手札の『機皇帝グランエル∞』を特殊召喚！」

古代の機械巨竜が爆散、栄養分(?)となると同時に、グランエルが姿を現す。

朱里 LP4000↓7800

機皇帝グランエル∞ ATK0↓3900↓4700

機皇兵スキエル・アイン ATK2000↓2200

『一族の結末』がクソウザい。

機皇デツキにここまで適したカードだったとは……。

『補給部隊』で一枚ドロロー。まだバトルフェイズ中だ。機皇帝グランエル∞で、ハングリーバーガーを攻撃！」

「墓地の『ネクロ・ガードナー』を除外して、攻撃を無効にする！」

キャンオンを構えたグランエルが撃ってきたが、ネクロ・ガードナーが防いだ。

「スキエル・アインを攻撃表示にしたのは失策だったか。カードを一枚セットしてターンエンド」

「俺のターン。ドロロー！」

グランエルの攻撃力はライフの半分。一族の結束があるので、厳密にはそれよりも800ポイント多くなっているのが現状だ。

攻撃力4700というのはバカにはできない数字。

恵遊のハングリーバーガーも攻撃力は高くなるが、それでも、これは少々骨が折れる。というか、シンクロ関係のカードはほとんど投入されていないのだろうか。

「デッキトップを一枚墓地に送って『アームズ・ホール』を発動。デッキから二枚目の『最強の盾』をサーチして、そのままハングリーバーガーに装備させる」

既に盾を一枚構えていたハングリーバーガーだが、もう一枚出現した盾を見て「おつ」と言いたそうな顔（表情とかないけど）をして、二枚目が添えられた。

ハングリーバーガー ATK3850↓5700

「な……こ、攻撃力、5700だど!?」

「一昨日の凜子は7300なんて馬鹿げた数字を叩きだしてたぞ」

後ろで凜子が胸を張っているのがなんとなく分かったが、無視しておくとしよう。

「バトル！ハングリーバーガーで、機皇兵スキエル・アインを攻撃！」

「え？」

「何を戸惑っている。攻撃力が低い方を叩くのは当然だろ」

ハングリーバーガーは二枚の『最強の盾』を肉とトマトの間にはさむと、一気に射出する。

スキエル・アインに直撃して、残骸に変えた。

朱里 LP7800↓5300

機皇帝グランエル∞ ATK4700↓3450

あまり減った気がしないのは恵遊が疲れているからだろう。

というか、グランエル∞の攻撃力がまだ高いし。

「補給部隊で一枚ドロウする……そして、スキエル・アインの効果に寄り、デッキから二体目の『機皇兵ワイゼル・アイン』を特殊召喚！」

機皇兵ワイゼル・アイン ATK1800↓1900↓2600 ☆4

「まあ、そうなるか。俺はカードを一枚セットしてターンエンドだ」

「私のターン。ドロロー！」

朱里は二枚の手札を見る。

だが、何をするかはある程度決まっているようだ。

「私はグランエル∞を手札に戻して、『A・ジェネクス・バードマン』を特殊召喚！」

グランエルが消えるとともに、機械の鳥が出現する。

A・ジェネクス・バードマン ATK1400↓1700 ☆3

「レベル7のシンクロ召喚か」

「その通りだ。私はレベル4のワイゼル・アインに、レベル3のジェネクス・バードマンをチューニング！シンクロ召喚！レベル7『ダーク・ダイブ・ボンバー』！」

ダーク・ダイブ・ボンバー ATK2600↓3400 ☆7

単体で見ると攻撃力2600と言うモンスターなのに、『一族の結束』でドエライ攻撃力になっている。

だが、ハングリーバーガーの方が攻撃力が上だ（周りからすれば意味不明）。

「そして、『強欲で貪欲な壺』を使って、デッキから十枚除外して二枚ドロロー。よし。『悪夢再び』を使って、墓地のワイゼル・アインを二体回収。そして、ダーク・ダイブ・ボンバーの効果を発動。このモンスターをリリース！1400ポイントのダメージだ！」
ダーク・ダイブ・ボンバー

無制限↓禁止↓エラツタ後に無制限という謎の変貌を遂げたモンスターだ。

ただ、このモンスターの存在に寄り、『シンクロ使いを相手にした時のデッドラインが1400』ということを意味する。

さらに言えば、元々の攻撃力が2600なので、殴ることができないわけではないのだ。だ。

エラツタ前は、このカードの攻撃力2600+このモンスターをリリースした効果ダメージ1400で4000に到達するため、ライフが8000あっても問題ないのだ。『サモプリサモプリキャットベルンベルン』は今でもみんなの頭に残っているだろう。

とはいえ、である。

恵遊 LP4000

「な、何故だ！なぜ私がリリースしたダーク・ダイブ・ボンバーの効果が……」

「……ああ、見た目が単なるハンバーガーだし、さつきから攻撃力がインフレしていたから覚えてないのか？俺のハングリーバーガーの『儀式素材』」

「素材……あ……」

「カースエンチャントを素材にしたハングリーバーガーが存在する限り、シンクロモンスターは効果が無効になる。ダーク・ダイブ・ボンバーの効果はリリースして発動するから、墓地には送られるが、その後発動する効果は無効になる」

まあ、自分のシンクロモンスターも効果が使えないのだからな。

ハングリーバーガーがドヤ顔である。

「ぐ……だがまだだ！私は手札のグランエル ∞ と、ワイゼル・アイン二枚を墓地に送る、現れろ！『機皇神マシニクル ∞ ！』」

機皇神マシニクル ∞ ATK4000 \downarrow 4800 ☆12

「ま……マシニクルだと!?……おい、ちよつと待て、まさかその伏せカードは……」

「貴様の察しの通りだ。『ギブ&テイク』を発動！私の墓地のダーク・ダイブ・ボンバーを貴様のフィールドに特殊召喚！」

ダーク・ダイブ・ボンバー DFE1800 ☆7

「そして、私のマシニクル∞をレベルアップ！」

機皇神マシニクル∞ ☆12↓19

「れ……レベル19!?!」

ダーク・ダイブ・ボンバーでレベル20のモンスターをリリースすれば、相手のライフを4000吹き飛ばすことができることを考えると驚異的である。

(ちなみに、朱里は完璧に忘れていたが、墓地にはレベル8の『古代の機械巨竜』が存在するので、別にできないわけではない)

「そして、マシニクルの効果で、ダーク・ダイブ・ボンバーで吸収する！」

機皇神マシニクル∞ ATK4800↓7400

うわ、エグイ。

「私の記録が更新された！」

別に狙ってはないと思うよ。

「機皇神マシニクル∞で、ハングリーバーガーを攻撃！『ザ・キューブ・オブ・デイスぺア』！」

ハングリーバーガーが慌てたように盾を構え……いや、手はないので足……もないので体をひねって『移動させる』が、それをぶち抜いて破壊される。

なんていうか、『手も足も出ない』というのをなんとなく理解した気がする。

「うああああー！」

恵遊 LP4000↓2300

だが、それでも『最強の盾』の名は伊達ではなく、ダメージはそうでもない。

まあ、相手の攻撃力を考えれば、と言う話だが。

「フーン！私はこれでターンエンドだ」

「俺のターン。ドロー！」

さて、限定バーガー分のプレイングはするといったからな。そろそろ全力で行くぞ！

「そろそろ本気で行くか」

「手札三枚で何ができる」

「いろいろだ。限定バーガーをもらって気分がいいんだ。俺のエクストラデッキのモンスタースターが顔を出すぞ」

「な……やはり、切り札はハングリーバーガーではなかったということか……」

まあ見ている。

「まずは『契約の履行』を使って、ライフ800をコストに、ハングリーバーガーを蘇生
！」

恵遊 LP2300↓1500

ハングリーバーガー ATK2000 ☆6

「そして罫カード『融合準備』を発動。エクストラデッキの『ユーフォロイド・ファイター』を見せることで、デッキの『ユーフォロイド』と墓地の『融合』を手札に加える」
「な……………え？」

「魔法カード『融合』を発動。フィールドのハングリバーガーと、手札のユーフォロイドを素材にして、融合召喚！現れる。レベル10『ユーフォロイド・ファイター』！」
……………皆さん。思いだしてほしい。

カードのイラストにおいて、ユーフォロイドの上に乗っていたモンスターのことを。

あれは、一体、なにが乗るのかを。

そして、今回の場合は何が起るのかを。

そういうことだ。

バーガー・オン・ザ・ユーフォー！

ユーフォロイド・ファイター ATK3200 ☆10

「な……………何だそのモンスターは……………」

朱里という人間は、まあ、美咲に陶酔しており、自己中心的な性格だが、一応『真面目』の分類に入る。

そのわりに三つくらい絶望があるのか「機皇」を使っているが、まじめである。

とてもじゃないが、ここまでネタに走るモンスターなど見たことが無い。

「……攻撃力もそこそこ高いね」

「あれ？茜ちゃん。戦士族ギミックで攻撃力を上げるなら『ズババジエネラル』じゃないの？」

「確かにそれもあるけど、恵遊君のデッキはレベル3が多く投入されていて、ランク4が採用しづらいんだよ。入っていないわけじゃないと思うけど、多分、出せる時に出すつて感じなんじゃないかな」

「そう言う感じかな？」

「多分ね。あと……」

「あと……何？」

「『一時的な爆発力』ということを考えれば、『機械族の融合モンスター』は驚異的だよ」
「え？」

さて、色々後ろで話しているようだが、さっさと行こうか。

「そして、速攻魔法『リミッター解除』を発動。機械族モンスターの攻撃力を倍にする！」

ユーフォロイド・ファイター ATK3200↓6400

「む……だが、まだ私のマシニクルの方が攻撃力が上だ！」

「『どれほど高かろうと意味はない』んだ。バトル！ユーフォロイド・ファイターで、機皇神マシニクルを攻撃！そして速攻魔法『決闘融合ーバトル・フュージョン』を発動！」

「そ……そのカードは……」

「これにより、ユーフォロイド・ファイターは、相手モンスターの攻撃力分アップする！」

ユーフォロイド・ファイター ATK6400↓13800

「……攻撃力、13800だと！」

「さあ！決闘終了だ！ユーフォロイド・バー……じゃない、ユーフォロイド・ファイター

で、機皇神マシニクルを攻撃！」

文字通りのリミットを外したレベルの『肉部分の回転』が発生。

オーバーヒートレベルの発熱によりハンバーガー部分が黒焦げになりながらも、ユーフォロイド・ファイターは肉を射出。

機皇神マシニクルは、「なんでこんなことに……」と言いたそうな表情で、高速回転する円盤型でアツアツの肉をその身に受け、爆散した。

朱里 LP5300↓0

本来の数値を超えたライフをも消し飛ばす一撃。

茜が言った通り、『一時的な爆発力』というのは、機械族融合モンスターはすごいのだ。

サイバー流の陰謀である。

「な……なんということだ……私が、こんな奴に負けるなんて……」

客の中にも、いろいろと思っている生徒はいる。

序列一位の神代美咲についていくため、本人は多くの努力と研鑽を積んでいるのだ。それがまさか、こんな頭がネジ以外の何かで止まっていそうな変人に敗北するなど思っていなかったのだ。

手札は悪くはなかった。

マシニクルは出しにくいし使いにくい。という印象はあるが、それすらも超越して、攻撃力7400という化け物を生み出したのだから、間違いではない。

だが、このバカにはかなわなかった。

「……青芝恵遊！この屈辱は必ず晴らす！おぼえている！」

そう捨て台詞を言いのごして、朱里は走り去っていった。

「……あーあ」

「恵遊君。デュエルが終わると同時にもうハンバーガー食べてるね」

「まあな。それにしても、デュエルの腕は悪くなかったが……それほど凄いのか？」

「うん。美咲さんはすごい人だよ。年下だけどね」

恵遊の中で引っかかるものがあった。

「……美咲……年下……なあ、そいつの名字は？」

「神代だけど……」

「……マジか。まあ、納得できる強さはあるけどなあ」

「すみません。美咲様」

「フッフ、構いませんよ。こうなることは大体わかっていましたから」

「そ、それはどういう……」

「青芝恵遊は、私の兄です」

「そ……そんな馬鹿な！」

さすがの朱里も、この情報には驚いた。

が、どう判断すればいいのかわからないので棚に上げることにした。

「そ、それはいいのです」

「そうですね。私としてもそれは構いません。兄ではありますし、尊敬もしますが、それ

以上のことはありませんから」

淡々と告げる美咲。

朱里は「はあ……」と気の抜けた返事である。

「朱里、あなたはどう思いましたか？兄さんのデュエル」

「……頭がおかしいとしか言えません。特に、ハングリーバーガーの攻撃力です」

「そうですね……普通に3000を超えてきますから……」

ハングリーバーガーをつかうにしては理想的と言えるだろう。

もちろん、それゆえの弱点はある。

だが、それでも、使つて来るのだ。超えて来るのだ。意味が分からん。

「朱里。もしあなたがデュエリストとして強くなりたいというのであれば、兄さんを見て、目指すといいでしょう」

「え……」

美咲の突然の提案に、朱里は驚く。

美咲が中等部に入ってから仕えている朱里だが、仕えること以外を考えたことはない。

強く有りたいと思ったことはあっても、それは、仕えるということを前提とした理想像としたものであり、一人のデュエリストとしてではない。

「兄さんはよく言っていました。デュエルは、自分がやりたいこと、楽しいと思ったことを詰め込むものだ」と

「それは……詭弁です」

「そうですね。私達にとつてデュエルは真剣なものであり、負け続けていると、存在価値が危ぶまれることもあります。ですが、それでもです」

美咲は微笑む。

「兄さんは、好きなカードに、純粹に向き合ってきました。そして大好きなのです。義務ではなく、楽しむことだけを考えてきた兄さんは、一瞬たりとも、デュエルから逃げる

ことを考えませんでした」

朱里も、美咲も、要求される強さと義務に耐えられず、逃げることを考えていた時代がある。

そして、仕える、という立場に立った朱里は今でも義務的だ。

勝てるはずがなかった。というわけではない。

しかし、『やってきた努力をどれほど自分のものにできるか』ということを見ると、その差は歴然。

「……デツキも調整をします」

そう言つて部屋を出る朱里。

そんな朱里を、美咲は微笑みながら見ていた。

第四話

ボーダーの敷地内の広場の庭の手入れ度はすごい。

丁寧に植えられているだけならともかく、季節を超越したような花が植えられていることもある。

デュエルについて学ぶ学校ではあるが、それらについて何か感じるものも多いので、見ているものも多いのだ。

次の日の放課後。

広場があるスポット。

恵遊は茜と話していた。

「そう言えば、恵遊君って美咲さんと兄妹なんだよね」

「ああ。そうだ」

「じゃあ、もともと神代恵遊かみしろけいゆうだったの？」

「勿論だ」

「いつから青芝恵遊になったの？」

「小学五年の夏ごろだ。学校も転校したな。良いデュエル相手がいたよ。全校生徒の人

数が少なかったから、全学年一クラスずつしかなかったんだけどな。その分、そいつらとはいろいろやっつたなあ」

「へえ……」

印象深いやつもいて、今でも思いだす。

「例えばどんな人がいるの？」

「そうだな……初期ライフが4000で始まらなさそうな奴だ。いやまあ、4000で始まるんだけど」

「……え？」

茜は「はあ？」と言う顔になった。

まあ、その気持ちは分からなくもない。

「恵遊君！」

「うおっ！」

凜子が急に湧いて出てきた（失礼）。

「どうした？」

「その良いデュエル相手って、男？女？」

「男」

「ならよし」

なにが『ならよし』なのだろうか。

その時、遠くから『何かが走ってくる音』が聞こえてくる。

「おい、恵遊！ 貴様この学校に来ていたのk——」

その男は、恵遊の近くに來たので靴音を『ガガガガ！』と鳴らしながらとまろうとして……止まれなかった。

そのまま何かに引つかかったのか盛大に転んで、プランターを吹き飛ばし、ベンチに激突。

その奥にあるしげみに頭から突っ込んで行った。

数秒間そのまま沈黙していたが、「うがああああー」という雄叫びと共に復活する。

血は流れていなかったが、制服はところどころ傷がついていた。

いや、傷はもとからちよつとついていたが。

「相変わらずだな。銀二。大丈夫か？」

「この程度はいつも通りだ」

やや赤い黒髪を短く切りそろえ、身長がそこそこ高い恵遊と同じ身長（178センチ）だ。

小学校卒業以来の友人（恵遊は少なくともそう思っている）である。

名前は、猪八重銀二。

ちなみに、ワイルド系のイケメンの完成系と言えるほどの顔立ちで、モデルの仕事くらしいスカウトされそうだ。

ダメージジーンズならぬダメージブレザーのワイルド系イケメン。何も知らない人が見ればただの不良である。

「ん？どうしたんだ二人とも」

「……恵遊君。猪八重銀二と知り合いなの？」

「ああ。小学校のクラスメイトだ」

凜子が聞いてきたのでそう答えると、凜子と茜は驚いた。

「え……エキセントリック・テンスと知り合いだったなんて……」

茜が驚いている。

「あ。お前、エキセントリック・テンスなのか」

「そう言えばそんなことを言っていたような……」

本人は覚えていないようだが。

「……お前って自分の客観的評価を気にしない性格だよな」

「待て、恵遊。それはお前だろう」

「え、俺が？」

恵遊と銀二は、茜と凜子の方を見る。

二人の顔は『どっちもどっちだろ』と語っていた。
ので、バカ二人は気にしないことにした。

「そう言えば、変な会議に呼ばれたな。十人分の椅子があったぞ」
「確定だな」

「あと、真司も座ってたな」

「え、あのロリコンが？」

惠遊は内心溜息を吐いた。

というか……エキセントリック・テンスだが。

昇平と言い、真司といい……ロリコン多くね？どうなってんの？

「ああ……む？どうした？」

銀二が茜と凜子と見る。

二人はまた驚いていた。

「え……じゃあ、神楽真司かぐらしんじって……」

「小学校のころのクラスメイトだ」

「うむ。惠遊は『想定外の中毒者』、俺は『傷だらけの間抜け』、真司は『高性能のロリコン』と呼ばれていて、近所でも有名だったぞ」

凜子と茜は『明らかに蔑称じゃねえか』と思っただが、何も言わなかった。

「というか、いずれにしても頭がおかしい。頭のネジが何本か外れているというより、頭がネジ以外の何かで止まっている。」

凜子は呟く。

「なんだろう。私、世間的に見れば過剰な思考を持つて言われるけど、なんか普通なんじゃないかって思えてきた」

「ヤンデレも比較対象によつては大したことない可能性があるね……」

茜は何を言えばいいのかわからなかったが、とりあえず返答する。

「が、そんなことは二人は気にしない。」

「恵遊。デュエルだ。あ、これが決闘駄賃だ」

「おう」

恵遊は笑顔でハンバーガーを受け取る。

そして、離れてデュエルディスクを構える。

「え、デュエルコートは使わないの？ エキセントリック・テンスなんだし、デュエルコートはいつでも使えるんじゃない？」

「知らん」

凜子の言い分を一刀両断する銀二。

「というか、そういうサービスがあることをそもそも知っているかどうかと言う話であ

る。

「行くぞ惠遊。今日こそ、貴様を圧倒してやる！」

「俺ら三人の中では一番戦績が悪かったもんな。銀二

「うるさい。始めるぞ」

「おう」

お互いにカードを五枚引く。

「デュエル！」

惠遊 LP4000

銀二 LP4000

デュエルディスクが決めた先攻は惠遊。

「俺の先攻。手札から『マンジユ・ゴッド』を召喚！デツキから『ハンバーガーのレシピ』を手札に加える」

マンジユ・ゴッド ATK1400 ☆4

凜子が呆然とする。

「……惠遊君って、マンジユ・ゴッド入れてたんだ」

「何を言ってるんだ。儀式デツキなら必須だろ」

「まあ、そうなんだけどさ……」

毎回毎回『儀式の下準備』一枚で必要パーツを持つてくるのだ。なんか納得いかないのも事実である。

だが、気にしないとばかりに恵遊は続行する。

「俺はカードを二枚セットして、ターンエンドだ」

「先攻では儀式召喚をしない癖は変わっていないな。俺のターン。ドロー！魔法カード『予想GUY』を発動。デッキから『エルフの剣士』を特殊召喚！」

エルフの剣士 ATK1400 ☆4

現れたのは、ファンタジーの定番、エルフに属する剣士。

「やっぱり『エルフの剣士』か」

「当たり前だ。俺のフェイバリットだからな。手札から『エルフの聖剣士』を召喚！効果で手札から『翻弄するエルフの剣士』を特殊召喚する」

エルフの聖剣士 ATK2100 ☆4

翻弄するエルフの剣士 ATK1400 ☆4

「やっぱり並べてくるのか」

「当たり前だ。永続魔法『連合軍』を発動。俺のフィールドの戦士と魔法使いの数×200、戦士族モンスターは攻撃力がアップする」

エルフの剣士 ATK1400↓2000

エルフの聖剣士 ATK 2100 ↓ 2700

翻弄するエルフの剣士 ATK 1400 ↓ 2000

「お前のエルフの剣士も攻撃力が高くなって来るじゃないか」

「お前ほどじゃない」

凜子と茜は銀二のツツコミに『確かに』と頷く。

恵遊に味方はいない。

まあ、合計攻撃力と言う意味では銀二の方が上だが、恵遊の方は意味不明だ。

とはいえ恵遊も、手札に問題がなければ『サクリボー』の身がわり効果を使わないような性格なので、もともとと理解されにくいのは間違いないだろう。

「カードを二枚セットして、手札ゼロだ。バトル！エルフの聖剣士で、マンジュ・ゴッドを攻撃！」

『『ガード・ブロック』を発動。ダメージは無効だ。一枚ドロ』

「なら、翻弄するエルフの剣士でダイレクトアタック！」

『『ピンポイント・ガード』だ。墓地のマンジュ・ゴッドを特殊召喚！』

マンジュ・ゴッド DF E1000 ☆4

「チツ……伏せておいた『馬の骨の対価』を発動だ。エルフの剣士を墓地に送り、デッキからカードを二枚ドロ。これでターンエンドだ」

エルフの聖剣士

ATK2700↓2500

翻弄するエルフの剣士

ATK2000↓1800

「俺のターン。ドロロー！」

さて、並びやすいし、サルベージも普通にしてから面倒だ。

だが、そろそろ行ける。

「俺はデツキトップを墓地に送り、『アームズ・ホール』を発動。デツキから『最強の盾』をサーチする」

「すでに準備は整っているのか？」

「ま、そんなもんだ。カードを一枚セットして、『手札抹殺』を発動。俺は三枚捨てて三枚ドロロー」

「俺は二枚捨てて二枚ドロローだ」

さて、手札交換も終わったし。やるか。

『儀式的準備』を発動。デツキの『ハングリバーガー』と、墓地の『ハンバーガーのレシピ』を手札に加える。行くぞ！ハンバーガーのレシピを使って、フィールドのマンジュ・ゴッド、手札のサクリボー。墓地のディザースを使って、『ハングリバーガー』を儀式召喚！サクリボーの効果で一枚ドロロー！」

ハングリバーガー ATK2000 ☆6

「お前のデツキのリリーサーはいつまで寝ているんだ？」

「知らんがな。俺は伏せておいた『最強の盾』を装備！」

そして添えられる盾。

ハングリーバーガー ATK2000↓3850

「……アームズ・ホールと最強の盾をデツキに普通に積むタイプだからな、お前は。このイカれた攻撃力はあのころから変わらん」

「だろ。バトルだ！ハングリーバーガーで、エルフの聖剣士を攻撃！」

翻弄するエルフの剣士は戦闘では破壊出来ない。

いや、できないわけではないが、恵遊のデツキの攻撃力事情ではかなり困難だ。

「甘い！手札一枚をコストにして、罫カード『ライジング・エナジー』を発動！」

「しまった……」

エルフの聖剣士 ATK2500↓4000

というか、コイツのエルフの剣士も人のこと言え無いんだよな。『団結の力』を入れているからすごいことになる時がざらにあるし。

「ハングリーバーガーを切り裂け！」

しかし……。

『クリクリ〜』

「な……サクリボーだ?!」

聖剣士が切り刻んだのはサクリボーだった。

「墓地から除外して身がわりにしたただけだ」

「ダメージは受けてもらうぞ」

「勿論だ」

恵遊 LP4000↓3850

「エルフの聖剣士が相手に戦闘ダメージを与えたことで、フィールドのエルフの剣士の数、よって二枚のカードをドローする」

攻撃するときにはハンドレスにする必要があるが、別に戦闘ダメージさせ与えたら問題はないのだ。

「むう……カードを一枚セットして、ターンエンドだ」

エルフの聖剣士 ATK4000↓2500

「俺のターン。ドロー!」

銀二の表情が変わった。

「行くぞ恵遊。俺がこの三年間で手に入れたエースを見せてやる!」

「な……エルフの剣士じゃないのか!?!」

小学校卒業時点までの話をすれば、銀二は、エルフの剣士を軸にしたビートダウンと

言う構築だった。

バトルフェイズ中は、フィールドにエルフの剣士モンスターしか存在しないことが普通である。

そして、驚いているのは、茜と凜子もだった。

「猪八重銀二と言えば、『エルフの剣士』一択のデュエリストのはず……」

「エクストラデッキのモンスターも、ランク4のエクシーズモンスターが多いって聞くけど……」

どうやら、ボーダーに来てからも見せていなかったようだ。

「それはフェイバリットだ。それに、もともと、エルフの剣士はレベル4を並べやすいからな。行くぞー!」

エクストラデッキ……あそこまで言うのなら、エクシーズ召喚か。

「俺はレベル4のエルフの聖剣士と、翻弄するエルフの剣士でオーバレイ! 漆黒の闇より愚鈍なる力に抗う反逆の牙! 今、降臨せよ! エクシーズ召喚! 現れろ! ランク4!

『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』!」

出現したのは、黒き叛逆の竜。

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン ATK2500 ★4

「だ……ダーク・リベリオンだと」

確かに、出せるのは分かる。

だが……戦士族のランク4を予測していた。

エルフの剣士は打点を上げるにはサポートカードを使用するしかなく、それらを引かずとも突破できる手段を用意していると考えれば、確かに納得はできる。だが、それは39でも同じである。

「俺はダーク・リベリオンの効果発動。オーバーレイユニットの二つ使い、相手モンスター一体の攻撃力の半分を奪う！『トリーズン・デイスチャージ』！」

ハングリーバーガー

ATK3850↓1925

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン

ATK2500↓4425

あまり見ない数字になってしまった。

だが、攻撃した時のダメージが決まっているのも事実である。

「バトル！ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンで、ハングリーバーガーを攻撃！」「墓地から『ネクロ・ガードナー』を除外して攻撃を無効にする！」

ハングリーバーガーをネクロ・ガードナーが守った。

カードガンナーといい、このモンスターと言い、つくづくクラゲ頭と縁のあるデュエリストである。

「俺はカードを一枚セット。ターンエンドだ！」

「俺のターン。ドロロー！」

さて、これで手札は三枚。

やりますか。

「運命のコイントスだ。俺は『デビル・コメディアン』を発動！俺は裏を宣言！」

「なに……」

デビル・コメディアン

通常罠であり、発動時にコイントスの表か裏を宣言。

当たって入れば、相手の墓地のカードをすべて除外。

はずれたら、相手の墓地の数、デツキからカードを墓地に送る。

どちらを狙っているかは一目瞭然。

(表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表) ↑ 恵遊

(裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏) ↑ 銀二

お互いの思考が、真反対に、一色に染まる。

そして……コインは落ちる。

次の瞬間、お互いに気が付いた。

(まずい。このままだと裏だ)

恵遊は汗を流す。

(よし！除外からの帰還、回収ギミックはデッキにいられている。問題はない！)
銀二はにやりと笑う。

だが、ここで動く者がいた。

『！』

ハングリーバーガーに刺さっている日の丸の国旗。
それが、急にコインの方に跳んでいったのだ。

「何っ!?!」

お互いに驚いた。

まるでカードに意思があるかのように、ハングリーバーガーは、その旗を飛ばしたのだ。

旗はコインに当たり、裏になると二人が確信した判定が覆る。

そして、コインはまた落ちていく。

その瞬間、恵遊と銀二は、言い表せない何かを感じた。

そう、言葉に表現するなら……『お前が先に動いたんだから、俺も動いてもいいよな』
とでもいうかのような……。

『――！』

次に、なんと、ダーク・リベリオンが動いた。

その眼は、表と裏を巡るましく変えるコインの動きが、完璧に分かっているかのように。

「!?!」

茜と凜子も意味不明と言いたそうな表情になる。

そして、ダーク・リベリオンはその長いしっぽを振り上げる。

コインの裏が上になった瞬間に、それを叩きつけようとするかのように。

「な……たたきつける気か!?!」

恵遊は絶句する。

いやまあ、先に手（というより旗）を出したハングリーバーガーがある意味悪いのだが、それはお互いにとっても想定外な話。

だが……。

『――！』

『邪魔すんなゴルア！』とでもいうかのように、ハングリーバーガーは円盤の肉を射出。

今まさに、コインに意識を完全に集約させていたダーク・リベリオンは、それに気が付かず、まさに『ジャスト・ミート』した。

ダーク・リベリオンが吹っ飛んで、コインは無事。

そしてコインは……

チャリンと音を立てて……裏になった。

「ん？」

「え？」

恵遊も銀二も茜も凜子も、何が起こったのかさっぱりわからないといった表情だ。

だが、とにかく。決まったことがある。

それは、このコイントスの結果は、恵遊の墓地肥しではなく、銀二の墓地のカード全除外になった。ということだ。

「チクシヨオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「ツシヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

惠遊は拳を地面に叩きつけながら嘆きの絶叫を上げて。

銀二は拳を突き上げて歓喜の咆哮を上げる。

その間にも、シャコココ……というデュエルディスクの駆動音とともに、銀二のカードは除外されている。

だが、何とも言え無い雰囲気があるにはあつた。

「……何なんだろうね。この勝負」

「凜子ちゃん。理解しようとしちゃいけない領域だと思うよ」

女子勢もどんよりした雰囲気になる。

「はあ……何がどうなっているのかよくわからんが、もういいや。『月の書』を使って、ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンをセット状態に変更。カードガンナーを召喚して、デッキトップを三枚墓地に送って攻撃力を上昇させる。そして、『スキル・サクセサー』を墓地から除外してドーピングする」

カードガンナー ATK400↓1900↓2700 ☆3

「チツ……ダーク・リベリオンが……」

「カードガンナーで、セットモンスターを攻撃」

当然。ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンである。

カードガンナーが撃ちぬいた。

「そして、ハングリーバーガーでダイレクトアタック」

『リビングゲッドの呼び声』を発動する。戻って来い！ 『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』！」

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン ATK 2500 ★4

ダーク・リベリオンを蘇生させた……。

いや、墓地のカードを全て除外したのだ。戦闘破壊したダーク・リベリオンしか蘇生はそもそも不可能である。

あまり意味があるとは思えない。

RUMでも握っているのか？

『馬の骨の対価』を使う。ハングリーバーガーを墓地に送って二枚ドロロー。一枚セットして、ターンエンドだ」

カードガンナー ATK 2700 ↓ 400

「俺のターン。ドロロー！まずは『大欲な壺』を使って、除外されているエルフの剣士モンスター三体をデッキに戻して一枚ドロロー。行くぞ恵遊。『RUMー幻影騎士団ラウンチ』を発動！」

「な……銀二。お前は本当の意味で、ダーク・リベリオンを切り札にしているっていうのか……」

「そうだ。行くぞダーク・リベリオン！俺はこのカードとダーク・リベリオンを素材にして、ランクが一つ高いモンスターを、エクシーズ召喚する！」

渦などに飛び込まない。

漆黒の闇が、ダーク・リベリオンを覆い尽くした。

「煉獄の底より、いまだ鎮まらぬ魂に捧げる反逆の歌！永久に響かせ現れよ！ランクアップ・エクシーズチェンジ！出でよ、ランク5！『ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴン』！」

ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴン ATK3000 ★5

「……変わったな。銀二」

「フン！この学園での最強の座など興味はない。俺が最初から、最後に超えたいと思っているのは、お前だけだからな」

「そうか……」

そこまで期待されているのか。

「ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴンの効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、相手モンスターの攻撃力を奪う！『レクイエム・サルベージョン』！」

カードガンナー ATK400↓0

ダーク・レイイェム・エクシーズ・ドラゴン ATK3000↓3400

対した意味はないかもしれない。

だが、妥協はしない。

銀二は、そう言うデュエリストなのだ。

頭の中でストッパーが外れているのは、あの日から変わっていない。

『マジック・プランター』を使い、フィールドの『リビングデッドの呼び声』を墓地に送り二枚ドロロー。バトルだ！ダーク・レイイェム・エクシーズ・ドラゴンで、カードガンナーを攻撃！」

「罠カード『ダメージ・ダイエット』発動！ダメージを半分にする！」

「構わん！『鎮魂のディザスター・デイスオベイ』！」

カードガンナーが破壊される。

恵遊 LP3850↓2350

「カードガンナーが破壊されたことで、一枚ドロロー」

「俺はカードを一枚セット。これでターンエンドだ」

「俺のターン。ドロロー！」

ふむ……。

「ダーク・レクイエムはモンスター効果を無効にする効果があったな。」

「俺は『儀式の下準備』を発動。デッキから『ハンバーガーのレシピ』と『ハングリーバーガー』を手札に加える」

「チツ……だが、お前の墓地に儀式魔人は……」

「いないが、俺が『ハングリーバーガーの儀式素材』を調達するギミックを少数しかいていないわけないだろ」

「どういうことだ？」

「こういうことだ。墓地の『カーボネドン』を除外。デッキから『ラプドライドラゴン』を特殊召喚！」

ラプドライドラゴン DFE2400 ☆6

「な……お前、レベル6のチューナーを使うようなシンクロモンスターなどいれていないだろ！」

「そもそも恵遊君って、シンクロモンスター入れてるのかな」

「凜子ちゃん。今はそれはいいと思うよ。まあでも、銀二君の言い分から察するに、入っているんじゃないかな」

さて、それはそれとして。

「『ハンバーガーのレシピ』を使って、『ラプドライドラゴン』をリリース。『ハングリー

「バーガー」を儀式召喚！

ハングリーバーガー ATK2000 ☆6

「何度でも出てくるんだね……あ、お肉がすごくきれい」

「……あれ？ 茜ちゃん。ラプラドライドラゴンが綺麗なのって鱗じゃなかった？」

凜子の言う通り。

だが……。

「俺のデツキのハンバーガーを作るあのイカツイおっさんは、そんな常識を突破するのさ」

「いやムリがあるよ」

即答された。

だが、スルーしておこう。

「そして、デツキトップを墓地に送って『アームズ・ホール』を発動。『最強の盾』をサーチ。そして装備！」

ハングリーバーガー ATK2000↓3850

「チツ……」

「あの日から変わらないし、お前もわかっていると思うが、銀二、俺のハングリーバーガーを前にして、攻撃力が3800以下のモンスターは、為す術もなく破壊されるのが

普通だ。行くぞ！ハングリーバーガーで、ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴンを攻撃！『ラプラドライ・ミード・ディスク』！」

すごくきれいな肉がダーク・レクイエムに向かって飛んでいく。

「罫カード『針虫の巣窟』を発動！……よし、墓地から『超電磁タートル』を除外！」

回避してきたか。

「俺はこれでターンエンドだ」

「ふう……」

「どうするんだ？突破できるカードがもうデッキに入っていないのか？」

「そんなことを言うつもりはない。だが、ドロウするつもりもない」

その銀二の言葉に、茜と凜子は驚く。

別に、『無謀な欲張り』を使っているわけでもない。

だが、それでも、ドロウしないというのは一体どういうことなのか。

「恵遊。俺はダーク・リベリオンを進化させ続けるといった。その場所は、ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴンが終着点ではない」

「どういう……まさか……」

「その通りだ」

銀二は宣言する。

「俺は墓地の『RUMーアストラル・フォース』の効果を発動！」

墓地から出てきたRUMが、銀二の手札に加わる。

「本当に……お前は、ダーク・リベリオンを……」

「【エルフの剣士】は、確かに俺のフェイバリットだ。だが、新たなエースとして、俺はこのカードを渡されたからな」

銀二にダーク・リベリオンをエースとしそうな人間。

……そういうことか。

「俺は『RUMーアストラル・フォース』を発動！ランク5のダーク・レクイエムで、オーバーレイ！」

ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴンが、渦の中に飛び込む。

そして、爆裂！

「二色の眼の龍よ！その黒き逆鱗を震わせ、刃向かう敵を殲滅せよ！ランクアップ・エクシーズ・チェンジ！いでよ、ランク7！怒りの眼輝けし龍！『霸王黒竜オツドアイズ・リベリオン・ドラゴン』！」

霸王黒竜オツドアイズ・リベリオン・ドラゴン ATK3000 ★7

「は……霸王黒竜……」

「モンスター効果発動！相手のレベル7以下のモンスターを全て破壊し、一体につき1

000ポイントのダメージを与える。『オーバーロード・ハウリング』！」

ダメージ・ダイエツトは……いや、まだ我慢できる。

ハングリーバーガーが消し飛んだ。

恵遊 LP2350↓1350

「そして、オッドアイズ・リベリオン・ドラゴンは、このターン。一度のバトルフェイズで三回の攻撃ができる！バトルだ！オッドアイズ・リベリオン・ドラゴンで、ダイレクタアタック！」

「墓地から『クリアクリボー』の効果発動。一枚ドロウして、モンスターなら特殊召喚できろ！ドロロー！」

恵遊が引いたのは……。

「『ハネクリボー』だ！」

「クリクリ〜」

ハネクリボー DFE200 ☆1

「なら、ハネクリボーを攻撃！」

問答無用だが、らしいといえばらしい。

「俺はこれでターンエンドだ」

「燃えてきた！俺のターン。ドロロー！」

……よし！昨日の夜。ハネクリボーと共に入れたネタカードが来てくれた！

「『賢者の石ーサバティエル』を発動！ライフを半分払って、デッキから『融合』魔法か『フュージョン』魔法を手札に加える。俺が手札に加えるのは、『真紅眼融合』！」

「何!？」

惠遊 LP1350↓675

「『強欲で貪欲な壺』を使って、デッキトップを十枚除外して二枚ドロ。そして、『真紅眼融合』を発動！デッキの三枚目の『ハングリーバーガー』と、『真紅眼の黒竜』で、融合召喚！『真紅眼の黒竜』！」

真紅眼の黒竜 ATK2800 ☆7

「れ……レッドアイズだど!？」

銀二は愕然とする。

凜子も驚いた。

「……というより、私としては、デッキにハングリーバーガーを三枚もいれているってことだけどね。普通に考えて事故率高いと思うんだけど……」

「凜子ちゃん。私もそう思っていたところだから言わないでほしかった」

さて、行くとしましょうか。

「俺は手札から『一騎加勢』を発動だ」

真紅眼の黒刃竜 ATK 2800 ↓ 4300

「バトル！そして、黒刃竜の効果発動。墓地の蘇生条件を満たしている『ハングリーバーガー』を装備！」

そしてレッドアイズの背に乗つかるハングリーバーガー。

いやまあ、効果で装備しているのでそうなるのもある意味納得ができないわけではないが、それはそれでどうなのかと思わなくもない。

真紅眼の黒刃竜 ATK 4300 ↓ 4500

ハングリーバーガーは黒刃竜の頭に移動する。

そして、黒刃竜が口の中のために込んだエネルギーを吸収、円盤の肉に乗せて、射出。

リベリオン・ドラゴンを貫いた。

「ぐ……」

銀二 LP 4000 ↓ 2500

「あれ、メインはハングリーバーガーなんだ」

「かなり出しやばってくるね」

茜と凜子はげんがりしている。

「オッドアイズ・リベリオン・ドラゴンは、ペンデュラムゾーンに置かれる」

「ふむ……俺はこれで、ターンエンドだ」

真紅眼の黒刃竜 ATK4500↓3000

「俺のターン。ドロロー! 『エルフの聖剣士』を召喚。そして、手札の『エルフの剣士』を特殊召喚して、『地獄の暴走召喚』でさらに特殊召喚。『連合軍』の効果でパワーアップ!」

エルフの聖剣士 ATK2100↓2900 ☆4

エルフの剣士 ATK1400↓2200 ☆4

エルフの剣士 ATK1400↓2200 ☆4

エルフの剣士 ATK1400↓2200 ☆4

「そして、墓地の『スキル・サクセサー』を除外して、聖剣士の攻撃力を上げる。バトルだ! エルフの聖剣士で、真紅眼の黒刃竜を攻撃」

エルフの聖剣士 ATK2900↓3700

「手札から『クリボール』の効果を発動。聖剣士を守備表示にする!」

エルフの聖剣士 ATK2900↓DFE700

「ぐ……ならば、聖剣士と剣士三体でオーバーレイ! 『No. 86 H-C ロンゴミアント』をエクシーズ召喚!」

「な……ロンゴミアントだって!?!」

No. 86 H-C ロンゴミアント ATK1500↓3000 ★4

「俺はこれでターンエンドだ」

「俺のターン。ドロー！」

ロンゴミアントの素材は四つ。

戦闘では破壊されず、攻撃力は1500、効果を受けず、相手は召喚、特殊召喚できない。

だが……それでも、諦めたような表情を、銀二はしていた。

「引いたんだな。融合モンスターメイデンイッシュユの切り札を」

「ああ……決闘終了だ。バトル。レッドアイズで攻撃時に墓地の二体目のハングリーバーガーを装備。そして、『決闘融合ーバトル・フュージョン』を発動する。楽しかったぞ。銀二」

「そうだな」

真紅眼の黒刃竜 ATK3000↓3200↓6200

レッドアイズの手には、二つのバーガー。

二体のハンバーガーは、レッドアイズの口の中のエネルギーを吸収。

トマトと肉が射出され、ロンゴミアントを貫く。

ロンゴミアントは戦闘では破壊されない。

だが、デュエリストの方はダメだった。

銀二 L P 2 5 0 0 ↓ 0

「ねえ、茜ちゃん」

「どうしたの？」

「黒刃竜よりも、ハングリバーガーって、階級が上なのかな」

「……………恵遊君のデッキの中ではそうなんじゃないかな」

熟考したあと、茜はそう答えるしかなかった。

★

「またやるぞ。恵遊」

「おう。待ってるから、また来いよ」

銀二は走り去っていった。

……………どこかにぶつかる音がしているが、まあ、それはいつも通りである。

「恵遊君の小学校のころのクラスメイトってすごいんだね」

「まあ……………そうだな」

ちよつとしかデュエルしていないやつもいるが、それでも、強いと思えるものはいた。

「……………またどこかでデュエル出来るといいな」

恵遊は、そつと微笑んだ。

第五話

「生徒指導ごときで諦める私ではない！正面から通つても無駄なら裏から行くまで！今は恵遊君が部屋にいることは把握済みだよ！」

夜遅い時間。

全寮制であるボーダーでは、基本的に外出届を出さない限り、敷地から出ることはできない。

しかし、その外出届は案外簡単に発行される。記録には残るが。

恵遊が『ハンバーガーを買いに行きます』といつても通るレベルだ。

というより、『恵遊がハンバーガーを買いに行く以外でわざわざ外出するはずがない』とは学校の事務員も思っているのが現状だが。

で、その生徒が敷地の外にいる場合は、暗証番号さえ知っていればフレンド確認のようなもののでわかるのだ。

なお、多くのことが敷地内で完結しており、なおかつ監視カメラも多いので、門限がないのが特徴でもある。

なので、深夜徘徊も普通にできる。散歩スポットも多いのだ。

ボーダーの夜は星空がきれいなので、天文部がよく校舎の屋上に行っていることもあ
る。

校舎の屋上から『闇落ちハンドレス』や『盗賊王』がよくやっていたような笑い声が
聞こえる時があるが、部長のデツキには『精神浸食惑星』と『ナンバーズ』が投入され
ているので、関係がないわけではない……かもしれない。

はなしがそれた
閑話休題

現在、恵遊は学校内にいる。

そして、この時間は、学校内に存在するすべてのハンバーガーを売っている売店は閉
まっている。

確実に、恵遊は部屋にいる。

「フッフッフ」

凜子は、『フックが付いたロープ』を手に取り不敵に笑う。

そして、それをブンブンと音が鳴るレベルで回し始める。

「東側から見て、五階の左から三番目！オリヤアアアアアアアア！」

フックが宙を舞い、ちよつとヤバい音量でペランダの手すりにフックが引っ掛かっ

た。

だが、恵遊にはあるものを渡しておいたのだ。

凜子が調合した『遅行性睡眠薬』入りハンバーガーである。ぐっすり眠っているに違いない。

ハンバーガーを売っている売店が空いているのなら起きている可能性はあるが、今は閉まっているのだ。万が一にもありえない。

——それはようするに、売店が空いていたら睡眠薬が効かないということになるのだが、それは今は置いておくとして。

「フッフッフ。練習など不要。初見で成功だよ！」

天才である。

ちなみに、セリフには『！』がついているが、小声である。

「よっ、ほっ」

訓練された兵士のように、するするとロープを登っていく。

そして、手すりを右手で握った。

「よし。おりゃー！」

右腕に力を入れて、一気に引つ張り、体を持ちあげる。

「また会ったな。聖野」

「うげっ！何で先生が！」

ベランダに立った凜子の前にいたのは、生徒指導の先生だった。

相変わらず、スポーツ刈りと赤ジャージである。

「青芝なら寝ているぞ、ただ、今日、部屋に帰る青芝が異常に眠そうだったからな。多分お前が一服盛ったんだろうと思って張り込んでいただけだ」

「ちよっ！生徒指導の先生がそんな理由で生徒のベランダに張りこんでいいんですか！？」

「現行犯で制度指導室に連行されたばかりのお前がそれを言うな。ついでに言えば、こう言うのは捕まえることが出来れば結果的に問題はない」

「職権乱用ですよ！」

「成果主義と言え。それはともかく、現行犯逮捕だ」

「イヤアアアアアアアアア！」

連行された凜子。

「zzzz……」

恵遊はぐっすり眠っていた。

★

デュエルスクールと言うだけあって、デュエルモンスターズ専門の授業もある。

まあ最も、基本は座学だが、実技もデュエルで覆い尽くされているのだ。

ちようど今も、赤ジャージを着た生徒指導の先生、赤座風雅あかざふうがという先生の講義が行われている。

……『チリチリになった頭を無理矢理セットしたような痕』があるのだが、誰もそれについて追及することはなかった。

「デュエルにおいて安定した戦績を得るために必要なのは、デッキの構築の段階で安定したレシピを作ることだ。では、その安定した構築と言うのはどういうものなのかと言うと、『サーチ』や『リクルート』に加えて『サルベージ』が豊富なデッキと言える」

風雅先生は、デイスプレイに『HERO』のカードを表示させる。

「先生が考えている中で、最もこれらがそろっているのは、『HERO』だと思っている。みんなも知っている通り、エアーマンを中心として、様々なカードをサーチ、それらを用いて展開していくカテゴリだ。シャドー・ミストを墓地に送るギミックを使い、間接的にサーチを行うこともある」

次に『ヒーローライブ』

「このカードは、自分をフィールドに表側表示のモンスターが存在しない場合、ライフを半分払ってデッキからレベル4以下のHEROを特殊召喚できる。HERO使いでドロー運がよいやつを相手にした時はよくドローされる屈辱のカードだ。先生もよくや

られた」

実のところこの先生、実体験が多い。

しかも、やたら怨念に満ちている。

「展開力のあるカードは好まれるが、ライフを無駄にしたくないから手札に残すデュエリストはそこそこいる。残しておいて、次の相手ターンに巻き返されたときに、このカード一枚で何とかできるケースは多いからな。別に間違っではない。相手によるといつていいだろう」

だろうな。

「だが、甘えるな。プロと言うのはこんなカードは初手に使つて来るぞ。どうせ、『至高の木の実』一枚で踏み倒せる量のライフだからな。アイツらは容赦がない」

風雅先生、HEROに恨みがあるんだろうな。

「ちなみに、セット状態のモンスターが自分フィールドにいても発動できる。あくまでも、表側表示のモンスターがない場合の話だからな」

活用できる機会があるかどうかは別である。

「『ピンポイント・ガード』でわざわざ『メタモルポット』を出してきて、次のターンに『皆既日蝕の書』で私のモンスターごと全部裏側にされて、アライブでエアーマンが飛んできてサーチ、『太陽の書』を『メタモルポット』に使つて手札補充、サーチしておいた

シャドー・ミストでまたサーチ……と、やりたい放題やりやがったやつもいるけどな。あの時の学園長のドヤ顔は今でも忘れん」

やったのは学園長なのか……。

「先生、メタモルポットはその後どうなったんですか？」

凜子が聞いている。

「ガイアの融合素材になった。しかも、次の私のターンのバトルフェイズ中に『超融合』まで使って来たんだぞ。あれほど殴りたかったことはない」

「……そうですか」

「腹立ったから『激流葬』を使ってやった」

『超融合』の発動タイミングでは何もできないが、特殊召喚されたモンスターに対しては無防備のようなものなのだ。悲しい現実である。

「だが……『魔宮の賄賂』で無効にされた。あのタイミングであのイラストのカードを発動してくるとはな……」

切ない。

「話を戻すが、デッキを作る上で、安定するということとは、『特定のルート』に乗せることだ。カード一枚で、デッキの中で何が出来なのか、それを考えることを忘れないように……む、授業は終わりか。また明日」

先生は。パツパと荷物をまとめて教室を出ていった。

★

「あの先生って怨念が多いよね」

「いろいろあつたんだろ。まあ、その色々も局所的だが」

凜子が話しかけてきたので答えておく。

もちろん、ハンバーガーを食べながら。

「そう言えば、この学校では『プライバシーブレイカー』という名前を聞くんだが、これは一体何だ？」

あれから、他のデュエルコートで行われているデュエルに関しても調べた。

そして分かったのは、ほとんどのデュエルで、『プライバシーブレイカー』による情報提供が行われていたのだ。

名称からしてあまりいいものではないが、それでも、情報の信憑性があるのは間違いない。

凜子はうなつた後、言った。

「私が知っていることだけど、『二つ名』みたいなものなんだよね。エキセントリック・テンスの一人でもあるし」

「ほう」

「でも、その名前は分からないの」

「え、名前は分からないのか？」

不思議なものである。

「一応、エキセントリック・テンスに在籍しているけど、そのサービスも全く使ってなくて、二つ名で登録されているんだ」

「……不思議なデュエリストだな」

「一応、身長の高い女の子ではない。と言う情報はあるんだよ」

「……え？」

なにその役に立つのか立たないのかわからない情報。

「一体どういうことだ？」

「エキセントリック・テンスの神楽真司が『ロリセンサー』みたいなものがあって、たとえどんな変装をしていても、ロリなら分かるんだって」

そういうえば、そんな奴だったな。

恵遊はそう思った。

★

「ふああ……今日はネットサーフィンでハンバーガーショップを探そうか」

恵遊は学生寮の自室でキーボードをたたいていた。

さすがの恵遊も、体は一つだ。的くらいは絞る。

「……………」

扉をたたく音がした。

誰だろうと思つて開ける。

すると……………」

「頼む恵遊！かくまつてくれ！」

……………引き分けと戦術とするエキセントリック・テンス。昇平が必死の顔つきで飛びついてきた。

「……………いったい何があつたんだ？」

「あのロリコンが……………」

真司のことだろうか。それとも別のロリコンだろうか。

いずれにせよ、なぜ昇平が逃げているのだろうか。

「ちよつと説明してくれ」

「今日、真司が僕の部屋に入ってきて、ロリコン対談をしようつて言ってきて、最初はよかつたんだが、だんだんヒートアップしてきて……………僕のほうが途中からおなか一杯になつてきて……………しかもあいつ止まらないんだよ！」

……………」

らくの間攻撃できず、「真司おにいちやんなんで大っ嫌い」と言われた場合、メンタルが破壊される。

クソ情報を流してしまった。失敬。

と思つた瞬間、恵遊の扉のドアが開いた。

しかも、ご丁寧にカギを開けてきた。

入つてきたのは、金髪を短く切りそろえた背の高い男。

178センチある恵遊より高いだろう。

だが、その黒い瞳にはよくわからぬ欲望が宿っている。

恵遊はさわやか(?)系と言われ、銀二はワイルド系と言われるなか、この男は貴族系と言われていた。

高貴オーラがあるにはあるのだが、なんでこうなったのやら。

「ちよつと待て、真司。お前なんで俺の部屋の鍵持つてるの?」

「甘いな恵遊。私は常にマスターキーを所持しているのだ」

「いや、なぜ?」

「もしかしたら、今、ロリがどこかの部屋に閉じ込められているかもしれない。そう思うと眠れないのだ。だが、この学校の学生寮の扉は頑丈。おそらく、私の必殺技『ロリ救

「済拳・零式』をもってしても、貫くことはできないだろうからな。であれば、いつでも助け出すためには、マスターキーを所持するのが手っ取り早い」

「……」

「……」

恵遊と昇平の頭の中は、同じことを考えていた。

『真面目な顔して何言ってるの？こいつ』である。

「そのマスターキーはどうやって手に入れたんだ？」

「エキセントリック・テンスの権力を使えば、周辺スポンサーからの圧力でなんとかすることくらいはたやすい」

まさかスポンサーも、こんなことをまじめにいうやつの面倒を見ることになるとは思っていないかっただろう。

「マスターキーを持つていて咎められるとか、考えないのか？」

「助け出した功績があるからな」

「……」

「……」

やっぱりこの学校ってロリコン多いな。

ていうか、その時の犯人にしても、立て籠もる場所がおかしいだろ。

「まあいい。惠遊。ほれ」

「おっ」

ハンバーガーだ。

しかも限定品。

……これだけで懐柔できるのだ。安い男である。

「惠遊の部屋は、ハンバーガーのごみを気にしなければ広いからな。お邪魔するぞ」

そのままズンズンと入ってくる真司。

惠遊はすでに懐柔済み。

昇平に味方はいないのであった。

「それはそうと惠遊。すでに銀二とデュエルをしたそうだな」

「ああ。まさかダーク・リベリオンを使ってくるとは思っていなかったけどな」

「ふむ、まあそこに興味はない。ところで、あいつのデッキにロリは投入されていたのか？」

「いや、かけらもなかった」

エルフのお兄さんばかりだった。

超電磁タートルとかも入っていたが、女性カードは皆無である。

「お前もだろ」

「もちろん」

真司とは違うのである。

「恵遊。次は私とデュエルだ」

「……なんで？」

真司は新しいハンバーガーを取り出して渡した。

「いいだろう」

このやり取りを見て、昇平は思った。

「僕がおかしいのか？これは」

そんなことはない。安心しろ。

★

エキセントリック・テンスである真司はデュエルコートを使用可能だ。

というわけで、来たわけである。

ギャラリーのほうも、恵遊と真司が小学校の頃のクラスメイトだと知っているのかである。

で、茜と凜子もやってきた。

「恵遊君。いったいどうなってるの？これ」

「ハンバーガーをもらった」

「あ。そうなんだ」

茜と凜子もある程度分かっていたようだ。

汚染されている証拠である。

昇平はげんなりしているけど……。

「そういえば、昇平はデュエルしないの？」

「別に僕はやるつもりはないゾ。それに、この二人は小学校卒業以来なんだ。さすがに水を差したりしないサ」

空気を一応読む昇平である。

「さあ、真司。俺たち三人の中で、二番目だったお前の実力。どれほど上がったか試してやるぜ」

「フーン・余裕ぶっついていられるのも今のうちだ。行くぞ。恵遊！」

「デュエル！」

恵遊 LP4000

真司 LP4000

先攻は真司。

「私のターンだ。私はモンスターをセット、バックに一枚セットして、『強欲なカケラ』を発動。ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロー！」

魂が変わっていないのであれば……というかわりようがないような気がしなくもないが、それはそれとして、行くか。

「俺は『カードガンナー』を召喚！デッキトップを三枚落として攻撃力アップ！」

カードガンナー ATK400↓1900 ☆3

恵遊おなじみのデッキの墓地肥やし要因。

こいつがいるからこそ、機械族ギミックを入れているのだ。お気に入り一枚である。

しかも、精霊でも宿っているのではないかと思えるほど落ちるカードがいいのだ。ぶつちやけ茜や凜子も一枚ほしい。特に凜子はそう思っている。カードガンナーは嫌だろうが。

「バトル！カードガンナーで、セットモンスターに攻撃！」

一体目のカードガンナーがセットモンスターに対してカードを射出。

「セットモンスターは『見習い魔術師』だ。モンスター効果により、デッキから『白魔導士ピケル』をセットする」

「……お前の嫁は相変わらずか」

「当然だ。私の『モノクロシスターズ』の大切な主役の一人なのだからな」

ちなみに、クランが姉。ピケルが妹である。

「……」

返答に困る恵遊。

まあ、そうなるのはいつも通りだ。

とりあえずターンを進めるしかない。

「俺はカードを一枚セットして、ターンエンドだ」

カードガンナー ATK1900↓400

「ふむ、第二ターンが終了してもハングリバーガーがいないのは珍しいな」

「イカツイおっさんがちよつと疲れてるだけだ」

「……そう言うことにしておこう。私のターン。ドロー！カケラにカウンターが一つ乗る」

ドローした真司は良い顔でにやりと笑った。

「まずはセットしたピケルたんを反転召喚！」

白魔導士ピケル ATK1200 ☆2

そして姿を現すピケル。

可愛らしいのは認めるが、どうしたものかね……。

「私は手札から魔法カード『アームズ・ホール』を発動。デッキトップを墓地に送り、『王

女の試練』を手札に加える」

「だと思つたよ」

「『一族の結束』を発動。ピケルたんの攻撃力が800ポイントアップ！」

白魔導士ピケル ATK1200↓2000

墓地にいる『見習い魔術師』はこういうところで役に立つのだ。

ていうか、本当にこの学校。『一族の結束』を効果的に使う奴が多いな。

え、俺？無理。

「そして、『王女の試練』をピケルたんに装備！」

白魔道士ピケル ATK2000↓2800

いやちよつと待てや。

特に見た目は変わらない。

やる気にはなっている感じがする。

「そして、手札の『トーチ・ゴーレム』よ。ピケルたんが活躍するための舞台設定となる
 がいい！」

トーチ・トークン ATK0 ☆1

トーチ・トークン ATK0 ☆1

トーチ・ゴーレム DFE300 ☆8

うわイラネ。

「バトルだ！ピケルたんでトーチ・ゴーレムを攻撃！」

「墓地から『ネクロ・ガードナー』を除外！」

ネクロ・ガードナーが、ピケルの杖から出てきた魔力の玉のようなものを防いだ。

「何かと防いでくるな……」

「『王女の試練』を使って何て何を言うか！」

当然である。

進化した後のピケルはなかなか厄介なのだ。特に、一族の結束がある時は。

攻撃力という意味ではハングリーバーガーには及ばないにしても、こうなった時の真

司は強いのである。いろいろな意味で。

ぶっちゃけ実用性はあまりないのに結構頑張って来るのだ。勘弁してくれ。

「だが……甘いぞ恵遊！畏発動『奇跡の軌跡』！」

「うげ……」

こ……コイツ……。

白魔導士ピケル ATK2800↓3800

相手は一枚ドローして、戦闘ダメージも0になるが、攻撃力が1000ポイント上昇し、さらに、二回攻撃が可能となる。

「お、お前、無理矢理通す気か!？」

「フン！ピケルたんとかランたんのためならば、相手の手札一枚程度、リスクのうちに入らん！」

すごい言い分である。

「もう一度トーチ・ゴレムを攻撃！」

なすすべもなく破壊された。

白魔導士ピケル ATK3800↓3000

トーチ・ゴレムは悪魔族なので、墓地に送られると種族が混ざる。

結果として、攻撃力上昇タイムは終わりだ。

「メインフェイズ2に入る。ピケルたん和王女の試練をリリースして、特殊召喚！『魔法の国の王女―ピケル』！」

魔法の国の王女―ピケル ATK2000 ☆4

「カードを一枚セットして、トークン一体をリンクマーカーにセット、『リンクリボー』をリンク召喚だ」

リンクリボー ATK300 LINK1

「ターンエンド。さあ、恵遊。お前のターンだ」

「俺のターン。ドロロー！」

だが、ネタデツキは手札の消費が激しい。

お互いそんなもんだが、真司が0枚なのに対して、恵遊は5枚。動こうと思えば普通に動ける。

のだが……真司のデツキは『トーチ・ゴーレム』が優秀すぎる。

デメリットもうまいこと潜り抜けてくるからな。

真司は、ピケルたちが進化した後は、一族の結束の強化をあまり考えないタイプだ。準制限のため二枚しか入れていないが、無制限時代は三枚入れていた。

「まずはカードガンナーの効果を使い、三枚墓地に送って攻撃力を上げる」

カードガンナー ATK400↓1900

「そして、『儀式の下準備』を発動。『ハンバーガーのレシピ』と『ハングリーバーガー』を手札に加える。行くぞ！『ハンバーガーのレシピ』を使って、墓地のデメリツシヤ、プレコグスターを除外、『ハングリーバーガー』を儀式召喚！デツキトップを墓地に送って『アームズ・ホール』を発動し、『最強の盾』をサーチして装備させる！」

ハングリーバーガー ATK2000↓3850 ☆6

降臨するバーガー。

「恵遊。お前相変わらずリリーサーに嫌われてるな」

「でもほかの儀式魔人とクリボーたちには好かれてるもん！バトルだ！ハングリーバー

ガーでピケルを攻撃！」

「リンクリボーをリリース。攻撃力を0にする！」

ハングリバーガー ATK3850↓0

ハングリバーガーはやる気がなくなった。

「ピケルたんには指一本ふれさせんぞ！」

「ハングリバーガーは指ないけどな」

「フフフ、恵遊。さあどうする。ターン終了か？」

「……カードガンナーを準備表示に変更して、ターンエンドだ」

カードガンナー ATK1900↓DFE400

ハングリバーガー ATK0↓3850

「私のターン。ドロロー！カケラに二つ目のカウンターが乗る。そしてスタンバイフェイズ。ピケルたんの効果でライフが800ポイント回復する」

真司 LP4000↓4800

これが続くとまづいかもしれない。

「強欲なカケラを墓地に送り、二枚ドロロー。『リビングデッドの呼び声』を使い、克蘭たんを蘇生！」

黒魔道師克蘭 ATK1200 ☆2

アームズ・ホールのコストで落ちていたのか……。

「そして、デッキトップを墓地に送り、二枚目の『アームズ・ホール』だ。墓地から『王女の試練』を手札に加える」

さすがにコンボが成立しないとただの紙になる試練を積んだりはしないか。

「そして、クランさんに『王女の試練』を装備！」

黒魔導師クラン ATK1200↓2000

クランもやる気になった。

……一応、レベル的にはハングリーバーガーを攻撃すれば何とかなるが……どうするつもりだ？

「さらに装備魔法『月鏡の盾』をクランさんに装備！」

「なに!？」

驚くが、戦闘破壊する必要があるプリンセスをデッキに投入しているのだ。使いまわすためのライフコストも、ピケルの効果である程度カバーできる。そう考えると悪いものではない。

「バトル！クランさんでハングリーバーガーを攻撃！攻撃力は3950だ！」

黒魔導師クラン ATK2000↓3950

発動する効果なので封殺効果に弱いが、それらがない場合はかなり面倒だ。

しかし、攻撃であることに変わりはない。

「墓地から『タスケルトン』を除外！攻撃を無効にする！」

「甘い！『ダブル・アップ・チャンス』を発動！攻撃力は倍になるが、月鏡の盾の盾の効果を使得って攻撃力が3950になる。破壊しろ！」

クランが振るった鞭がハングリーバーガーにたたきつけられる。

恵遊 LP4000↓3900

「むう……」

黒魔導師クラン ATK3950↓2000

「さらに、ピケルたんでカードガンナーを破壊！」

「効果で一枚ドロースる」

「構わん。メインフェイズ2だ。クランさんと王女の試練をリリース。特殊召喚！『魔

法の国の王女―クラン』！」

魔法の国の王女―クラン ATK2000 ☆4

並び立つ二人の王女様。

「月鏡の盾が墓地に送られたことで、効果が発動。ライフを500払い、デッキの一番上に置く」

真司 LP4800↓4300

一番上……次のターンも来るということか。面倒な……。

「フフフ……そろつたぞ恵遊！」

「ソウデスネー……」

「私はもう一体のトーチ・トークンで二体目の『リンクリボー』にリンク召喚して、ターンエンドだ」

リンクリボー ATK300 LINK1

すごく満足そうである。

「俺のターン。ドロー！」

また手札は五枚。

さて、行きますか。

「まずは『封印の黄金櫃』を発動。デッキからカードを一枚除外して、二ターン後のスタンバイフェイズに手札に加える」

「ほう……いつものお前なら『儀式の下準備』だがな」

「俺が除外するのは……『貪欲な壺』だ」

「……まあ、悪い選択ではないか」

それはどうも。

「俺は『マンジュ・ゴッド』を召喚して、手札の『カゲトカゲ』を特殊召喚する。マンジュ・

ゴツドの効果で『ハングリーバーガー』をサーチ」

マンジユ・ゴツド ATK1400 ☆4

カゲトカゲ ATK1100 ☆4

「ハングリーバーガーをサーチしてレベル4が二体……」

「そういうことだ。俺はレベル4のマンジユ・ゴツドとカゲトカゲでオーバーレイ。『ズババジエネラル』をエクシーズ召喚！」

ズババジエネラル ATK2000 ★4

「エクシーズ素材を一つ使い、手札のハングリーバーガーを装備する！」

ズババジエネラル ATK2000↓4000

ズババジエネラルは、地面に突き刺した剣の柄においていた両手のうち、左手を出す。すると、そこにハングリーバーガーが出現した。

ズババジエネラルは決してイラスト的なビジュアルが悪いわけではないのだが、ハンバーガーを持つとなかなかシニールな光景だ。

しかも、恵遊のハングリーバーガーは変なところで空気を読まないのです、すごく大きい。

持つにつかれてきたのだろう。ハングリーバーガーは左手で持つのではなく左肩においておくことにしようだ。

「エクシーズ……そして、やはり出しやばってくるのか、ハングリーバーガー」
「当たり前だ」

この時、凜子、茜、昇平……いや、観客もだが、こんなことを考えていた。

すなわち、『マンジユ・ゴッドで戦士族儀式をサーチして装備させるのなら、絶対『カ
オス・ソルジャー』の方がいいと思う』と。

とはいえ、恵遊が相手だと通じないものではあるが。

「バトル！ズババジエネラルで、クランを攻撃！」

「リンクリボをリリース！」

ズババジエネラル ATK4000↓0

だよな。としか言いようがない。

「……俺はターンエンドだ」

「先ほどから発動しないそのセットカードが気になるところではあるが……まあいいだ
ろう。私のターン。ドロー！そしてスタンバイフェイズ。ピケルたんとかランたんの
効果が発動する！」

真司 LP4300↓5900

恵遊 LP3900↓3300

……ちよつとまづい予感がする。

惠遊は基本的にフィールドにモンスターを並べないタイプなのでダメージはあまり気にしていない。

だが……このままだと確実にやばいことが起こる。そんな気がするのだ。

「私は『月鏡の盾』をピケルたん装備。バトルだ！ピケルたんでズババジエネラルに攻撃！」

「墓地から『超電磁タートル』を除外！」

カードガンナーの墓地肥しの数は四回。

それなりに墓地アドバンテージは稼いでいる。

「……仕方がない。ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロロー！」

三枚の手札を見て、どうしたものかと思った。

「800ポイントのライフを使って『契約の履行』を発動。墓地から『ハングリーバーガー』を蘇生。手札の『最強の盾』を装備！」

惠遊 LP3300↓2500

ハングリーバーガー ATK2000↓3850 ☆6

「バトル！ハングリーバーガーで、クランを攻撃！」

「墓地から『超電磁タートル』を除外する」

「落としていたのか」

「そういうことだ」

アームズ・ホール。優秀である。

なんだかんだ言って一族の結束が合っていないようなものになっているが、本人は気にしていないようだが。

「ターンエンド」

「私のターン。ドロー！」

ドローしたカードを見て、真司は微笑む。

「スタンバイフェイズに、ピケルたんと克蘭たんの効果が発動！」

恵遊 LP2500↓1900

真司 LP5900↓7500

あ。ヤバイ。

「私は『命削りの宝札』を使い、デッキからカードを三枚ドロー。『サイクロン』を使って『契約の履行』を破壊する」

装備していたハングリーバーガーが除外される。

「そして、バトルだ。ピケルたんズババジエネラルを攻撃！」

ピケルの攻撃力が一時的に4100になり、ズババジエネラルを破壊する。

真司の頬がわずかに動いた。

「ふむ……カードを二枚セットしてターンエンド。これで、宝札のデメリットはなしだ」
「俺のターン。ドロー！」

ドローしたカードを見る。

ふむ……。

「そして、このスタンバイフェイズ。除外していた『貪欲な壺』が手札に加わる。そしてメインフェイズ、これをそのまま発動！墓地からマンジユ・ゴッド。ハングリーバーガー。カードガンナー。ズババジエネラル。カゲトカゲをデッキに戻して二枚ドロー！」

まだだ。

「伏せておいた『大欲な壺』を発動して、除外されているハングリーバーガー。ネクロ・ガードナー。デモリッシャーをデッキに戻して一枚ドロー」

お前か。

「『儀式の準備』を発動。デッキの『ハングリーバーガー』と墓地の『ハンバーガー』のレシピ』を手札に加える。そして魔法カード『オッドアイズ・フュージョン』を発動！」
「『オッドアイズ・フュージョン』だど!？」

真司が驚愕する。

ハングリーバーガーを主体とするのが恵遊のデッキだ。

エクストラデッキのモンスターも、ユーフォロイド・ファイターやズババジエネラルなど、素材、効果などでハングリーバーガーがかかわることができるカードが多く採用されている。

だからこそ、こんなカードが入っているとは思いつかなかったのだ。

「エクストラデッキの霸王白竜と、手札のハングリーバーガーを素材に、融合召喚！レベル10『波動竜騎士 ドラゴエクイテス』！」

波動竜騎士 ドラゴエクイテス ATK3200

槍を構えた竜騎士が出現する。

そしてその左手にはハングリーバーガーが！

((（（やっぱりお前がでしゃばってくるのか！）））

観客の心が一つになった。

「霸王白竜か……」

真司は思うところはあるだろうし、恵遊は何も言わない。

続けることにした。

「『サイクロン』を使って、『月鏡の盾』を破壊！」

「ライフを500払って、デッキの一番上に置く」

真司 LP7500↓7000

「そうかい……バトルだ！ドラゴエキイテスで、ピケルを攻撃！」

「ダブルトラップ！『アストラルバリア』でダイレクトアタックに変更。そして、『カード・ブロック』でダメージを0にして一枚ドロロー！」

「防いできやがって……」

「変にダメージを受けていてもいいことなど一つもないのでな」

それはそうである。

「俺はターンエンドだ」

「私のターン。ドロロー！スタンバイフェイズに効果が発動する」

「ドラゴエキイテスの効果で、ダメージは相手に反射する！」

「だが、回復量のほうが上だ！それに、克蘭さんの効果によるダメージなのだ。私にとっては何しろご褒美！」

真司 LP7000↓6400↓8000

ていうか、何言ってるんだろ。こいつ。

「『月鏡の盾』を克蘭さんに装備。バトルだ！克蘭さんでドラゴエキイテスを攻撃
！」

「墓地からネクロ・ガードナーを除外する！」

防いでくれた。

しかし……ちよつとカードが足りなくなってきた。

墓地肥しの回数が多いとはいっても、防御を専門とするモンスターはそう多いわけではないし、ハングリーバーガー用のサポートカードは多いのだ。当たり前といえば当たり前である。

『強欲で貪欲な壺』を使い、十枚除外して二枚ドロロー。私はカードを一枚セットして、ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロロー！」

ちよつと面倒なことになってきたな……いや、いつも通りか。

『カードガンナー』を召喚して、効果発動。デッキから三枚墓地に送って攻撃力を上昇させる」

カードガンナー ATK400↓1900 ☆3

『スキル・サクセサー』を墓地から除外する」

カードガンナー ATK1900↓2700

「バトルだ！カードガンナーでピケルを攻撃！」

『アストラルバリア』で直接攻撃に変換する！さらに永続罫『スピリットバリア』を発動！」

……これはまずい。

『アストラルバリア』と『スピリットバリア』のコンボ。

これは皆さんもご存じだろう。

アストラルバリアは、相手モンスターが自分モンスターに攻撃してきたとき、それを直接攻撃に変換することが出来る。

スピリットバリアは、自分フィールドにモンスターが存在する場合、受ける戦闘ダメージを0にできる。

真司のデッキの真骨頂はここだ。

採用しているカードが『ガード・ブロック』などが含まれているところから何となく想像出来ていた人もいるかもしれないが、ロリシスターズを守るためにいろいろとコンボを考えた結果、この戦術になったようなものである。

しかも……ジnkクスなのか、ロリに對する愛がこちらのデッキにも影響しているのかは不明だが、こういうときに限って魔法、罠を破壊するカードが手札に來ないのだ。ふざけるなよ全く。

「カードを一枚セットして、ターンエンドだ」

カードガンナー ATK2700↓400

のこっている手札は二枚。そのうち一枚はレシピだ。

お互いにネタテツキと言うこともあるが、何かと手札の消費枚数が多い。

「私のターン。ドロロー！スタンバイフェイズに効果が発動！」

「ダメージは反射だ！」

「ご褒美だ！」

意味わかんねえ。

真司 LP8000↓6800↓8400

……ん？回復量が……。

あ、そうか。

ダメージ反射をするドラゴエクイテスがいるから、こちらのモンスターが多くなればダメージが大きくなるのか。

「……」

真司が黙った。

そして、その眼の先にはドラゴエクイテスがいる。

悟ったのだ。

こいつは邪魔だと。

そして、それを感じ取ったのだろう――

――ハングリーバーガーが上機嫌だ。

決してお前の効果ではないぞ。

真司はドロローしたカードを見る。

微笑んだ。

「私は手札から『地砕き』を発動。砕け散れ！ドラゴエクイテス！」

本当に砕け散った。

ハングリーバーガーは『うそやろ……』と言いたそうな表情だった。表情はないが。

「バトル！ピケルたんでカードガンナーを攻撃！」

恵遊 LP1900↓300

「破壊されたので一枚ドロロー！」

「構わん！克蘭たんでダイレクトアタック！」

「直接攻撃宣言時、畏カード『王魂調和』を発動！」

「何?!」

墓地からエネルギーが溢れ出る。

「直接攻撃を無効にして、レベル8以下になるように墓地からシンクロ素材を除外して、シンクロ召喚を行う」

「(……)のタイミングで、一体何を……」

恵遊は溜息を吐くと、眩く。

「凜子」

「どうしたの？」

「いつ混ぜ込んだ」

「フフフ……さあ、いつだろうね」

凜子は、とても楽しそうな表情になった。

「まさか……」

「俺は墓地から、レベル4のデブリ・ドラゴンと、レベル1の儀式魔人デザイナーズと、レベル3のカードガンナーを除外！」

デザイナーズとカードガンナーが星になり、デブリ・ドラゴンが緑の輪となってそれを包む。

「王者の咆哮、今天地を揺るがす。唯一無二なる覇者の力をその身に刻むがいい！シンクロ召喚！荒ぶる魂、『レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカークライト』！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカークライト ATK3000 ☆8

「ば、バカな。それは聖野凜子の……」

「本当にマジでいつ混ぜ込んだんだか……で、どうするんだ？」

「……ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロー！『死者蘇生』で『儀式魔人リリーサー』を特殊召喚して、スカー

ライトの効果を発動。フィールドの、このカードの攻撃力以下のモンスターを全て破壊する！そして、破壊したモンスター一体につき、500ポイントのダメージを与える！」
初登場したリリーサーが吹き飛んだ。

そして、真司の嫁たちが破壊される。

真司 LP 8400 ↓ 6900

「く……『月鏡の盾』をデツキボトムに送る」

真司 LP 6900 ↓ 6400

「そして、『巨大化』をスカーライトに装備。『スキル・サクセサー』を除外してドーピング。さあ、決闘終了だ！ダイレクトアタック！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト ATK 3000 ↓ 6000 ↓ 6800

0

スカーライトのブレスが真司のライフを焼き尽くした。

真司 LP 5900 ↓ 0

★

また私とデュエルをしよう。

真司はそう言って、デュエルコートを去っていった。

……同志、久我昇平を引きずりながら。

惠遊は溜息を吐きながらコートを降りた。

そして、スカーライトのカードを出した。

「本当に何時混ぜたんだ。俺は全く気が付かなかったぞ」

「愛がなせる技だよ！」

勘弁してほしい。

凜子はヤンデレとはまた違った方向性で、惠遊のことを過剰に愛している。

なんとなく、それが分かった。

「まあいい。これは返しておくぞ」

「そっか」

凜子はスカーライトのカードを受け取った。

「惠遊君が使ったカード 惠遊君が使ったカード 惠遊君が使ったカード 惠遊君が使ったカード……」

カード……」

ブツブツと、まるで、その『惠遊が使ったカード』という情報などをカードに刻み込むかのように呟く凜子。

……なんだろうな。スカーライトの涙目になった表情を察した気がした。

第六話

エキセントリック・テンスというのは称号であつて、特権ではない。

学校側も、称号として与えはするが、それ以上のものを与える訳ではない。

だがしかし、認められるだけの實力を持つてしていると判断できる明確な指標であることも間違いではない。

神代美咲は鹿島朱里と言う使用人がいる。

久我昇平は近くに固定メンバーはいないが、飄々とした性格なので壁がないといえる。

猪八重銀二と神楽真司は、他との付き合いが薄い代わりに、同じ小学校のクラスメイトであつたことを考えると、エキセントリック・テンス同士ではあるが、友好関係があるといえる。

正体不明のプライバシーブレイカーは、いろいろな意味で論外だ。

結果として、学校内における関係が狭い印象が強い。

とはいえ、そうではない者もいる。

西条剛毅

高等部二年で、身長二メートルを超える大男。

鍛え上げられた肉体もあって、しかもスキンヘッド。

制服は袖が耐えられないので、改造してノースリーブにしている（冬も）。

初見ではヤがつく職業についていそうだが、瞳は威厳や風格があり、落ち着いたものだ。

そんな剛毅は、エキセントリック・テンスとして与えられた部屋で、モニターを見て確認している。

そこには、恵遊のデュエルが映されていた。

「剛毅さん。あの編入生がどうかしたんですか？」

青いモヒカンと言う新世代と言うより『亜世代』なファッションをしている男子生徒が剛毅に聞いた。

その横では、ボサボサの茶髪の女子生徒があくびをしている。

青モヒカンは宝生来駕^{ほうしょうらいが}。女子生徒は巖島小百合^{いわしまこむぎ}。

「うむ……私は、この生徒はまだ本気を出していないように思う」

「そうっすかね？ 全てのデュエルで、かなりギリギリだと思っすけど」

確かに、ハングリーバーガーを切り札としており、デッキパワーとしてはそこまで高くない印象を受けるのは仕方がないが、うまくカードを使って攻撃力は高い。ただし、

デュエルそのものは単調である。

というより、エクストラデッキがネタのためにしか存在していない。と言う雰囲気だ。

「墓地を利用し、レベル3をうまく扱うというのなら『マスマティシャン』を投入できる。『カーボネドン』を投入しているのなら、実質、レベル1と2、そして6のチューナーモンスターを採用可能だ。そう考えれば、サーチのための『虹光の宣告者』を投入できるだろう」

「あ、確かにできますね」

来駕は頷く。

「現在フィールドに出したのは、ズババジエネラルを除いてすべて融合モンスターだ。意図的なのか、それとも、全力を出すことを避けようとしているのか……いずれにせよ、シンクロができる儀式デッキで『虹光の宣告者』が入っていないのは珍しいだろう」

「気になるっすね。来駕さん。ちよっと試してみるっすよ」

「え、俺と小百合さんでタッグで挑むんですか?」

「その通りっすよ。剛毅さん。いっすすよね」

「構わん」

そうと決まれば、と言った雰囲気、小百合は来駕を引っ張っていく。

「ちよ、小百合さん痛いですよ！一体どこからこんな筋肉が……」

「それ以上女性に対して失礼なこと言うと言おうと首の骨折るつすよ」

「な、剛毅さん。助けてくださいあああああああああ！！！！」

来駕の悲痛な叫びが響いた。

「まあ、頑張れ」

剛毅は自分のために常設されているデュエルコートの使用許可のために電話するのだった。

★

「と言うわけで、青芝恵遊。私たちとタッグデュエルつすよ」

「やだ」

いつも通りと言うか、このやり取りである。

「ていうか、誰？」

「エキセントリック・テンスの一人、西条剛毅の側近。俺は宝生来駕。こっちは巖島小百合です」

青いモヒカンと言う奇抜なセンスのわりに礼儀正しいな。

ていうか、側近とかいるのか。

美咲のそばにいる朱里みたいなものかね？

「西条剛毅と言えば、この学校の中でも影響力がある人で、身長二メートルを超えるムキムキのスキンヘッドだけど、面倒見がいいって聞くよ」

「西条グループはデュエルも強いけど、福祉関係でも有名だね」
意外な感じである。

「で、デュエルつすよ」

「やだ」

「小百合さん。青芝恵遊はハンバーガー渡さないとデュエルしてくれませんって。あ、これ、ハンバーガーです」

来駕がハンバーガーがたくさん入った袋を出した。

恵遊は笑顔で受け取る。

「いいだろう。デュエルしてやる」

周りは『前言撤回が早いのか……優先順位が固定されているのか……わからん』と言った雰囲気だった。

「あ、剛毅さんから、デュエルコートを使わせてもらえるように頼んでるので、そつちに移動しましょう」

「……そうか」

小百合は暴走役。来駕は制御役と言った感じなのだろう。

いいのやら悪いのやら。

「そう言えば、タッグデュエルなんだよね。それなら、私が恵遊君とチームを組むよ！」
凜子が名乗り出た。

恵遊はえーつと言っ顔をした。

凜子はハンバーガーを出した。

恵遊は頷いた。

「……何なんすか？この人」

「小百合さん。こう言う人だっつて何度も言いましたよ。俺」

とまあ、そう言うわけなので。

★

「しかし、デュエルコートを使わせてもらえらるとは太っ腹だな」

デュエルコートに四人が立って、それぞれデュエルディスクを構える。

タッグデュエルはあまり行われぬのか、ギャラリーも若干嬉しそうだ。

『ええと……【機械仕掛けの殲滅者】 敵島小百合と【ビッグテイマー】 宝生来駕だな』

『二人とも西条剛毅の側近。興味を持つだけの戦績が青芝恵遊にはあるからな』

『ただ、あの二人はプラチナエリア。ゴールドエリアの聖野が足を引く張る可能性があるがあ
るが……』

『いや、前回のデュエルを考えると、うまいこと恵遊が使う可能性もある』

『とういか、あのデッキでタッグデュエルをするとうなるのか見てみたい』

『あ、俺も』

ふーむ……まあ、そんなものか。

あとは全員、カードで語ることにしたようだ。

全員がカードを五枚引く。

「『デュエル！』」

恵遊&凜子 LP 4000

来駕&小百合 LP 4000

「私の先攻」

先攻は凜子。

ターンの順番は、凜子↓小百合↓恵遊↓来駕の順番。

タッグフォースルールなので、小百合からバトルフェイズが可能である。

「私は『レッド・リゾネーター』を召喚！効果で『聖鳥クレイン』を特殊召喚するよ。ク

レインの効果で一枚ドロー！」

レッド・リゾネーター ATK 600 ☆2

聖鳥クレイン ATK 1600 ☆4

「レベル4の聖鳥クレインに、レベル2のレッド・リゾネーターをチューニング。シンクロ召喚！レベル6『レッド・ライジング・ドラゴン』！」

レッド・ライジング・ドラゴン ATK2100 ☆6

「レッド・ライジング・ドラゴンの効果で、レッド・リゾネーターを特殊召喚。ライジング・ドラゴンの攻撃力分のライフを回復する」

レッド・リゾネーター ATK600 ☆2

恵遊&凜子 LP4000↓6100

「ほう、初手から飛ばすっすね」

「当たり前だよ。私はレベル6のレッド・ライジング・ドラゴンに、レベル2のレッド・リゾネーターをチューニング。シンクロ召喚！レベル8『レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカークライト』！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカークライト ATK3000 ☆8

「私はカードの二枚セット、ターンエンドだよ」

「初手からスカークライト……ワイバーンの可能性も考えてたんすけどね」

「このカードは恵遊君が使ったカード。私のお気に入りだああああ！」

突如咆哮を上げる凜子。

恵遊とスカークライトはげんなりした。

小百合も、何を言えはいいのかわからない。と言いたそうな表情でデッキトップのカードを一枚引く。

「まあ、いいつす。ドロー！私は『深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト』を妥協召喚つす！」

深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト ATK3000↓0 ☆10

「な、列車だと!？」

「そのとおりつす。そして、自分フィールドに機械族・地属性モンスターが召喚・特殊召喚されたことで、このカードを手札から特殊召喚するつす。現れる。『重機貨列車デリックレーン』！」

重機貨列車デリックレーン ATK2800↓1400 ☆10

「そして、レベル10のナイト・エクスプレス・ナイトとデリックレーンでオーバーレイ！『超弩級砲塔列車グスタフ・マックス』をエクシーズ召喚つす！」

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス ATK3000 ★10

来たか。ライフ4000だとちよつと勘弁してほしいモンスターが登場である。

「効果発動。オーバーレイユニットを一つ使い、相手に2000ポイントのダメージを与えるつすよ！」

「うおおおー！」

「きゃあああー！」

恵遊&恵遊 LP6100↓4100

「そして、取り除いたデリックレーンの効果！スカーライトを破壊するっすー！」

『レッド・ガードナー』を手札から墓地に送って効果発動。これで、私のモンスターは効果で破壊されない！」

「むう……仕方がないっすね。カードと一枚セットして、ターンエンドっす」

「俺のターン。ドロー！」

やっと恵遊のターンだ。

ふむ……この手札なら……。

「俺は『マンジユ・ゴッド』を召喚。効果で、デッキから『ハングリーバーガー』を手札に加える」

「ん？カゲトカゲがないのなら、ズババジエネラルは……」

「……あんまりやりたくないんだけどな。凜子」

「むっ？」

凜子に一枚のカードを見せる。

次の瞬間、凜子のテンションは最高潮に達した。

「よっしやあああああー行くよ恵遊君！」

「はあ……俺は魔法カード『融合』を発動！」

「え……」

「ゆ……融合っすか!?!」

発動したカードに驚いたようだが、来たんだから仕方がない。

「俺の手札のハングリーバーガーと」

「私のレッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライトで」

「融合召喚！」

手札からハングリーバーガーが出現して、スカーライトと共に渦に飛び込んだ。

「現れる。レベル10『波動竜騎士 ドラゴエクイテス』！」

波動竜騎士 ドラゴエクイテス ATK3200 ☆10

スカーライトとハングリーバーガーによる融合召喚。

当然とばかりにハングリーバーガーは左肩に存在する。

「……な、なんか。すごい迫力があるモンスターっすね」

「オーラがみえるのは気のせいではないような気が……」

あまり知られてはいないことだ。

あふれんばかりのハンバーガーの愛が強い恵遊がもつハングリーバーガーは、精霊としてのカードの強さがある。

そして、その恵遊が使ったスカークライトにも、わずかながら精霊としての要素が付与され、凜子の愛に寄ってそれが完全に定着したのだ。

まあ、若干異なるものの、いずれにせよ愛の力である。

ただし、愛の力だけでカードを精霊化させるなどという暴挙に出るのは、古今東西探してもこいつくらいのものでだろう。

ドラゴエキイテスには精霊としての力が何にも宿っていないのに、なにかとオーラを感じるのはそのせいだ。

精霊の力がふんだんに宿ったハングリバーガーとスカークライトのカード。

それらが融合して生まれたドラゴエキイテス。

よくわからないことになるのも、ある意味当然である。

「ドラゴエキイテスの効果発動。墓地のスカークライトを除外して効果を得る！そして、そのまま効果を発動！」

ドラゴエキイテスが持つ槍に爆炎が宿る。

そして、その槍を地面に突き刺すと、地面が割れた。

「永続罫『マーシャリング・フィールド』を発動。グスタフマックスの破壊の身代わりにするっす！」

むう……。

「そして、マーシャリング・フィールドが墓地に送られたことで、デッキから『RUMIアージエント・カオス・フォース』を手札に加えるっすよ」

「なら、バトルだ！ドラゴエクイテスで、グスタフマックスを攻撃！」

ドラゴエクイテスのランスがグスタフマックスを貫いた。

来駕&小百合 LP4000↓3800

「カードを一枚セットして、ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロロー！」

来駕のターンだ。

一体どんなデッキを使って来る？

「俺は手札から『ヒゲアンコウ』を召喚」

ヒゲアンコウ ATK1500 ☆4

水属性専用のダブルコストモンスターか。

「『カード・アドバンス』を発動して、デッキトップを五枚確認してアドバンス召喚権を増やす。ヒゲアンコウをリリースして、『ビッグ・ホエール』をアドバンス召喚！」

「誰!？」

ビッグ・ホエール ATK1000 ☆9

「ビッグ・ホエールって……どんな効果だったっけ？」

「こう言う効果だ。アドバンス召喚成功時、ビッグ・ホエールをリリース。デツキから、レベル3の水属性モンスター三体を、効果を無効にして特殊召喚できる」

「ええ……」

「デツキから『スターフィッシュ』二体。『水晶機巧ーリオン』を特殊召喚」

スターフィッシュ ATK300 ☆3

スターフィッシュ ATK300 ☆3

水晶機巧ーリオン ATK500 ☆3

「……効果が無効にされていなかったら結構マゾイモンスターだな」

最近で言うとなんを出さなかつたら結構マゾイかな。

ラズラを三体出せば、天気モンスター三体で『虹天気アルシエル』をリンク召喚できるわけだし。

そう思うと怖いな。

「レベル3のスターフィッシュ二体に、レベル3のリオンをチューニング。『浮鶴城』をシンクロ召喚。その効果で、墓地の『ビッグ・ホエール』を特殊召喚する」

浮鶴城 ATK 0 ☆9

ビッグ・ホエール ATK1000 ☆9

「レベル9が二体」

「その通り。レベル9の浮鶴城とビッグ・ホエールで、オーバーレイ！エクシーズ召喚『No. 9 天蓋星ダイソン・スフィア』！」

「でかい！」

No. 9 天蓋星ダイソン・スフィア ATK2800 ★9
空を覆い尽くすレベルの巨大なモンスターが出現する。

うわ、なにあれ。

「ダイソン・スフィアの効果発動。オーバーレイユニットを一つ使い、ダイレクトアタックを可能にする」

「チツ……」

「ダイソン・スフィアで、ダイレクトアタック！」

レーザーの雨が降ってきた。

「畏カード『針虫の巣窟』を発動。デッキから五枚を墓地に送る……よし。『ネクロ・ガードナー』で攻撃を無効にする！」

「良くもそうポンポンと出せるものだ」

「愛されてるんで」

「過労死寸前とも言おう」

ネクロ・ガードナーをチラツと見る。

確かに、疲れているような印象がある。

「それは言わない約束だ」

「確かに。俺はカードを二枚セットしてターンエンド」

「私のターン。ドロー！」

凜子がカードを引く。

そして次の瞬間に思った。

場所的に、ドラゴエクイテスが邪魔だと。

「『閻次元の解放』を発動。除外されているスカーライトを特殊召喚！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト ATK3000 ☆8

「ほう、攻撃力3200と3000のモンスター……でも、俺のダイソン・スフィアは、あらゆる攻撃を何度でも無効にする。並べても意味はないぞ」

「だからこうするんだよ。私はドラゴエクイテスとスカーライトをリンクマーカーにセット、『天球の聖刻印』をリンク召喚！」

天球の聖刻印 ATK0 LINK2

「て、天球の聖刻印……」

「そして私は、『マジック・プランター』を使って、閻次元の解放を墓地に送って二枚ドロ、そして『復活の福音』を使って、もう一度スカーライトを復活させる！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカークライト ATK3000 ☆8
 「私は『痛み分け』を発動。天球の聖刻印をリリースして、ダイソン・スフィアをリリースするよ！」

「『デストラクト・ポーション』を発動。ダイソン・スフィアを破壊して、その攻撃力分のライフを得る！」

来駕&小百合 LP3800↓6600

「むう……でも、リリースされた聖刻印の効果が発動するよ。デッキから『ガード・オブ・フレムベル』を特殊召喚！」

ガード・オブ・フレムベル ATK0 ☆1

「レベル8のスカークライトに、レベル1のガード・オブ・フレムベルをチューニング。シンクロ召喚！レベル9『琰魔竜 レッド・デーモン・アビス』！」

琰魔竜 レッド・デーモン・アビス ATK3200 ☆9

「アビスか……」

「バトル！レッド・デーモン・アビスで、ダイレクトアタック！」

伏せカードはある。

だが、アビスの効果でどのみち無効になるのだ。

シンクロ召喚が成功した時点で、対した意味はない。

来駕&小百合 LP6600↓3400

「ちよ、本当にあんたってゴールドエリアなんすか？」

「そんなもの、私の恵遊君への愛があればいくらでも突破できるよ！」

迷惑……。

「アビスの効果を発動。もう一度ガード・オブ・フレムベルを特殊召喚。そして罫カード『緊急同調』を発動！」

「何?！」

「レベル9のレッド・デーモン・アビスに、レベル1のガード・オブ・フルムベルをチュウニング。シンクロ召喚! レベル10『琰魔竜 レッド・デーモン・ベリアル』！」

琰魔竜 レッド・デーモン・ベリアル ATK3500 ☆10

「まだバトルフェイズ中だよ! ベリアルでダイレクトアタック!」

「罫カード『ドレインシールド』を発動。攻撃を無効にしてライフを回復する」

来駕&小百合 LP3400↓6900

「マンジュ・ゴッドでダイレクトアタック!」

「あ、いたんすね」

そりやね。

来駕&小百合 LP6900↓5500

「むう……私はカードを一枚セットして、ターンエンドだよ」

マンジュ・ゴツドは、『え、俺をリリースしないの!?!』と言う顔になっていたが、誰も気が付かなかった。

「私のターンつす。ドロー!」

次は小百合のターンだ。

「私は手札から、『ソウル・チャージ』を発動つす。墓地からナイト・エクспレス・ナイト、デリック・レーン等特殊召喚するつすよ!」

深夜急行騎士ナイト・エクспレス・ナイト ATK3000 ☆10

重機貨列車デリックレーン ATK2800 ☆10

来駕&小百合 LP5500↓3500

ソウル・チャージを普通に使って来るとは……。

「そして、ナイト・エクспレス・ナイトとデリックレーンでオーバーレイ! 『超巨大空中宮殿ガンガリディア』をエクシーズ召喚つす!」

超巨大空中宮殿ガンガリディア ATK3400 ★10

チツ。ソウル・チャージのせいでバトルフェイズが行えないとはいえ、もともとバーンダメージを稼ぐのが得意な列車だと面倒だな。

「ガンガリディアの効果発動。ベリアルを破壊して、1000ポイントのダメージを与

えるっすー！」

恵遊&凜子 LP4100↓3100

「デリックレーンの効果で、セットカードを破壊！」

ダメだ。凜子がいろいろとおいついていない。

「そして、『RUM—アージェント・カオス・フォース』を発動。ランク10のガンガリディアで、オーバーレイ！」

ガンガリディアが渦に飛び込んで行く。

「カオス・エクシーズ・チェンジ！ランク1 『CX 超巨大空中要塞バビロン』！」

CX 超巨大空中要塞バビロン ATK3800 ★11

「さあ、私はこれでターンエンドっす。さあ、青芝恵遊。お前の本気を見せてみるっすよ」

「俺の本気？」

「そうっすよ。まだ、全然本気なんて出してないっすよね」

小百合は特にふざけた印象はない。

本当に、恵遊が本気を出していないように感じているようだ。

「面白いことを言うじゃないか。俺のターン。ドロー！」

ドローしたカードを見る。

お前か。

「まずは『手札抹殺』を使って手札交換だ。で、『カードガンナー』を召喚。効果でデッキトップを三枚墓地に送って、攻撃力をアップ！」

カードガンナー ATK400↓1900 ☆3

「な……やっぱりでそれ出来るんすか!?!」

「『儀式の準備』を発動。デッキの『ハングリーバーガー』と、墓地の『ハンバーガーのレシピ』を手札に加える。そして、ハンバーガーのレシピを発動。墓地のリリーサーとデモリッシャーを除外。ハングリーバーガーを儀式召喚！」

ハングリーバーガー ATK2000 ☆6

「やっぱり単調なデュエルっすね」

「そうだな。俺もそう思う。でも、俺はやっぱ、ハングリーバーガーが好きなんでな。そして悪いが、攻撃力3800のモンスターなんて、俺の前には無力！墓地から『カーボネドン』を除外、デッキから『ガード・オブ・フレムベル』を特殊召喚！」

ガード・オブ・フレムベル DFE2000 ☆1

「そして、レベル3のカードガンナーに、レベル1のガード・オブ・フレムベルをチューニング、『アームズ・エイド』をシンクロ召喚！」

アームズ・エイド ATK1800 ☆4

「な……アームズ・エイドっすか!？」

「シンク口をまともに採用していたデータは今までになかったはず……」

来駕と小百合が驚愕している。

まあ、ほとんど出していなかったしな。

「俺は手札の『最強の盾』と、アームズ・エイドをハングリーバーガーに装備!」

出現する最強の盾。

いつも通りに添えられた。

そして、アームズ・エイドがそーつとハングリーバーガーのところに来る。

……イラストを確認してもらえばわかるが、ハングリーバーガーはちよつとキバのようなものがあるだけで、別に腕も何も無い。本当にただのハンバーガーなのだ。

ここまで出しゃばっているのだが、いずれも、肉をぶつ飛ばしていればなんとかなっていた。

だが、腕はないのだ。

……どうやって装備すればいいんだろう。

ハングリーバーガーは口(?)がパカパカ動いて、アームズ・エイドは指芸をすると、うちよつと意味不明な会話が数秒間続く。

最終的に、アームズ・エイドは、ハングリーバーガーの動作に連動して動く、パント

マイマーのような動きをすることで結論付けたようだ。

「ハングリーバーガー。最強の盾を忘れてるぞ」

『――！』

ハツとした様子で、アームズ・エイドとの協議中にほつたらかしていた最強の盾を見る。

いつもは添えられていて、攻撃時にぶっ飛ばしておけばよかったのだが……。

なんと、アームズエイドが掴んだ。

まあ、今はどちらもハングリーバーガーの装備カードだ。百歩譲れば納得できないわけではない。

できないわけではないが……。

どうすればいいのかわからず佇むハングリーバーガーと、最強の盾を持っているアームズ・エイド。

なかなかシユールなことになってしまった。

ハングリーバーガー ATK2000↓3850↓4850

でも攻撃力的にはイヤツホオオオオオオオオオオオウ！な感じになっている。

「よし、デュエル続行！そして、決闘終了だ！ハングリーバーガーで、バビロンを攻撃！」

アームズ・エイドが器用に動いて、手裏剣を投げるように最強の盾を投げる。

特に意味はないが、ハングリーバーガーはそれに合わせてパントマイマーのように動く。

あ、動作逆……くっそ下手だ。

ちなみに、バビロンはものすごく上の方にいるのだ。空中宮殿だからな。

情けない速度で最強の盾が飛んでいき、若干距離が足りていないのではないか？という不安はあったものの、盾は命中。

どう考えても破壊出来るような勢いではなかったが、そんな物理的な整合性を無視するかのよう、バビロンは砕け散った。

来駕&小百合 LP3500↓1450

「くっ……」

「アームズ・エイドの効果だ。破壊したモンスターのダメージを与える！」

バビロンの破片が落ちてきた。

「うわあああああああ」

来駕&小百合 LP1450↓0

勝利した。

なんかすごく無理矢理感があるのは気のせいだろう。

そして、アームズ・エイドはハングリーバーガーを見る。

アームズ・エイドは、ハングリーバーガーとの初めての競演なのだ。握手をした気分になったのである。

『握手……どうしよう……』

そんな雰囲気の流れる。

なんとアームズ・エイドは、ハングリーバーガーをわしづかみにした。

ハングリーバーガーは『!?!』と言った感じになった。当たり前である。

何とも締まらない感じになったが、まあ、恵遊のモンスターなのだ。これがデフォである。

「……」

マンジユ・ゴッドはそつといなくなった。

★

「本気を出させるつもりが、まさか、あんな結果で終わるとは想定外っすね」

「シンクロを使うデータはなかった。だが、使うのはある意味当然でしたね」

来駕と小百合は思うところはあったようだが、一応納得したようだ。

「私の恵遊君のタッグだからね。完全無敵だよ！」

「いや、二回目の私のターン。全く追いついてなかったっすよね」

まあ、まだカードパワーに頼っている雰囲気があるな。

それは恵遊も変わらないが。

「それにしても、デュエルしてみよう。多少高い程度の攻撃力はあまり意味が無いのだな……」

そう、恵遊の戦術は一定だ。

まあ、様々なカードを取り入れている中で、うまく儀式魔人を墓地に叩きこんでくれるカードガンナーがいるからこそその戦術とも言えるが。

本当に感謝である。

「とはいえ、その戦術を活かせるのなら、『カオス・ソルジャー』のままの方がいいと俺は思った」

来駕が言っていることはある意味正しい。

『儀式の下準備』をはじめとする儀式サーチのカードを使い、さらに、それらで儀式召喚を行った後、『最強の盾』で強化する。というのが恵遊の基本戦術と云っている。

だがそう考えると、『カオスの儀式』と『カオス・ソルジャー』をサーチして儀式召喚、そして最強の盾を使えば、ほぼ同じ条件で、攻撃力は5500になる。

ある程度、攻撃力を確保できているとはいえ、ハングリーバーガーでは力が不足しているといっている。

「そうっすね。普通に考えて、カオス・ソルジャーを使った方がいいっす」

まあ、よく言われる話だ。

「よく言われるけどな……ただ、俺はこれが好きだからな」

面白いと思つた。

楽しいと思つた。

だから、恵遊はデュエルを続けている。

「そうっすか。まあ、シンクロを引きずりだせたということで、今は納得して置くつすよ」

小百合が背を向けて歩いていく。

来駕は一礼して去っていった。

恵遊は溜息を吐いた。

「恵遊君。私とのタッグデュエルはどうだった？」

「悪くはないんじゃないの？」

「お互いのエースを融合して出せるモンスターがいるもんね！」

ドラゴエクイテス。

優秀なのか……不憫なのか……。

恵遊にもいまいちよく分からないモンスターである。

第七話（特例アリ）

中等部一年生と編入生というのは、デュエルをしてきた年月は違っていて、学校に入ってきたとは同じだ。

編入してることが出来る時点でそこその実力を持っていると判断できるが、基本、中等部から努力を積み重ねて強くなったものが、高等部に上がるころ、エリアとしてはプラチナエリア。才能があればエキセントリック・テンスになることが出来る。

なお、神代美咲は中等部一年として入学した次の日に、当時のエキセントリック・テンスの序列一位を倒した化け物として記録に残っているほどである。

ちなみに、当時中等部二年だった真司と銀二だが、

真司は近くの小学校に望遠鏡をもってかわい子を探しに行っていた。

銀二は『ゼルダの伝説』の新作が出たばかりで興味などなかった。

という、よくわからないというか、片方が犯罪ストレスという、失望されても文句は言えない感じ……というか小学校のころからロリコンっていまいち意味が分からないのだが、それはそれとして、彼らがエキセントリック・テンスになったのはそれよりも後である。

閑話休題

はなしがそれた

恵遊は編入してきてから負けなしである。

一度だけ引き分けだが、まあ、昇平コイツに関しては、クリムゾン・ノヴァとドン・サウザンドの契約の二枚で初手引き分けを狙ってくるような奴なのでノーカンしても大丈夫だろう。

ゴールドエリアだが、実質プラチナエリアで名家出身の聖野凜子。

プラチナエリアで、序列一位、神代美咲の側近、鹿島朱里。

マスターエリアで、エルフの剣士とダリベでぶんまわす猪八重銀二。

マスターエリアで、ロリコンだが高性能の神楽真司。

プラチナエリアで、エキセントリック・テンスの一人、西条剛毅の側近、宝生来駕と
巖島小百合。

全てのデュエルを引き分けにしてきた昇平はカウントしないとしても、好成绩にもほどがある。

だが、もし勝ったら、その評価を総取りできる。と言う意味でもある。

中等部一年の中でも、もしかしたら勝てるのではないか。と言う雰囲気の流れてい

た。

い。エキセントリック・テンスに勝ったとしても、即座にその称号が移動するわけではない。

これは、挑戦を強制はさせないが、逆に拒否させないため、あくまでも成績やタクティクスで判断する。

運で勝ったとしても、一応書類にはあげられるがたいした評価にはならない。

ジャイアントキリングは話題になるだけで、勝つべき時にしつかりと勝てる人材でなければ、エキセントリック・テンスの称号を渡すわけにはいかないのだ。変なのが多いが。

い。だが、現在好成绩の青芝恵遊なら、戦うことは別にためらいはないと考えるものは多い。

エキセントリック・テンスの称号を持っていないからだ。

『持っただけでもおかしくはない実力』であることと、『持っている』と言うのは、いろいろな意味で差があるのだ。

話が長くなった。

要するに、中等部一年の主席入学。みたいな奴は調子に乗るのである。

★

「影森^{かげもり}。お前なら青芝惠遊に勝てるんじゃないか？」

中等部一年。主席入学者は影森辰巳^{かげもりたつみ}。

自分に酔った印象がある男子生徒だ。

確かに、この学校で主席入学と言うのは素晴らしい成績だ。

自分に酔うのも悪くはないし、学校側も期待しているのは間違いない。

「フフフ。そろそろ僕も挑もうと思っていたんだ」

「今日の放課後にも行ってみようぜ。アイツ、エキセントリック・テンスを二人も倒してるんだ。勝ったらお前もなれるんじゃないか？」

中等部一年では、そんな空気が流れていた。

とはいえ、中等部と高等部は、校舎がそもそも違う。

惠遊の『強さ』というのは、伝わる部分が微妙なのも事実だった。

「宣言しよう。今日、僕は青芝惠遊に勝利する」

指を突き上げ、そう宣言する辰巳。

……ナルシストとはよく言ったものだが、こんな変態だからこそ、この学校^{ボーダー}ではかなりの実力を持っているのかもしれない。

そろそろ、この空気をどうにかしたいと思っっている学校側からすれば、たまったものではないが。

まあそれはそれとして、影森辰巳は挑む予定のようだった。

★

「青芝恵遊。僕とデュエルしろ」

「嫌です」

この安定感である。

安いわりにかつちりしているのだ。

「ていうか誰だ？」

「僕を知らないのか？今年度の主席入学者。影森辰巳だぞー」

だが、恵遊からすれば知らないものは知らない。

というより興味がない。

そもそも、デュエルで強くなるうとしてこの学校に来たのではない。

ただし、恵遊がハンバーガーについていろいろ考えたとき、なんとなくハンブリーバーガーを使った方がいいということ。

あと、一応、名門・神代家の出身で、デュエルについてはなんだかんだで興味があるから強くなっただけなのだ。

デュエルの優先順位が低いわけではない。

デュエルで勝ったらクーポンをもらえるところもあるので。

だが、何もなしにする理由にはならないのだ。

「あ、これ」

先ほどから、辰巳のすぐ後ろで控えている男子生徒が、恵遊にハンバーガーを渡した。

「……………いいだろう」

……………これ、毎回やるのだろうか……………。

そんな雰囲気の流れていた。

★

主席入学者と、好成绩の編入生の二人だが、どちらも学校内では大した称号も権限も持っていないので、普通にデュエルコートを使うことにした。

『で、今回はどんな状況なんだ？』

『プレイバシーブレイカーから情報が来た。エキセントリック・テンスを何人も倒して、さらに好成绩の恵遊を倒せば、早くも次期エキセントリック・テンスの候補に乗るんじゃないか。みたいな感じらしい』

『実際どうなんだ？』

『いや、エキセントリック・テンスの選定項目なんて知らねえよ。ただ、戦績はかなり必要だから、試合数はある程度必要んじゃないかって聞いてるくらいだ』

なんともまあやふやな……………。

辰巳は自信満々。といった表情でデュエルディスクを構える。

「フッフ。青芝恵遊。貴様のようなふざけたデツキを使うデュエリストなど、僕の敵ではないことを教えてやろう」

「まあいいけどさ。デュエリストならカードで語ろうぜ」

「……いいだろう。叩き潰してやる」

ずいぶん自分を過剰評価するタイプの人間だな……。

ここまで公言する人間は珍しい。

恵遊はカードを五枚引いた。

辰巳もカードを五枚引く。

「デュエル！」

恵遊 LP4000

辰巳 LP4000

「僕の先攻だ。『終焉の焰』を使ってトークンを生成。『冥界の宝札』を発動して、トークンを二体リリース。モンスターをアドバンスセットだ。カード二枚ドロ。僕はカードを二枚セットして、ターンエンドだ」

ふむ、『冥界の宝札』を軸にした「アドバンス召喚」だろうか……。

「俺のターン。ドロ！」

あのトークンを使ったということは、あのモンスターは閻属性だ。

該当するモンスターは多いが、守備表示である以上、一定以上の攻撃力で殴れば戦闘の破壊ができないわけではないだろう。

「俺は『カードガンナー』を召喚。効果を発動して、デッキからカードを三枚墓地に送る」
カードガンナー ATK400↓1900 ☆3

おなじみの潤滑油だ。

まあ、装填したカードを使わずに終わることも多いのだが。

「さらに、『儀式の下準備』を発動。デッキから『ハンバーガーのレシピ』と『ハングリーバーガー』を手札に加える」

定番カードである。

「そして、『ハンバーガーのレシピ』を発動。墓地のデザイナーズ、プレサイダー、手札の『サクリボー』を除外して、『ハングリーバーガー』を儀式召喚。効果で一枚ドロー」

ハングリーバーガー ATK2000 ☆6

ハングリーバーガーは恵遊の方を見ると、『盾ちようだい!』と言った雰囲気です恵遊を見る。

「手札から『最強の盾』を装備させる」

ハングリーバーガー ATK2000↓3850

ハングリーバーガーのそばに最強の盾が添えられる。
もはや見慣れた光景である。

ハンバーガーへの愛ゆえであり、ばかばかしいにもほどがあるが、悔るなかれ、このばかばかしい愛に寄って、攻撃力3800以下のモンスターは無に帰するのだ。

「バトルだ！ハングリーバーガーでセットモンスターを攻撃！」

盾を飛ばすと、セットカードが開いた。

「破壊されたのは『墮天使アスモディウス』だ。二体のトークンを特殊召喚する」

アスモトークン DFE1300 ☆5

デイウストークン DFE1200 ☆3

「アスモディウスだったのか……だが、プレサイダーによって効果を付与されたハングリーバーガーの効果で一枚ドロウ。カードガンナーでアスモトークンを破壊する」

守備表示だったのでダメージはない。

ただ……恵遊のデッキは、攻撃力においては4000が普通になるようなデッキを相手にしない限り、ほぼ上に立てるのだが、貫通能力を付与するカードが少ないという構築だ。

戦闘では破壊されないデイウストークンは、正直厄介である。

とはいえ、それを残しておくことはしないと思うのだが。

「俺はカードを一枚セットして、ターンエンドだ」

カードガンナー ATK1900↓400

「僕のターン。ドロー！」

さあ、どう来る？

「フッフ、青芝恵遊。いくらハングリーバーガーの攻撃力が高いとはいえ、所詮、効果耐性のない雑魚カードだ！僕は『フォトン・サンクチュアリ』を発動して、トークンを二体特殊召喚し——」

フォントントークン DFE0 ☆4

フォントントークン DFE0 ☆4

二体のモンスターが出現した瞬間、上から滝のような量と勢いの水が降り注ぎ、フィールドを飲み込んで行く。

収まった時、フィールドにいたのはハングリーバーガーだけだった。

持っていた盾を構えて、『危ねえ……』と言った雰囲気を出している。

「な……何が……」

「俺が発動した『激流葬』が発動しただけだ」

「な……『激流葬』だ?!」

「カードガンナーが破壊された。俺はカードを一枚ドローする」

恵遊はカードを一枚ドローした。

それと同時に、辰巳は騒いだ。

「だが、それならなぜ、ハングリーバーガーが破壊されないんだ！」

「忘れたのか……それとも知らないのか……ディザーズを素材にして儀式召喚されたモンスターは罠の効果を受けない。当然、俺が発動したカードもな」

もちろん、罠カードの効果を受けない以上、罠カードの効果で攻撃を無効にすることができない。

銀二や真司が罠カードを用いた防御手段をとらないのは、それが効かない可能性があるということも含まれる。

とはいえ、真司に関していえば、『スピリットバリア』と『アストラルバリア』が理想形であるということもあるのだが……。

「それにしても……」

恵遊は辰巳の残った二枚の手札を見る。

「俺のハングリーバーガーに効果耐性がないということをやったうえで、自信满满に『フォトン・サンクチュアリ』を発動したな。『アドバンス召喚』に入れるとあるという候補はあるが、光属性の最上級モンスターであることは確定だ」

「く……ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロロー！」

恵遊は六枚になった手札を見る。

そして、辰巳のフィールドを見る。

モンスターはいない。手札のうち一枚は光属性最上級モンスター。

フィールドに伏せカードが二枚あるが……一枚はトークン生成カードだろう。

とはいえ、恵遊の手札には墓地で活用するカードがたまっている。

このターンでは動けない。

「バトル：ハングリバーガーでダイレクトアタック！」

『スケープ・ゴート』を発動して、トークンを生成する」

羊トークン DFE0 ☆1

羊トークン DFE0 ☆1

羊トークン DFE0 ☆1

羊トークン DFE0 ☆1

「……なら、羊トークンを攻撃する。そして、ハングリバーガーに付与された効果でド

ローだ」

お、来た。

使っておいて損はないか。

「『手札抹殺』を発動。俺は六枚捨てて六枚ドローだ」

「僕は一枚捨てて一枚ドロー」

「ふーむ……ターンエンドだ」

「僕のターン。ドロー！」

恐る恐る、と言った様子で、ドローしたカードを見る辰巳。

そして、笑顔になった。

「どうやら、このデュエルは僕の勝ちのようだ。僕は三体のトークンを使って、『リンク・スパイダー』と『プロキール・ドラゴン』をリンク召喚して、伏せておいた『リビングゲデック』の呼び声』で、『ギルフォード・ザ・ライトニング』を特殊召喚。そして、この三体をリリース！」

三体をリリース……。

神獣王か？

「フッフ、君が考えているような従属神ではない。みせてやる。現れる『邪神アバター』！」

「な……アバターだと!?!」

黒い何かが溢れたと思ったら、そこに現れるのは黒い太陽。

そして、全てを上回るために、この場にいる最強の姿となり、闇に染まった姿を現す。

そう――

――恵遊のフィールドにいる『ハングリーバーガー』である。

邪神アバター ATK0↓3950

「……」

アリーナに静寂が訪れる。

太陽がうのようによと変形し、そして現れた『黒いハンバーガー』

全てのモンスターのなかからもっとも高い攻撃力+100という、一対^サ一^シだとドレツド・ルートくらいしか倒せないド鬼畜なモンスターである。

だが、その、なんというのだろう。

おそらく邪神アバターも、もうちよつと強いモンスターに化けるつもりだったかもしれない。

ほら、最近、レベル10以上になって来るとヤバいのがいろいろいるだろ？ あんな感じ。

だが……これは……。

とはいえ、使っている辰巳は邪神アバターを出せたことで上機嫌になっており、そのあたりの部分を気にしないタイプのようにだ。

とはいえ、ガチバトルでは必ず勝つが、ダメージは少ないゆえに『ジャンク・アタツ

ク』『メテオ・ストライク』『心眼の鉾』など、色々サポートが必要になるが、それ以上に厄介なのは、もうひとつの効果だ。

こいつが召喚されてから、相手ターンだけで数えて二ターンの間、相手は魔法、罠カードを発動出来ない。

こつちがかなり刺さるのだ。

「冥界の宝札の効果で二枚ドロウする。フッフ、アバターがいれば、どんなモンスターであろうと倒せる！バトルだ！邪神アバターで、ハングリバーガーを攻撃！」

真つ黒な肉が宙を舞い、ハングリバーガーを襲う。

「手札の『クリボール』の効果で、邪神アバターを守備表示にする！」

「む……」

邪神アバター ATK3950↓DFE3950

「魔法、罠以外で対応してきたか。だが、僕の邪神アバターに隙は無い！」

そんなことはないと思う。

「で、ターンは終了するの？」

「そうだな。『マジック・プランター』を使い、『リビングデッドの呼び声』をコストにして二枚ドロウ。カードを一枚セットして、ターンエンドだ」

さてと……。

「俺のターン。ドロー！ハングリバーガーを守備表示に変更する」

「今更守備表示にしたところで……」

「この瞬間、『最強の盾』が参照する数値と、上昇する数値が変更される」

ハングリバーガー ATK3850↓DFE3850

「よって、攻撃力しか参照しない邪神アバターは、攻撃力が下がる」

邪神アバター DFE3950↓2100

「バカな……だが、邪神アバターを破壊することができるわけでは……」

「魔法、罠が発動出来ないってだけで、モンスター効果は無効になっていないし、効果耐性も持っていないだろうに……カードを二枚セットしてターンエンドだ」

ま、こんなものだ。

とはいえ、『最強の盾』を使うことくらいは分かっているはず。

それくらいのこととは予想してほしいものである。

「僕のターン。ドロー！」

さて、どう出て来る？

『冥界の宝札』を軸にしている、していないにかかわらず、【アドバンス召喚】というのは、フィールドが豪華になる代わりに、攻撃力3000以上のモンスターが出てきたときは攻撃力的に苦勞するのだ。

「手札から『迷える子羊』を発動して、トークンを生成、アドバンスセットをして二枚ドロースる。ターンエンドだ」

ふむ、また増えたか。

「俺のターン。ドロロー！」

このターンも魔法、罫を発動出来ない。

だが、発動出来ないところまで妙なことになるとは……ある意味、これからのカード選出も考えて行く必要があるな。

「俺は『デブリ・ドラゴン』を召喚して、『カードガンナー』を特殊召喚。効果は無効になるが発動はできる。デッキから三枚墓地に送る」

デブリ・ドラゴン ATK1000 ☆4

カードガンナー ATK 400 ☆3

「そして、レベル3のカードガンナーに、レベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング。シンクロ召喚、現れる。『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK2400 ☆7

「な……ブラック・ローズ・ドラゴンだど?」

「俺のデッキなら、デブリ・ドラゴン一枚から出せる優秀なカードだ。効果発動。フィールドのすべてのカードを破壊する！」

「1500のライフをほらい『神の通告』を発動！その効果を無効にして破壊する！」
辰巳 LP40000↓2500

ふむ……神の通告か。

「俺はターンエンドだ」

これで、魔法、罠を発動出来ないターンは終わった。

「僕のターン。ドロロー！」

ハングリーバーガーが、『ほらほらかかって来いよ』と言いたそうな顔で、盾に隠れたり、チラツと出てみたり、を繰り返している。

辰巳はイラツとした。

「モンスターを反転召喚する。『禁忌の壺』だ！」

禁忌の壺 ATK2000 ☆9

ハングリーバーガーは『うっは。やべえ！』と言った感じで盾の奥に引っ込んだ。

「リバース効果発動。相手モンスターを全て破壊する！」

「永続罠『スキルドレイン』！」

恵遊 LP40000↓3000

「あ……」

禁忌の壺の効果が無効になっただけではない。

邪神アバター DFE2100↓0

ブラックハンバーガー

邪神アバターの攻撃力も0になった。

そう、こういったカードを使うのにためらいなどないのだ。

恵遊の基本戦術は、ハングリーバーガーに儀式魔人で効果を付与して、最強の盾をつけてぶん殴ること。

ハングリーバーガーは効果モンスターではないのだ。

結果的に、こうなる。

「く……ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロロー！」

「くそ。なぜ僕のカードが、こうも役に立たないんだ！」

辰巳が悔しがる。

だが、恵遊はその理由をなんとなく理解していた。

「そりや当然だ。俺のデッキが変態だからだろ」

普通が通用しない。

いわゆる、恵遊のデッキはネタデッキやファンデッキだ。

実用性を考えると真司のピケクラも大した差はないのだが、マストカウンターがほぼ確定しているゆえに、それを止められないと対抗できなくなる。

『マジック・プランター』のコストにもできて、止めるうえでも有名なカードとしては『デモンズ・チェーン』があげられると思うが、そういったカードも、効果モンスターではないハングリーバーガーには通用しない。

「自分を出すのは構わんが、もうちよつと調べて来いって……」

「だが、頭の中がハッピーセットになったような、こんなバカに僕が……」

「先輩のことをグチグチ言いすぎだ。ハッピーセットは嫌いか？なら全力でハッピーセットしてやる。俺は『ポテトマン』を召喚！」

ポテトマン ATK900 ☆3

「ぼ……ポテトマン？」

「そうだ」

恵遊は指をパチンと鳴らした。

すると、ハングリーバーガーを作っているあのイカツイおっさんが出現。

ポテトマンの背後に忍び寄り、すごく大きな包丁で細め……いや、サイズの何か太いけどカット。

そして、それをフライヤーの中にどんどん放り込む。

揚がっている間に、おっさんはせつせと紙を組み立て始めた。

だが、うまくいかない。

仕方がないので恵遊が手伝った。

おっさんは揚げたポテトを火傷しながら紙に詰め込み。完成。

「というわけで、ポテトマン改め、フライドポテトマンだ」

「ふざけてるのかお前は！」

「別にふざけてはいない。マイナス方向に全力なだけだ」

観客からは『それを世間では『ふざけている』というのでは？』と言う雰囲気の流れだが、恵遊は気にしない。

「というわけで、ハングリーバーガーを攻撃表示に変更」

ハングリーバーガー DFE3850↓ATK3850

「さらに魔法カード『ユニオン・アタック』を発動！」

魔法カードの発動と共に、ハングリーバーガーと（フライド）ポテトマンが頷き合う（なお、顔はありません）。

「バトルだ！」

ハングリーバーガー ATK3850↓4750

「俺はハングリーバーガーと（フライド）ポテトマンで、邪神アバターを攻撃！『ハッピーセツト・コンビネーション』！」

言っているが、ただの突撃である。

とはいえ、守備力0の邪神アバターに対していえば、明らかにオーバーキルなほどボコボコにしているが。

ちなみに、もともとユニオン・アタックのデメリットでダメージはない。

「ば……バカな……こんな頭のおかしい攻撃で、僕の邪神アバターが……」

悲壮感が漂うのだが、観客は納得して、コンボを決めた恵遊は上機嫌である。

ハングリーバーガーと（フライド）ポテトマンは領き合い……お互いに手がないうことを思いだした。

ポテトマンには手足が存在するが、フライドポテトマンにはないのである。

「俺はこれでターンエンドだ」

ハングリーバーガー ATK4750↓3850

「僕のターン。ドロロー！くそ……かみ合わない……『禁忌の壺』を守備表示にしてターンエンドだ」

禁忌の壺 ATK2000↓DFE3000

「俺のターン。ドロロー！さっさと決めるぞ。『シールド・クラッシュ』で禁忌の壺を破壊し……」

禁忌の壺が砕け散った。

「というわけで、アンコール。メインディッシュ 決闘終了だ！ハングリーバーガーとフライドポテトマン

で、攻撃！『ハッピーセット・コンビネーション・パート2』！

とは言うが、ただの突撃である。

「う、うわあああああああ!!!」

辰巳 LP2500↓0

ライフを消し飛ばしていく。

観客は思った。

『ドンマイ』と。

「よし、俺の勝ちだ」

「ば、バカな。僕がこんな奴に……くそ、これで終わったと思うなよ！次は必ず勝つ！」

「ま、かかってきな……次があるうちにな」

最後に小さな声で言った言葉は、誰にも届いていなかった。

★

「恵遊君。あのコンボ、何？」

「ハッピーセット・コンビネーションのことか？」

「うん」

「だって、ハンバーガーと言えばフライドポテトだろ？」

「……納得しそうになっている私はおかしいのかな」

「凜子ちゃん。汚染が進んでるね」

とは言うものの、茜もあまり気にしていないのだった。
だって……恵遊なんだから。

第八話

ボーダーはデュエル専門学校だが、体育の授業は存在する。

デュエルは精神をいろいろな意味で使うのだが、体育の授業を意図的に設けているのだ。

ちなみに、いろいろな意味で派手に動くものが採用されている。

今日は、バスケだ。

「おい昇平！お前この試合引き分けにしようとか考えてんじやねえだろうな！」

試合中、恵遊が叫び声をあげる。

チームメイトの昇平はニヤツと笑った。

「あ、やっぱりわかるか？」

「お前デュエルだけじゃなくてスポーツでも同点にしたがるのか！」

「あたりまえだゾ」

「当たり前なのかよ！おい銀二、ぬかせるか temeエー！」

ドリブルをしているエネミーチームである銀二の前に立つ。

お互いに汗をかいているが、体格的にはほぼ互角だ。

「フン！デュエルでは負けたが、スポーツでは負けんぞ！」

「正直、体のリミッターがないお前をスポーツで相手にしたくないんだけどなあ……」

銀二は何かと全力で動くのだ。

小学校の時のクラスメイトの変人三人（恵遊、銀二、真司）の中で、恵遊はハンバーガーコンプレックス、真司はロリータコンプレックスだが、銀二は特にそういったものはない。

ただ、全力で動くのだ。しかも全くそういう部分を気にしない。

罨があろうと罨ごと踏み抜いていくタイプだ。たぶん早死にする。

「フン。抜く必要はない。ここから入れればいいのだ！」

銀二は若干距離をとると、そのままシュートフォームに入る。

「な……おりゃー！」

シュートしたボールをジャンプして叩き落とす。

「なにっ!？」

落ちたボールを取って、そのままゴールまで行くと、ダンクを叩き込んだ。

この瞬間、みんな思った。

『お前って身長百八十未満だよな』
と。

バネがありすぎである。

まあ当然だ。デュエリストなのだから。

「ツシヤアアアアアア！」

ちなみに、試合そのものは引き分けだった。

昇平が何かと手玉に取ってきたのである。

策士なのはいいが……面倒だこの男。

★

放課後。

「……何してんだ？凜子」

恵遊は愕然とした。

今日は放課後になると特別なバーガーが売られるということで、真っ先に向かったのだ。

そして、戻ってきたら……。

「見てのとおり、恵遊君の体操服のにおいを嗅いでいるんだよ！」

そう、凜子は恵遊の汗のにおいがしみ込んだ体操服のにおいをかいでいた。

しかも、体操服を入れていたエナメルバッグから取り出すのではなく、自分の顔をエナメルバッグの中につっ込んで、ある意味、密閉空間でダイレクトに嗅いでいるのだ。

信じられない。

ちなみに、頭をバッグの中突っ込んでいるからだろう。すごく声がくぐもつてい
る。

「……」

恵遊が絶句していると、凜子は顔を出した。

そして、いう。

「恵遊君！この体操服ちょうだい！新しいの買ってあげるから！」

「嫌です」

即答である。

当然だ。

というか、その、なんていうんだろう。恵遊の名前を連呼するわけでもなければ、恵遊にいきなり抱き着いてくるわけではないのだが、何かと面倒な方向性を持つヤンデレである。

いや、ヤンデレというより……いろんな意味で既成事実を作ろうと奮闘している感じか。

「どうして!?!新しいの買ってあげるんだし、恵遊君にとってマイナスなことはないはずだよ！」

「どうしてもです」

そうとしか言いようがない。

いったい何に使う気だ。

「なら……デュエルで決めよう！私が勝てば体操服をもらって、交際しよう！恵遊君が勝ったら、私は恵遊君の彼女になってあげるよ！」

「……」

恵遊は言葉を失った。

そのとき、教室のドアが開いた。

「おい、聖野。何をしている」

「うげっ。赤座先生！」

入ってきたのは生徒指導の赤座先生だ。

「なんで生徒指導室に放り込まれれば気が済むんだ？」

「先生に勝てば問題ないからです！」

「よし、よく言った。問題児肅正用の『積み込みディスク』をもってこよう」

そんなデュエルディスクがあるのか！

「な……ずるいですよ！そんなワンキルしますっていうかのような……」

「ワンキルではない。『初手エクゾ』でスタートキルだ」

教育現場というのは非情である。

「鬼！悪魔！邪神！」

「なんとでもいえ」

「独身！童貞！チキン野郎！」

「私は妻子持ちだ！」

教室の空気が変な感じになった。

先生、子供いたんだ。

まあ、デュエルは強いらしいし、ボーダーの教師試験は門が狭い。

若い時代でも給料はそこそこ多いと聞く。

有望株といえは有望株である。

冗談に付き合ってくれるし、基本まじめな先生だ。

大学時代くらいに彼女ができていそうな人である。

「むうう……今日のところはあきらめるよ！」

「……はあ、なんでこんなバカばかりこの学校に来たんだろうな……」

「先生大変ですね」

「バカの一人にお前も含まれているんだがな」

「え、俺も？」

何かしたっけ？

聞こうと思ったが、赤座先生は溜息を吐きながら戻って行った。

「アハハ……そう言えば、恵遊君はエキセントリック・テンスに自分から挑んだりしないの？」

茜が聞いてきた。

「俺から？」

「うん。一応非公式に分類されてるけど、既に二人のエキセントリック・テンスを倒してる。もう学校内でもかなりの実力者とされてるよ。雑誌にもものってるし」

「雑誌って何だ？」

「新聞部が逐次出してるものだよ。部長が輪転機持つてるからそう言うのが強いんだ」

「いや、それは異常じゃね？輪転機って、新聞社とかが持つてるようなものじゃなかったか？」

「この学校すごいな。」

「で、その雑記に書かれてたんだよね。もうすでに、神代美咲よりも強いんじゃないかって。どうなの？」

「……どうだろうな。負けたことはないけど、長いことデュエルしてないからなあ」

とはいっても、デュエルするようなことにはならないと思うがな。

「まあ、俺の方から挑むことはないよ。興味ないし」
「だよね」

茜は頷いた。

そう、興味がないのだ。

……買収は簡単だが。

「青芝恵遊はいるか？」

その時、誰かが教室に入って来た。

ムキムキのスキンヘッドだった。

え、誰？というか、その筋肉は何処で使うの？

いろいろ思うことはあったが、その前に茜が反応した。

「西条剛毅……エキセントリック・テンスの一人よ」

「さいですか」

剛毅はこちらに気が付いたようで、歩いてきた。

近くまで来るとすごく大きく感じる。

「青芝恵遊だな。私と一戦、デュエルをしてほしい」

そう言うと同時に、剛毅はハンバーガーが大量に入った袋を恵遊に差し出す。

恵遊はそれを笑顔で受け取る。

「いいだろう」

(（でしようね）)

もう、周りもなんとなく分かっていた。

そんな雰囲気だった。

とはいえ、デュエリストに言葉は不要。

恵遊にハンバーガーを渡せばデュエルしてくれるのだから、タイムパフォーマンスがこれほどいいやつはいない。

★

エキセントリック・テンスはデュエルコートが常備されているが、西条剛毅というデュエリストを慕うものが多いので、言ってしまうえば『剛毅グループ』でデュエルコートを使っているような雰囲気だ。

まあそれはそれとして、いろいろ考えるものも多いようだ。

『お、今度は西条剛毅本人が出てきたのか』

『側近二人が出てきたのってちよつと前だろ。もう本人が出て来るなんて……』

『それにしても、青芝恵遊のエキセントリック・テンスとのデュエル回数がすごいな。これで四回目……』

『昇平を除いてあとは勝ってるもんな』

『まあ仕方ねえだろ。昇平はやろうと思えば先攻引き分けなんだからな。使用カード二枚で……』

『話を戻そう。西条剛毅とのデュエルか。どうなると思う？』

『分かん。ただ、渡してるハンバーガーはどれも学校の外でしか買えないうえに、値段が高いものを選んでるらしい。惠遊のそこそこの本気が見られると思うぞ』

いろいろ言っているが、大体正しい。

「さて、それでは始めようか」

「ああ。良いハンバーガーだったからな。まあ、そこそこ本気でやってやるよ」

「今までは本気ではなかったのか？」

「真面目ではあるぞ。ハンバーガーもらってるしな。ただまあ、頭の中のエンジン的な意味ではそうでもないって言うだけの話だ」

「ならば、本気を出さざるを得なくしてやろう」

お互いのカードを五枚引いた。

「デュエル！」

惠遊 LP 4000

剛毅 LP 4000

デュエルディスクが決めた先攻は惠遊。

「お、珍しいな。それなら俺は『切り込み隊長』を召喚して、『カードガンナー』を特殊召喚だ」

切り込み隊長 ATK1200 ☆3

カードガンナー ATK 400 ☆3

フィールドに並ぶ隊長と潤滑油。

切り込み隊長。最近出はデッキでは見なくなつたが、戦士族デッキならよく引つ張つてきてくれたり（増援）、ボロボロになりながら帰ってきてくれたり（戦士の生還）する働きものであり、近年では、ゴブリンたちの中でも彼の真似をする（ゴブリン切り込み部隊）など、モンスターたちの間でもかなり有名なモンスターと言えるだろう。

惠遊のデッキでは……カードガンナーを特殊召喚するか、墓地にいた方がいいが手札に来てしまったモンスターを壁として出す感じだろうか。

「カードガンナーの効果で、デッキから三枚を墓地に送つて攻撃力をアップさせる」

カードガンナー ATK400↓1900

カードを三枚装填しはじめるカードガンナー。

とはいえ、彼がリロードしてもそれを発射する機会は少ない。

そもそも今は先攻である。

「そして、レベル3の切り込み隊長とカードガンナーでオーバーレイ。『彼岸の旅人』ダ

ンテ』をエクシーズ召喚！」

彼岸の旅人 ダンテ DFE2500

★3

現れる潤滑油その……何番だろう。

とりあえず潤滑油だ。

ちなみに、精霊カードであるカードガンナーを素材にしているので、墓地肥しとしてかなり優秀です。

「ダンテの効果発動。エクシーズ素材を取り除いて、デッキからカードを三枚墓地に送り、攻撃力をアップさせる」

先攻では攻撃力アップは、攻撃力を参照する効果を使わない限りあまり意味はないのだが、単純に考えてレベル3が多い恵遊のデッキでは、ダンテのこの効果は活躍できるだろう。

「俺はこれでターンエンドだ」

あまりカードを伏せることが無い恵遊。

剛毅は頷く。

「うむ。私のターンだ。ドロロー」

剛毅は冷静にカードを引く。

「私は『トレード・イン』で、『銀河眼の光子竜』を捨てて二枚ドロロー。手札から『銀河

眼の雲箆』を召喚、そしてリリース。墓地から『銀河眼の光子竜』を特殊召喚する！」

銀河眼の光子竜 ATK3000 ☆8

「な……【ギヤラクシー】だど!？」

「私は『銀河遠征』を使って『銀河騎士』を特殊召喚し、レベル8の光子竜と銀河騎士でオーバーレイ。『No. 62 銀河眼の光子竜皇』をエクシース召喚！」

No. 62 銀河眼の光子竜皇 ATK4000 ★8

「プライム・フォトンだと……」

「バトルだ。光子竜皇でダントテを攻撃！」

「墓地から『ネクロ・ガードナー』を除外する！」

光波竜のプレスに包まれるネクロ・ガードナー。

まあ、大体こうなると剛毅も思っていた。

「カードを二枚セット、ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロロー！」

さて、どうするかな。

それはそれなりに考えられている布陣だ。

何より、普段の恵遊のハンバーガーの射程距離、3850よりも高いというのが重要とも言える。

ていうか、プライム・フォトンはまだ上がる。

「ダンテを攻撃表示に変更して、効果を使う。デッキトップ三枚を墓地に送って攻撃力を上げる」

彼岸の旅人 ダンテ DFE2500↓ATK1000↓2500

『アームズ・ホール』で、デッキトップを墓地に送って『最強の盾』を手札に」

「ほう……」

「手札から『儀式の下準備』を発動。デッキから『ハンバーガーのレシピ』と『ハングリーバーガー』を手札に加える」

さて、やりますか。

『ハンバーガーのレシピ』を使って、墓地のプレサイダー、ディザース、クリボールを除外、『ハングリーバーガー』を儀式召喚！」

ハングリーバーガー ATK2000 ☆6

そして降臨するバーガー。

「だが、どうする？ダンテが存在することで、合計のランクは11だ。光子竜皇の攻撃力は、6200まで上がるぞ？」

『最強の盾』をダンテに装備させて、『ユニオン・アタック』を発動。攻撃力をダンテに集約させる」

彼岸の旅人 ダンテ ATK2500↓5000↓7000

「な……………何!？」

まあ、実際問題、ダンテと『最強の盾』は相性がいい。

自身の効果で攻撃力を2500まで上げられるうえに、最強の盾があれば攻撃力を5000まで上げられるのだ。

しかも、攻撃後に守備表示になつてくれるし、そうなれば参照する攻撃力が変わつて、その守備力が3500となる。

あと……………これは観客側の意見だが、ハングリーバーガーに添えられているより、ダンテが構えている方が様になる。

ただ、これをする若干ハングリーバーガーが不機嫌になる。

今も、『あつーそれ俺の!』と言いたそうに怒りマークを発現中だ。

ダンテは『何時も使っているんだからいいじゃないか……………』と言いたそうな顔である。
「……………いいのか?何やら怒っているようだぞ」

「まあ今はいいのさ。バトル!ダンテでプライム・フォトンを攻撃!」

効果を使つても意味はない。

ので、攻撃力的にはダンテの方だけでも勝っているのだが、ユニオン・アタックの演出と言うことで、ハングリーバーガーは円盤肉を飛ばした。

ダンテが盾を構えると、盾の中央部分にエネルギーが集中して、ビームが発射される。本当にこれどういう構造なのだろう。

とはいえ、プライム・フォトンが破壊されたことは事実。

「ダンテは守備表示になる。それにより、参照される数値も変更される。カードを一枚セツトしてターンエンドだ」

彼岸の旅人　ダンテ　ATK7000↓DFE2500↓3500

「む……こんな簡単に突破されるとはな。私のターン。ドロー！『リビングデッドの呼び声』『復活の福音』を使い、『銀河騎士』『銀河眼の光子竜』を特殊召喚し、二体でオーバレイ。『神竜騎士フェルグラント』をエクシーズ召喚！」

神竜騎士フェルグラント　ATK2800　★8

「お次はフェルグラントか……」

恵遊のような『装備カードで低い攻撃力を強化して殴る』デッキには刺さるカードだ。もちろん、自分のカードを守ることもできる。

攻撃力も悪くない。ランク8では安定したモンスターだ。

手札が多少事故ついても、このモンスターを出せるのならある程度耐えられる状況はそれなりに……多いのか？まあ多いだろう。多分。

「バトルだ！フェルグラントで、ハングリーバーガーを攻撃！」

「何かを焦ったか？墓地から『タスケルトン』を除外して、攻撃を無効にする」

「無駄だ。フェルグランツの効果を使い、攻撃を無効にする効果は受けなくする」
タスケルトンが出て来るが、スルーしてこっちに向かってくる。

「なら、それにチェーンして、『移り気な仕立屋』を発動。ダンテに装備されている最強の盾を、ハングリーバーガーに装備させる」

それを聞いたハングリーバーガーは、『ヘイツ！パス！』と言いたそうな雰囲気です。ダンテを見る。

ダンテは最強の盾をハングリーバーガーの方に投げると、ハングリーバーガーはうまく受け止める。

そして、自分に刺さっている旗を飛ばして、フェルグランツを倒した。
盾は使わないようである。

ハングリーバーガー ATK20000↓3850

剛毅 LP40000↓2950

「む……むう。私はこれでも堅実な方だと言われるのだが、どうも調子が出ないな……」
「テンポもルートもいろいろ異なるからな。プレサイダーを素材にしたハングリーバーガーの効果で一枚ドロウ」

剛毅は頬を動かす。

もともと、プレサイダーを素材にした時点で、相手モンスターを戦闘で破壊する気満々だったのだ。

それを察知すればよかつたと思っっているのだろう。

まあ、色々遅いけどな。

「私はリビングゲッドの呼び声をコストに、『マジック・プランター』を発動。カードを二枚ドロロー。『銀河零式』を使って、『銀河眼の光子竜皇』を復活させる」

銀河眼の光子竜皇 ATK4000 ★8

また出てきたか。

素材が無いのでパワーアップはしないが、それでも面倒な攻撃力である。

「さらに、光子竜皇でオーバレイ。『ギヤラクシーアイズ FA・フォトン・ドラゴン』をエクシーズ召喚だ」

ギヤラクシーアイズ FA・フォトン・ドラゴン ATK4000 ★8

「効果発動。ハングリーバーガーを破壊する」

「墓地の『スキル・プリズナー』を除外しようか」

通らない。

と言うより、墓地肥し効果を通しすぎたのだ。

「ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロー」

とはいえ、攻撃力4000のモンスターを何度も戦闘で処理するのがしんどいのは変わらない。

墓地発動のカードが多いし、そういったカードはあまり相手フィールドのモンスターをフィールドから放すものが少ないのだ。

とはいえ……。

「俺は『RUM―レイド・フォース』を発動。ダンテを『RR―ライズ・ファルコン』にリンクアップだ」

RR―ライズ・ファルコン ATK100 ★4

「ライズ・ファルコンだと……」

どうしても突破できない時はこうするのだ。

リンク3のダンテを無理なく投入できるので、こういったカードも入れている。

大体は『シャツフル・リボン』でデッキに戻すのだがな……。

「ライズ・ファルコンの効果発動。エクシーズ素材を使って、フォトン・ドラゴンの攻撃力を加える」

RR―ライズ・ファルコン ATK100↓4100

「バトル！ライズ・ファルコンで、フォトン・ドラゴンを攻撃！」

ライズ・ファルコンがぶち抜いた。

「『復活の福音』を除外して、破壊を無効にする」

剛毅 LP2950↓2850

そう言えば使っていたな。

「メインフェイズ2。カードを一枚セットしてターンエンドだ」

「私のターン。ドロロー！」

「ライズ・ファルコンをリリースして『ゴッドバードアタック』を発動！対象はフォトン・

ドラゴンとセットカードだ」

「む……」

だが、まだ焦ってはいない。

「私は二枚目の『銀河零式』を使い、墓地の光子竜皇を特殊召喚する」

銀河眼の光子竜皇 ATK4000 ★8

また来るのか！

なんていうか……光子竜皇が過労死気味になるデッキってすごい。

「そして、光子竜皇でオーバーレイ。『No.95 ギャラクシーアイズ・ダークマター・

ドラゴン』をエクシーズ召喚だ」

No.95 ギャラクシーアイズ・ダークマター・ドラゴン ATK4000 ★9

「効果発動。私はデツキから『伝説の白石』『エクリプス・ワイバーン』『銀河眼の光子竜』を墓地に送る」

「俺は『ユーフォロイド』『真紅眼の黒竜』『E・HERO ネオス』を除外する」

恵遊が除外したそのラインナップに、客席にいる生徒たちがこけそうになった。

内容としては『え、ネオス!?!』と言った感じだが、ちよつと後に、『ああ、ネオス・ナイトか』と分かってしまったのだが、もうそこまで行くと、彼らも彼ら、と言いたくなるような雰囲気である。

「『伝説の白石』の効果で『青眼の白龍』を手札に、『エクリプス・ワイバーン』の効果で『限界竜シユヴァアルツシルト』を除外する」

カードを整えていく剛毅。

若干疲れているような感じだ。

「そして、『おろかな埋葬』で『カーボネドン』を墓地に落として除外、『ギヤラクシーサーペント』を特殊召喚し『戦線復活の代償』を発動。ギヤラクシーサーペントをコストに、『ギヤラクシーアイズ F A・フォトン・ドラゴン』を墓地から特殊召喚」

ギヤラクシーアイズ F A・フォトン・ドラゴン ATK4000 ★8

「そして、フォトン・ドラゴンは、装備魔法をエクシーズ素材にできる。そして、効果を、ハングリーバーガーを破壊する！」

消し飛ぶハングリーバーガー。

「バトルだ。ダークマター・ドラゴンでダイレクトアタック！」

「『超電磁ターゲット』で無効にする」

ターゲットの効果で止まってしまった。

「ぐ……私はターンエンドだ」

「俺のターン。ドロロー！」

ドロローしたカードを見る。

ふむ、お前か。

「俺は『竜の鏡』を発動。墓地の『虹彩の魔術師』と『ハングリーバーガー』を除外、『ブレイブアイズ・ペンデュラム・ドラゴン』を融合召喚！」

ブレイブアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK3000 ☆8

「な……ブレイブアイズだど!?!」

「効果に寄り、攻撃力を0にする」

ブレイブアイズの背中からハングリーバーガーがひよこつと出てきて、肉とトマトを飛ばして二体のドラゴンの攻撃力を0にした。

（（お前かよー））

生徒達の心は一つになった。

No. 95 ギャラクシーアイズ・ダークマター・ドラゴン ATK4000↓0

ギャラクシーアイズ FA・フォトン・ドラゴン ATK4000↓0

メインディッシュ

「さあ、決闘終了だ！ブレイブアイズ・ペンデュラム・ドラゴンで、ダークマター・ドラゴンを攻撃！」

ブレイブアイズのエネルギーを受けたハングリバーガーのキャベツは、ダークマターをぶち抜いた（どうやって?）。

剛毅 LP2850↓0

このデュエルを見て、皆は思った。

（こいつを相手に攻撃力で勝負するのは止めた方がいいな。と）

★

疲れたような表情をした剛毅が帰った後、茜と凜子が来た。

「恵遊君って、ブレイブアイズを入れてるんだ」

「まあな。戦士族との融合だから、こういった召喚もできるし」

多分、ブレイブアイズをデザインした人達は、そんな使われ方をするのは想定外だったと思うが……。

とはいえ、青芝恵遊はそういう男なのだ。

周りがあきらめるしかないことと言うものも、あるにはある。

少なくとも、デュエルが終わると同時にハンバーガーを食い始めるようなバカに、何を言えばいいと言うのだろうか。

不思議なものである。まる

第九話

「なあ、銀二」

「なんだ？ 恵遊」

「何で俺達ってゼルダやってんの？」

「協力プレイがやりたくなつたからだ。デュエルより疲れないからな」

「お前が疲れのことを考えるのか？」

「ひどい言い分だな……」

エキセントリック・テンスとしての部屋ではない学生寮の部屋。

銀二の部屋の中にはゲームが多数ある。

そのほとんどがゼルダである。

「飽きた」

「俺も飽きた」

ゲームは時間が過ぎるのは早い、ある一点を超えると飽きるものだ。

「真司は普段来ないからな。誘えるのはお前だけだ。恵遊」

「悲しいことを言うやつだな」

「買収が簡単だからな」

「自覚している」

しているのか。と銀二は少し心配になった。

「あ、ハンバーガーがなくなった。それじゃあまた明日」

「……ハンバーガーがないとお前は活動できないのか？」

「たまに本当にそうなんじゃないかって思うことがある」

手遅れである。

★

休日の過ごし方と言うのはいろいろあると思うが、恵遊の場合はいつもと変わらな
い。

単純にハンバーガーを買いに行くだけだ。

「新商品が出ていたな。ラッキーだ」

ほくほく顔でハンバーガー店から出て来る恵遊。

その手には大量のハンバーガーが入った袋がある。

周りからいたい視線が向けられるが、それは仕方のないことだ。

近くのフードコートに入って、テーブルにハンバーガーを大量においた。

近くで大型のディスプレイがニュースを流している。

『綴統一つづりとういち。ついにプロリーグランキング1000に到達！』

綴統一、と言う名前が脳を貫通して、思わずむせそうになった。

「どうしたんだ？人の名前を聞いただけでいきなりむせやがって」

声をかけられたので振り向くと、先ほどニュースに乗っていた張本人、綴統一がカツ丼が乗っているトレイをもって立っていた。

黄緑色のラインが入った短い黒髪。

獯猛な印象を隠そうともしないイケメンである。

恵遊と身長は変わらないだろうが、それでも、やたら風格があった。

「統一。久しぶりだな」

「おう、久しぶりだな。お互いに相変わらず見たいだぜ」

そう言つてにやりと笑う統一。

「で、合席いいか？」

「ダメって言つて座らなかつたことないだろ」

「その通りだな」

クツクツクと笑いながら座る統一。

そして、カツ丼を食べ始める。

思いだしたように話し始めた。

「ボーダーでのデュエルは聞いてるぜ。銀二と真司は既に倒して、エキセントリック・テンスも倒したみたいじゃねえか」

「情報が早いな」

「はやいんじゃないよ。お前が自分の評価に興味がないだけだ」

カツをバグツと食べて、もしやもしや言わせながら統一は頬張る。

「そう言えば、プロになったんだったか」

「ああ。アマチュアから入って、そこから勝ち上がってきた」

食べ終わった統一はゲフツとげっぷして、箸を置いた。

「このあたりにあるデュエルスクールは二つ。境界と国外脱出だ。均衡していたみたい

だが、神代美咲が入ってきたときから、ややボーダーに傾いてきてるみたいだな」

デュエルスクールは二つある。

ただ、もともと、どちらが実力主義なシステムなのかと言われると、それはエクソダスの方だ。

名家や名門など、色々存在するのだが、それらはボーダーの方が多いし、エクソダスにはほとんどいない。

「ま、そればかりは俺にもね……で、プロの世界はどうだ？」

「張り合いのないやつが多いぜ。過酷さを知らない新米のほうが挑んでくる奴が多いく

らいだ」

「……そうなのか？」

統一は頷く。

「ランキング上位に入って得られる特権って言うのはすさまじいもんだが、その時点で多くの奴が気が付くんだ。俺たちは、『与えられるために勝ちとっているんだ』ってことに」

世の中にある様々な権利と言うのは与えられるものだ。

物を買うには金が必要だが、その金だって、自分の欲望に打ち勝つことで勝ちとったものである。

料理を作ることも、服を作ることも、家を建てることもできず、デュエルしかできない者は、実力だけで勝ちとる必要がある。

「その時間が長いと、多くの者がその椅子にすがろうとする。わざわざ裏に金を流して、マッチングを操作するやつまでいる始末。おかげで、アマチュアからプロになるまでかなり長い時間がかかったぜ」

「そういうものか？」

とはいえ、小学校卒業とともにプロの世界に入ったのだ。

小学校上がりのガキに負けたとは言いたくないだろう。

「誰にでもスランプつてもんがある。情熱には休憩がいるからな。だが、見てる側はやってる側のことなんて気にしないからな」

デュエルする側がいつでも妥協する必要がある。

そうでなければ、認めてくれない。認められない。

そういう現実があるのだ。

「最近本気でデュエル出来てねえんだよな。不完全燃焼つて言えばわかるか？」

「まあ何となく」

「そう言えば……」

「今は休憩時間なのか？」

「そんなところだ。三十分くらいしたらマネージャーが来るだろうぜ」

「そうか。」

「で、惠遊。一回デュエルやろうぜ」

「本気で？」

「勿論だ。お前だって、そんな本気出してねえだろ」

「全力が出せないだけだ。エンジンのな問題で」

「同じだろ」

統一はカツ丼が入っていたトレイをもって、返却口に出してきた。

「一回だ。ま、近くに広場があるし、そこでデュエルやろうぜ」

「プロなのがいいのか？」

「推奨されないだけだ。世論なんぞ知ったことか」

そう言うのと歩き始める。

「……変わらないな」

ハンバーガーを片付けると、惠遊も後を追った。

近くの広場には誰もいなかった。

まあ、いたとしても、統一は普段から険悪な雰囲気を持っているので逃げるかもしれないが。

「さあ、はじめようぜ」

「ああ」

お互いにカードを五枚引いた。

「デュエル！」

惠遊 LP4000

統一 LP4000

★

「銀一！」

「ん？どうしたんだ真司。ゼルダをやりに来たのか？」

「違う。ネットを見る。惠遊と統一のデュエルがライブ映像で流れている」

「……統一が？」

プロになったはずの同級生を思いだして、銀二もデュエルディスクの映像機能を付ける。

「ふむ、確かにやっているな」

「統一の顔がイライラしているところを見ると、ストレスがたまっているみたいだが……」

「……プロの世界で何かあったのか？」

「わからないが……今はデュエルを見よう」

「うむ」

★

実際のところ、この映像はプライバシーブレイカーが扱っているサイトに上げられていたものだ。

プライバシーブレイカーを良く知っているデュエルスクールの生徒は、その多くが確認している。

「美咲様」

「今はデュエルを見ましよう」

神代美咲と鹿島朱里も、気になっていた。

鹿島朱里は、プロの世界でランキング100に達する綴統一の実力を見ようとして。

神代美咲は、自分を叩きつぶし、神代家すら否定したことがある。彼の強さを測ろうとして。

★

「先攻は俺だな」

恵遊は自分のターンランプが光っているのを見て、そうつぶやいた。

(デツキが変わっていないとするなら……)

そんな思考が流れた後、恵遊は自分の手札を見て、そして並べていく。

「俺は『おろかな埋葬』で『カードガンナー』を落として、『クレインクレイン』で釣り上げる。カードガンナーの効果を使用して、三枚を墓地へ。二体でダンテをエクシーズ召喚して、また三枚を墓地に。これでターンエンドだ」

彼岸の旅人 ダンテ DFE2500 ★3

「ダンテか……俺のターン。ドロロー！」

統一はドロローしたカードを見て、そして微笑む。

「いいねえ。良い感じにエンジンがかかっている。俺は『霸王眷竜ダークヴルム』をセッ

テイニングして、ペンデュラム効果で『霸王門零』をセッティングだ」
ドラゴンと門が出現。

「ペンデュラム召喚。『ジャンク・シンクロン』『シンクロ・フュージョニスト』『ゾンビ・キャリア』」

ジャンク・シンクロン ATK1300 ☆3

シンクロ・フュージョニスト ATK 800 ☆2

ゾンビキャリア ATK 400 ☆2

「ジャンク・シンクロンとゾンビキャリアで、『水晶機巧―ハリファイバー』をリンク召喚。効果で『ジャンク・シンクロン』を特殊召喚だ」

水晶機巧―ハリファイバー ATK1500 LINK2

ジャンク・シンクロン DFE 500 ☆3

「そして、レベル2のシンクロ・フュージョニストにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング。『転生竜サンサーラ』をシンクロ召喚」

転生竜サンサーラ DFE2600 ☆5

「シンクロ・フュージョニストの効果で『簡易融合』をサーチして発動。『ドラゴンに乗るワイバーン』を融合召喚扱いで特殊召喚」

統一 LP4000↓3000

ドラゴンに乗るワイバーン ATK1700 ☆5

「レベル5のサンサーラとワイバーンでオーバーレイ。『No. 5 亡隴竜 デス・キマイラ・ドラゴン』をエクシーズ召喚」

No. 5 亡隴竜 デス・キマイラ・ドラゴン ATK0↓2000 ★5

「そして、『モンスターゲート』を使って、デス・キマイラをリリース」

『オッドアイズ・グラビティ・ドラゴン』『カゲトカゲ』

そして見えたのは、『オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン』だった。

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK2500 ☆7

「……そろったか？」

「だな。『強欲で貪欲な壺』を使い、十枚除外して二枚ドロ。俺は『ミラクルシンクロフュージョン』を発動。オッドアイズ、サンサーラ、デス・キマイラ、ワイバーンを除外して融合」

四体の竜が混じりあう。

「融合……いや、統合召喚！『霸王龍ズアーク』！」

霸王龍ズアーク ATK4000 ☆12

現れる巨大なドラゴン。

綴統一が絶対的に信頼するエースモンスターだ。

そして、このドラゴンの登場で、周りも騒ぎ出す。

これほどのモンスターをワンターンで出せるものは、手札の関係上、そうそういないからだ。

「チツ……昔から変わらないか」

「当然だ。霸王龍ズアークの効果。相手フィールドのカードを全て破壊する！」

ダンテが消し飛んだ。

「チツ……」

「バトル。霸王龍ズアークでダイレクトアタック。『アークファイブ・ストリーム』！」

ズアークが口の中にエネルギーをため込んで行く。

（ズアークの耐性は、相手の効果の対象にならず、相手の効果では破壊されない。だったか）

恵遊は墓地のカードを一枚除外した。

「俺は墓地の『ネクロ・ガードナー』を除外、攻撃を無効にする！」

「だろうと思ったぜ」

ズアークのブレスを、ネクロ・ガードナーが受け止めた。

守備力にしたって1300しかないモンスターであることを考えると、よくかんばるカードである。

「俺はカードを一枚セットしてターンエンドだ」

統一の手札がなくなった。

とはいえ、あそこまで展開するのだ。手札消費は多くて当然である。

「俺のターン。ドロー！」

カードを引いた惠遊。

なんだかんだけ言つて、面倒だと思つていた。

普段の統一ならば、数ターンを経由させることで、魔術師を集めたり、エクストラデッキのモンスターをためることが多い。

ドローした時の言葉から察するに、今日に関しては統一としてもいい手札だったのでろう。

だからといって霸王龍ズアークまで行くかどうかとなると話は別だが。

あと、カードガンナーが墓地肥しの潤滑油だとか言っている惠遊がいうのもなんだが、モンスターゲートと言う不確定要素に頼ったコンボをよく実行したものである。

「俺は手札から、『儀式の下準備』を発動。デッキから『ハンバーガーのレシピ』と『ハングリーバーガー』を手札に加える」

「揃えてきたか」

「そして、ハンバーガーのレシピを発動。手札のサクリボーと、墓地のデイズ、プレ

サイダーを除外、『ハングリーバーガー』を儀式召喚！

ハングリーバーガー ATK2000 ☆6

惠遊のフィールドにも出現するエースモンスター。

小学校卒業までで何回もデュエルしたが、その頃は何度もお互いに破壊し、破壊されていたものである。

それを思いだしたのだろうか。

ハングリーバーガーは機嫌がよくなり、ズアークも雰囲気が変わった。

「サクリボーの効果で一枚ドロ。さて、今度はどっちが勝つかな？」

「お互いに自分だと思っているのは確かだな」

「違うない」

惠遊はにやりと笑った。

そこまでは良かったのだが……。

惠遊を知らないデュエリストも、外野の中にはたくさんいる。

そんなデュエリストの中には、あの綴統一と戦っているデュエリストが『ハングリーバーガー』などというふざけたモンスターを出していると、陰口を叩いているものも多い。

とはいえ、そんな空気はすでになれているので、惠遊たちは気にしないし、統一とし

でも恵遊が使うハングリーバーガーは警戒すべきモンスターなのだが。気が散って仕方がない。

「デットキトップを一枚墓地に送ることで、『アームズ・ホール』を使う。『最強の盾』をサーチして装備、さらに、墓地から『スキル・サクセサー』を除外して効果発動！」

ハングリーバーガー ATK2000↓3850↓4650

ほとんどのモンスターなら真正面からぶつ叩ける化け物になった。

先ほどまで陰口を叩いていたもの達が青ざめる。

さすがに、攻撃力4650になるというのにバカにしていたのはヤバいと思ったようだ。

「一ターンで超えてきたか」

「そういうことだ。バトル！ハングリーバーガーで、霸王龍ズアークを攻撃！」

「甘いぜ。『虚栄巨影』を発動して、攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

霸王龍ズアーク ATK4000↓5000

「やべ……」

「反撃しろ。霸王龍ズアーク！」

ハングリーバーガーがプレスに包まれる……が。

「クリクリ〜」

「……サクリボーか」

「その通りだ。除外して戦闘破壊を無効にする」

恵遊 LP4000↓3650

しかし、少々面倒なことになった。

「バトルフェイズが終了するのならズアークの攻撃力はもとに戻るぜ」

「ああ。そうだな」

霸王龍ズアーク ATK5000↓4000

「俺はカードを一枚セットして、ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロロー！」

統一はドロローしたカードを見て、『ヒユウ』っと口笛を吹いた。

「俺は手札から『貪欲な壺』を発動。ジャンク・シンクロン、シンクロ・フュージョニス
ト、ゾンビキャリア、グラビティ・ドラゴン、カゲトカゲをデッキに戻して二枚ドロロー。
そして、スケール0と5でペンデュラム召喚！」

霸王眷竜ダークヴルム ATK1800 ☆4

紫毒の魔術師 ATK1200 ☆4

「今のドロローで引いたのか……」

「だな。俺はこの二体でオーバレイ。『霸王眷竜ダーク・リベリオン！』」

霸王眷竜ダーク・リベリオン ATK2500 ★4

「そして、バトルだ。霸王龍ズアークでハングリバーガーを攻撃！」

「墓地の『超電磁タートル』を除外する！」

「ほう、いつもより使うのが早いな」

うるさいな。ダーク・リベリオンにだって攻撃されたくないんだよこっちは。

「俺はターンエンドだ」

「俺のターン。ドロー！」

さーて困ってきたな。

「俺は『リビングゲデッドの呼び声』を使って『カードガンナー』を特殊召喚。効果を使っ

て三枚を墓地に送る」

カードガンナー ATK400↓1900 ☆3

「そして、墓地の『カーボネドン』を除外して、デッキから『ガード・オブ・フレムベル』を特殊召喚だ」

ガード・オブ・フレムベル DFE2000 ☆1

「二体でシンクロ召喚。『アームズ・エイド』！ハングリバーガーに装備させる」

久しぶりのパントマイムである。

ハングリバーガーの方が下手くそなのだが。

「……なんだそれは」

「……さあな」

とはいえ、である。

ハングリーバーガー ATK3850↓4850

ちよつと油断できない攻撃力になってきたのは間違いない。

「攻撃力、4850だと……」

4000くらいまでならまだ見たことはある。

ぶつちやけ、『巨大化』一枚で達成できる数値だ。

だが、ここまでの数値はあまり見ないのである。

「バトル！ハングリーバーガーで、霸王龍ズアークを攻撃！」

パントマイムナックル！

……とでもいうかのような勢いで、ハングリーバーガーとアームズ・エイドは動く。

そしてアームズ・エイドは、ズアークを倒した。

実際問題、効果の対象にならず、効果で破壊されない攻撃力4000など、普通はいろいろと無理があるだろう。

対象を取らない除去としても、破壊を選ぶデュエリストは多いのだ。

リリースとかもあるのだが、それはおいておこう。

「アームズ・エイドは本来、破壊して墓地に送ったモンスターの攻撃力分のダメージを与えるんだが……」

「霸王龍ズアークはペンデュラムモンスターだからな。あと、ダメージ計算をした後二モンスターが破壊されるから、零の効果でダメージはなしだ」

墓地ではなくエクストラデッキに行く。

アームズ・エイドの効果の都合上、ここまで攻撃力が上がっていると一撃必殺なのが、一部のモンスターは破壊しても意味が無い。

とはいえ、この攻撃力そのものに意味が無いわけではないが。

「まあいいか。一枚ドロローして、『マジック・プランター』で『リビングデッドの呼び声』をコストにして二枚ドロロー。ターンエー——」

「ハリファイバーの効果で、『波動竜フォノン・ドラゴン』をシンクロ召喚だ」

波動竜フォノン・ドラゴン ATK1900 ☆4

「……ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロロー！ 三体目の『霸王眷竜ダークヴルム』を召喚して、フォノン・ドラゴンをチューニング。『霸王眷竜クリアウィング』をシンクロ召喚！」

霸王眷竜クリアウィング ATK2500 ☆8

「クリアウィングか……」

「効果発動。相手フィールドの表側表示のモンスターを全て破壊する！」

「手札の『エフェクト・ヴェーラー』を使って、効果を無効にする！」

「ならば。バトルだ！ダーク・リベリオンで、ハングリーバーガーを攻撃！」

「墓地から『タスケルトン』を除外する！」

悉く止めていく恵遊。

「ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロロー！」

……おっ。

「カードを一枚セットして、ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロロー！」

統一はドロローしたカードを見て表情をゆがめる。

「バトルだ！」

「させんよ。俺は『スキルドレイン』を発動！」

恵遊 LP3650↓2650

「チツ……二体のドラゴンを守備表示にして、カードをセット、ターンエンドだ」

霸王眷竜ダーク・リベリオン ATK2500↓DFE2000

霸王眷竜クリアウイング ATK2500↓DFE2000

「俺のターン。ドロー！」

さてと……。

使うべきだろうか。これ。

「1000ポイント払って、『旧神の印』を使ってセットカードを確認する」

恵遊 LP2650↓1650

統一のフィールドに伏せられていたのは『ダメージ・ダイエット』だった。突っ込むことにしよう。

「バトル！ハングリバーガーで、ダーク・リベリオンを攻撃！」

「罠カード『ダメージ・ダイエット』を発動！」

統一 LP3000↓1750

「俺はこれでターンエンドだ」

「俺のターン。ドロー！」

統一は顔をしかめた。

「俺はカードをセットして、ターンエンドだ」

「俺のターンだ」

恵遊もドローする。

一体何を伏せたのかわからない。

だが、このまま動かないとじり貧だろう。

「バトルだ！ハングリーバーガーでクリアウイングを攻撃！」

クリアウイングは破壊された。

「バーン効果で……」

「いや、チエーンして『ヘル・ブラスト』を発動！」

「何?」

「自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが破壊され墓地へ送られた時に発動。フィールド上の攻撃力が一番低い表側表示モンスター1体を破壊し、お互いにその攻撃力の半分のダメージを受ける」

一体しかないハングリーバーガーの攻撃力が参照される。

よって……。

「お互いに、2425のダメージだ！」

恵遊 LP1650↓0

統一 LP1750↓0

お互いのライフが吹き飛んだ。

あたりは静寂に包まれていたが、デュエルが決着すると、拍手が飛び交い始める。

「なんていうか、お互いに強くなったのか。お前が相変わらずなのかわからんな。恵遊」

「どうだろうな。ただ、楽しかったぞ」

「まあ、またやろうか」

統一はそう言うのと去っていった。

(強くなる……か)

恵遊は、強くなっているというより、信じ続けているだけのようにも思うのだが……。

まあ、それは今は置いておくことにしよう。

第十話

綴統一というプロデュエリストと引き分けた恵遊だが、そのデュエルがネット上に拡散している。

とはいえ、攻撃力2000のバニラである『ハングリーバーガー』をエースとする恵遊と、攻撃力4000で制圧力、耐性、後続召喚と、できることが多い『霸王龍ズアーク』をエースとする統一の引き分けと言うのもなかなか妙な話だが、それでも、お互いにデュエルタクティクスがすぐれていることは否定できない。

その状態になると、青芝恵遊と言うデュエリストが注目されることは避けられない。そうになると、困るもの達も存在するのだ。

それが、神代家。

神代家の人間は、『とある才能』を有しており、それを磨くことでデュエルの世界で栄光を積み上げてきた名家である。

実力主義ではなく、選民主義。

圧倒的な実力ではなく、その才能を磨くことのみを貫いている。

恵遊もその才能を有していたが、彼は何時の日からか、その力から離れてしまった。

そして、離れた末に神代家の当主である父を超えた。

その結果彼は家を追いだされたわけだが、それでも、彼が神代家であったという事実が消えることはない。

頭のネジが何本が飛んでいるというより、頭がネジ以外の何かで止まっている恵遊だが、まぎれもない実力者であることは事実。

ならば、なぜ恵遊を家から追い出したのか。

そんな声が、神代家の周辺で発生している。

選民主義である神代家だが、比較的新しい関係を築いた周辺組織の中には、ついでの気分で神代家に近づき、そして、明らかに実績を求めているもの達も多い。

恵遊のような実力者で、デュエリストとしてキャラの濃い者は、いろいろな意味でプロの世界でも重要なものだ。

だからこそ、それをどうにかしなければならぬ状況に、彼女はなってしまう。

「美咲様……」

「お父様からの命令ですね」

神代美咲。

デュエルスクール・ボーダーの序列一位にして、デュエルの名家、神代家の長女。

神代家としての『教育』を受け、そして、神代家として戦ってきた少女だ。

「青芝惠遊を倒し、神代家の最強が伝統を正しく受け継いできたものであることを証明しろ。という命令ですか」

「焦っているのでしょうか。家臣団の中に、噂好きの人間がいたのでしょうか。私もお父様も、兄さんに勝つことができなかつたことが知れ渡っているようです」

人の口には戸が立てられない。

美咲もわかっていることだ。

どのような権力を用いたとしても、『ここだけの話』と言う言葉でとまるほど、人は甘くない。

『ここだけの話』というのは、本人の意図を無視して拡散され、何時の日か漏れ出すもの。

だからこそ、スキヤンダルを写真に撮って雑誌に載せる記者たちが食いつばぐれないのだ。

『報道の自由』と言うのは恐ろしい。

あとで止めることはできる。

だが、それは逆に言えば、止めるまで広まり続けるということでもある。

「わざわざ私に命令する以上、お父様も、自分の力では勝てないことをわかっているでしょう。だから、私に命令してきた」

「それはそれとしても……どうするのですか？」

朱里からすれば、恵遊も美咲も、自分より上の實力を持つ者たち。

はつきり言つて、想定することはできない。

「デュエルするしかないでしょうね。兄さんがもしも私より弱かったら、どれほどよかつたか……」

強者は弱者を守る。

だが、逆は不可能だ。

恵遊が美咲よりも弱いのであれば、強者として、美咲は恵遊を守るために動ける。

しかし、恵遊は、美咲が本気を出しても勝てるかどうかは分からない相手。

「今日の夜までに、証明することになっていきますが……」

「……どうなるのかは、私にもわかりません。ただ、答えはデュエルで見つけましょう」

美咲は、そういつて微笑んだ。

★

「予想はしていたんだがなあ……」

朱里からの伝言を受けて、状況を大体察した恵遊。

美咲に与えられたデュエルコートに向かっているところだ。

ハンバーガーはもちろん食べながらである。

「でも、惠遊君は自重するタイプじゃないよね」

「そうだね。結構やりたい放題だし」

凜子と茜も、惠遊を助けることはない。

というより、名家である凜子としても神代家は大きい存在だし、茜としてもどうすればいいのか判断に困る。

「まあ、後はデュエルすればわかるさ」

向こうのデツキが何を考えているのかは知らないのだが。

デュエルコートにつくと、そこでは美咲が待っていた。

コートの外では、朱里が静かに待っていた。

観客も多い中、静かにたたずんでいる。

（昔はすぐに泣きついて来る可愛い妹だったが、成長したもんだ。まあ、成長せざるを得なくなつたとも言おうが……）

惠遊はそう思ったが、口には出さなかった。

観客席の方を見る。

そこには、久しぶりに見る実の父、かみしろごうま神代豪真が座っている。

最後に見た時より太つたな……昔はまだ痩せていたのだが……。

まあそれは今はいい。

惠遊は美咲の方を見る。

「兄さん。デュエルを受けてくれてありがとうございます」

「ま、妹からの頼みだからな」

「ある程度、状況は察していると思いますが、私としては、兄さんが相手でも負けるつもりはありません」

「それでいいぞ。かかって来い」

惠遊はハンバーガーを置いてデュエルディスクを構える。

「神代家としての、私の本気を出します」

美咲はデュエルディスクを構える。

先ほどまでは微笑んでいた令嬢という雰囲気だったが、急に空気が変わった。

美咲は、惠遊を相手に妥協することはない。

(さて、試してやるか)

お互いにカードを五枚引いた。

「デュエル！」

惠遊 LP4000

美咲 LP4000

ターンランプがついたのは惠遊。

「俺のターン。『切り込み隊長』を召喚して『カードガンナー』を特殊召喚。デッキからカードを三枚落として、二体でオーバーレイ。『彼岸の旅人 ダンテ』をエクシーズ召喚。効果発動」

彼岸の旅人 ダンテ DFE2500

すばやく墓地にカードをためていく恵遊。

「俺はこれでターンエンドだ」

「先攻ではダンテを置くのが主流になってきましたね。兄さん」

「まあ、別に悪い数値じゃないからな」

「そうですか……私のターン。ドロ」

美咲はドロしたカードを見て、一瞬だけ苦い顔をした。

「私は手札から『ドラゴン・目覚めの旋律』を発動。手札の『伝説の白石』を墓地に送り、

『青眼の白龍』『青眼の亜白龍』を手札に加えます。そして、伝説の白石の効果で、二枚

目の『青眼の白龍』を手札に加えます」

「神代家としてのデュエルか……」

「そう言ったはずです。積み重ねてきた『青眼』の重み、今度こそ、兄さんを倒します。

私は『青眼の白龍』を見せることで、『青眼の亜白龍』を特殊召喚！」

青眼の亜白龍 ATK3000 ☆8

「オルタナティブの効果発動。ダンテを破壊します！」

「無駄だ『スキル・プリズナー』を除外して、ダンテを対象とする効果を無効にする」
オルタナティブのプレスは無効になった。

「……ですが、私は魔法カード『融合』を発動。フィールドの青眼の亜白龍と、手札の青眼の白龍二体で、『真青眼の究極竜』を融合召喚します！」

真青眼の究極竜 ATK4500 ☆12

「さらに、手札から魔法カード『魂の解放』を発動。兄さんの墓地にある、カードガンナーとダンテで墓地に送られた五枚を除外します」

「なるほどな……」

五枚のカードが除外されたことを確認する恵遊。

「バトル：ネオ・ブルーアイズで、ダンテを攻撃！」

「当然破壊される」

吹き飛んでいくダンテ。

墓地肥しも意味が無くなり、なんというか、あまり役に立った感じがしないのだが、それを言うのは野暮と言うものである。

「ネオ・ブルーアイズの効果に寄り、エクストラデッキから二枚目の『真青眼の究極竜』を墓地に送り、追加攻撃を行います。兄さんにダイレクトアタック！」

この瞬間、多くのデュエリストは、美咲の勝利を確信していた。多くのデュエルで、恵遊は墓地のカードに頼った戦術を展開している。

それを一気に除外する『魂の解放』を美咲が持っていたことも評価すべきだが、このままでは防ぐことはできない。

「残念ながら、まだ無理だな。『バトルフェーダー』を特殊召喚して、バトルフェイズを終了させる」

「……私はカードを一枚セットして、ターンエンドです」

「俺のターン。ドロロー！」

恵遊は美咲が出したネオ・ブルーアイズを見る。

神代家にいた時点では、美咲が『使うことを許されていなかったカード』だ。

これを使うことが出来るということは、それ相応の実力を見に付けたということでもある。

(二枚目のネオ・ブルーアイズが落ちた。対象に取っても一回は無効になるな)

そう思いながら、カードを使う。

「俺は『儀式の下準備』を発動。『ハンバーガーのレシピ』と『ハングリーバーガー』を手札に加える」

「揃えてきましたか。ですが、素材はあるのですか？」

もちろん。

『異次元からの埋葬』を発動。『儀式魔人プレサイダー』『儀式魔人デザイナー』『タスケルトン』を墓地に戻して、『ハンバーガーのレシピ』を発動。フィールドのバトルフェーダーと、墓地のプレサイダー、デザイナーズを素材にして、『ハングリーバーガー』を儀式召喚！」

ハングリーバーガー ATK2000 ☆6

降臨するバーガー。

そして、ネオ・ブルーアイズを見て、『よつ。久しぶり！……あれ？何か変わってる』みたいな感じで不思議そうな雰囲気を出した。

だが、ネオ・ブルーアイズは何も言わない。

青眼の白龍を束ねた彼だが、何も言わず、表情も変えない。

ハングリーバーガーはそれを不思議がっていたが、今はそれは置いておくことにした。

美咲は、勝つことができなかったバーガーを相手にして、歯ぎしりする。

「きましたか……」

「ああ。俺は『アームズ・ホール』を使って、デッキトップを墓地に送って、『月鏡の盾』を手札に加える。そして、ハングリーバーガーに装備」

ハングリーバーガーは『お、今回はこっちか』と言いたそうな雰囲気です。盾を見る。

『最強の盾』ではどう頑張っても無理なのである。

「バトル！ハングリーバーガーで、ネオ・ブルーアイズを攻撃！攻撃力は一時的に4600になる」

盾からレーザーが放出され、ネオ・ブルーアイズを貫いた。

本当にマジで、恵遊が使っている盾系統の装備魔法は何があつたのだろうか。

美咲 LP4000↓3900

「効果で一枚ドロード。ふーむ……カードを一枚セットして、ターンエンドだ」

「私のターン。ドロード！」

美咲は勢いよくカードを引く。

「私は『サイクロン』を発動。『月鏡の盾』を破壊します」

「ライフを500払ってデッキの下に置く」

恵遊 LP4000↓3500

「私は『命削りの宝札』を発動。デッキからカードを三枚ドロード……すべてセットして、ターン終了です」

セットは四枚。モンスターはゼロ。

「俺のターン。ドロー。バトルフェイズ。ハングリーバーガーでダイレクトアタックだ」

「永続罫『リビングゲテッドの呼び声』を発動。墓地から『真青眼の究極竜』を特殊召喚！」

真青眼の究極竜 ATK4500 ☆12

「俺はそのままターンエンドだ」

「私のターン。ドロー！『真青眼の究極竜』で、ハングリーバーガーを攻撃！」

「『針虫の巣窟』を発動……『ネクロ・ガードナー』を除外する」

美咲の攻撃は通らない。

「……私はターンエンドです」

「俺のターン。ドロー！」

さてと……。

「俺は二枚目の『アームズ・ホール』を使って、デッキトップを墓地に送って『最強の盾』を手札に加える。そして装備だ」

ハングリーバーガーは気合が入ったようで、『よっしゃあ！』と言った感じだ。

ハングリーバーガー ATK2000↓3850

「そして、デッキトップを墓地に送って『グローアップ・バルブ』を特殊召喚して、『カーボネドン』を墓地から除外して『ハウンド・ドラゴン』を特殊召喚。二体で『アームズ・

「エイド』をシンクロ召喚する。そして装備！」

ハングリーバーガー ATK3850↓4850

「——！」

「バトルだ。ハングリーバーガーで、真青眼の究極竜を攻撃！」

「罠カード『ダメージ・ダイエツト』を発動します」

美咲 LP3900↓3725

「一枚ドロロー。あと、アームズ・エイドの効果だ。ダメージを受けてもらう」

美咲 LP3900↓1475

「……ここまで私が……」

「なんだ。俺より強くなっていると思ったのか？ まあいいけどな。俺はターンエンドだ」

「私のターン」

美咲はデッキトップに指をかける。

その時、美咲の後ろから怒声が響く。

「美咲！ 何をしている！ さっさとその目障りな雑魚を潰せ！」

神代豪真の叫びだった。

美咲が驚いたように豪真を見る。

「お父様……」

「何を躊躇している。そいつは神代家の恥なのだ。そんな雑魚に劣勢など、私は認めないぞー！」

伝統や歴史にすぎるか、方法を知らない男。

それが、神代豪真と言う男だ。

だからこそ、他に何も持っていない。

伝統にすがってきたゆえに、大きな失敗がないし、成功もそれなりにはあるが約束されていた。

だからこそ、認めないのだ。

「私のターン。ドロロー！私は『青き眼の乙女』を召喚、『ワンダー・ワンド』を使い、『青眼の白龍』を特殊召喚します。そして、ワンダー・ワンドの効果を使い、二枚ドロロー」

青眼の白龍 ATK3000 ☆8

『ハーピィの羽根箒』を発動。兄さんのフィールドの装備カードを全て破壊します」

ハングリーバーガー ATK4850 ↓2000

「バトル。青眼の白龍で、ハングリーバーガーを攻撃！」

「……」

恵遊 LP3500 ↓2500

「通った……ターンエンドです」

「俺のターン。ドロロー」

ドロローしたカードを見て、恵遊は溜息を吐く。

「『死者蘇生』を使って『カードガンナー』を特殊召喚。『地獄の暴走召喚』を発動だ」

カードガンナー ATK 400 ☆3

カードガンナー ATK 400 ☆3

カードガンナー ATK 400 ☆3

青眼の白龍 ATK 3000 ☆8

青眼の白龍 ATK 3000 ☆8

青眼の亜白龍 ATK 3000 ☆8

「そ、そのカードを」

「いつもなら『機械複製術』なんだがな。効果発動。デッキから九枚を墓地に送って、攻撃力を上げる。さらに『リミッター解除』だ」

カードガンナー ATK 400 ↓1900 ↓3800

カードガンナー ATK 400 ↓1900 ↓3800

カードガンナー ATK 400 ↓1900 ↓3800

「！」

「いつもの余裕が崩れてきてるな。俺とデュエルする時は何時もそんな感じだぞ? どんだけ自分の兄を化け物だと思ってるんだか……」

「私は『威嚇する咆哮』を発動。攻撃宣言はできません」

「……ターンエンドだ。ターン終了時に破壊される。三枚ドロ」

美咲は焦っている。

当然ながら、まだ、美咲の中でも迷っているのだ。

「美咲。一つだけ言っておく。俺を守れるのはお前だけじゃない」

「……え?」

恵遊が言ったその言葉に、美咲は驚く。

「お前は、俺を守れるのが自分だけだと思っているようだが、そんなことはない。確かに神代家は大きいけどな。俺にだっていろいろいるんだ。だからまあ……」

恵遊は何を言うか考えた後、最後にこういった。

「お前は、自由にやればいい」

「……はい。私のターン。ドロ」

ドロしたカードを見て、美咲は微笑む。

「私は『青眼の白龍』三体をリリース!」

今までは何も言わず、表情すら変えなかった青眼の白竜たちは、美咲のその宣言で、歓

喜の咆哮を上げる。

そして、飛び立ち、消え去っていくと……。

「現れなさい。『オベリスクの巨神兵』！」

オベリスクの巨神兵 ATK4000 ☆10

「……」

久しぶりに見るオベリスク。

惠遊は、美咲がそのカードをドローしただけでも満足だった。

「バトル。オベリスクの巨神兵で、兄さんにダイレクトアタック！」

「墓地から『超電磁タートル』を除外して、バトルフェイズを終了させる」

「……私はターンエンドです」

「俺のターン。ドロー。『契約の履行』を発動。戻って来い。『ハングリーバーガー』！」

惠遊 LP2500↓1700

ハングリーバーガー ATK2000 ☆6

ハングリーバーガーが戻って来る。

ハングリーバーガーは、『再び参じよ……うっは。めっさ久しぶり！』みたいな感じで

困惑していた。

今の美咲では出せると思っていなかったのだ。ちょっと墓地で休憩していたらいつ

の間にか出てきたのだからびっくりである。

「手札の『最強の盾』を二枚装備だ。楽しかったぞ。美咲」

「……はい。お兄ちゃん」

ハングリーバーガー ATK2000↓3850↓5700

メインディッシュ

「決闘終了だ。ハングリーバーガーで、オベリスクの巨神兵を攻撃！」

ハングリーバーガーが、二つの盾にエネルギーを集約させていく。

オベリスクも、自分の右手にエネルギーを集めていく。

ハングリーバーガーが放った二つの閃光と、オベリスクの拳が激突して、そのまま、オベリスクが消え去っていった。

美咲 LP1475↓0

この時、観客は思った。

(この……言い表せないもやもやは一体何だ?)

多分ハングリーバーガーのせいだと思うが、何かかもやもやしていた。

だが、この結果を認めないものもいる。

とはいえ……。

「おい、放せ！私を誰だと思っている！」

「五月蠅いぞ。私のガンドラの餌食にしてやろうか？」

騒いでいる豪真を、学園長が無理矢理に引っ張って退室させていた。

「…………お兄ちゃん」

「ま、俺は俺で何とかするさ。それじゃあな」

恵遊は美咲に背を向ける。

「…………ありがとうございます」

「兄として当然だ」

オベリスクが腰を上げる気になったというのなら、たぶん大丈夫だ。

恵遊はデュエルコートを出て、電話をかける。

「もしもし、先生。俺だけど…………あ、事情はもうそっちで知ってるのか。ちよつと、頼みたいことがあるんだ」

恵遊を守る存在は、美咲だけではない。

恵遊だって、そのままにしておく性格ではない。

電話の相手から快い返事を受けると、恵遊は満足した顔で、いつも通りハンバーガーを食べ始めた。

第十一話

神代家当主、神代豪真の評判は最悪である。

惠遊と美咲のデュエルでの言動。

あれらは、神代家における惠遊の扱いと、それに伴う決断をした豪真の行動を示すものだ。

伝統に従わないものを排斥し、自分が勝てないからと娘にそれを押し付ける。

父親として失格と言わざるを得ない行動だろう。

当然、評判が下がれば離れていく物が多い。

デュエルの影響は大きく、最近つながりを作ったものは離れていった。

「クソ！ 惠遊さえいなければ……」

会議室で拳を机に叩きつける豪真。

その顔に、当主としての威厳も、父親としての風格もない。

ただ、うまくいかないことに対して駄々をこねる子供のようなものだった。

「どうしますか？ このままでは、スポンサーが次々と離れていきます」

「決まっている。私が直々に倒してやるまで。今まで隠していた『力』があるからな」

そういうながらもデツキを握る豪真。
神代家としてのデツキ。

しかし、一枚。すさまじく黒い何かにあふれている。

「いい、いいのですか？」

「やむを得まい。こうなれば、私が直々につぶしてやる。車を出せ。今頃あのバカは、懸賞で新作ハンバーガーの優先権を手に入れ、有頂天になつて学生寮を出ているはずだ」
本当に馬鹿なのだから救いようのない主人公である。

とはいえ、作戦を滞りなく行えるというのはそれはそれで悪いことではない。

豪真が部下に命令を出すと、すぐに車が用意される。

黒塗りのリムジンである。

とはいえ、要人警護用の装甲車としての意味もあるので、神代家と言う存在がデューエルモンスターズの中でも大きいことを示していた。

実際、この男の指示一つで小国の経済くらいは自由にできるほどの権力を所有しているのだ。

それだけ、繋いできた歴史がある。

「待っている惠遊。今すぐ私が引導を——」

「そう言うわけにもいかないんだよね」

「！」

窓の外から聞こえてきた声に、豪真は振り向く。

そこには、バイクに乗った女性がいて、ヘルメットを台においてこちらを見ている。まだ若く、茶髪を揺らしている。

ただし、大人ではあるが、若干子供っぽい雰囲気も持っていた。

ライダースーツ姿なので体のラインが分かるのだが、なかなかすごい胸をしている。

「誰だ」

「私は七星^{ななほしゆい}由井。そうだね。恵遊君の小学校時代の担任教師。と言えはわかるかな？」

そういつて微笑む由井。

それに対して、豪真は眉間に青筋を立てる。

「貴様があのクズをあそこまで強くした原因か」

ぶっちゃけ追い出す前であっても強いといえは強いのだが、今ほど手が付けられないほどのバカと言うわけでもなければ変態でもなかった。

ハンバーガーに対する『思い』がありながらも、周りの目を気にしていたような感じだ。

少しわかりにくいので簡単な例を挙げると、『客観的な視点を持ちながらも、キャラ設定として中二病を演じようとしている人の心理』に近い……はずである。

だが、小学校を卒業し、中学時代を超えて、高校生になった今、躊躇も遠慮もない。某長官のセリフを引用するなら『まるで意味が分からんぞ!』と言った感じである。「しっかり調べておくべきだったね。まあ、非常勤だったから今は教師職にはついていないけどね」

由井はデュエルディスクを構える。

「惠遊君のところにはいかせないよ」

「いいだろう。まず貴様からつぶしてやる」

豪真が車を降りると、部下がアタツシケースを開いた状態で持つてくる。

豪真は、アタツシケースのデュエルディスクを左腕に付けると、デッキを入れた。

「言っておくけど、私、強いよ?」

「神代家というものを見せてやろう」

お互いにカードを五枚引いた。

「デュエル!」

由井 LP4000

豪真 LP4000

ターンランプがついたのは豪真。

「先攻は私だ。『ドラゴン・目覚めの旋律』を使い、『伝説の白石』を捨てて、『青眼の白

龍』と『青眼の亜白龍』を手札に加える。そして、伝説の白石の効果で、二枚目の『青眼の白龍』をサーチ」

「やっぱりブルーアイズなんだね」

「当然だ。私は『青眼の白龍』を見せることで、『青眼の亜白龍』を特殊召喚。さらに、『古のルール』を使い、『青眼の白龍』を特殊召喚する」

青眼の亜白龍 ATK3000 ☆8

青眼の白龍 ATK3000 ☆8

「そして、二体をリリースし、エクストラデッキから『青眼の双爆裂龍』を特殊召喚！」

青眼の双爆裂龍 ATK3000 ☆10

「ツイン・バースト……」

「私はカードを一枚セット。これでターンエンドだ」

「なーるほど。そう言う感じなんだ」

戦闘破壊されないツイン・バーストは、確かに協力と言えば強力ではある。

もつとほかにいろいろやりようはあると思うが、それは豪真の手札次第だろう。

「フーン！ 神代家は、青眼の白龍がもたらす恩恵を正確に再現することで栄光を継いできた名家。その力の前に、なすすべなどない！」

そう吠える豪真。

ただし、由井は気にしていない。

「私のターン。ドロロー！」

由井はカードを見て、一瞬で何をするかを決めた。

「戦闘耐性しかないモンスターなんて、私に意味はないよ。私は『ガガガマジシャン』を召喚して、『カゲトカゲ』を特殊召喚する！」

ガガガマジシャン ATK1500 ☆4

カゲトカゲ ATK1100 ☆4

「そして、この二体でオーバーレイ！エクシーズ召喚。ランク4『No. 101 S・H・

Ark Knight』！」

No. 101 S・H・Ark Knight ATK2100 ★4

現れる方舟。

それに対して、豪真は驚愕した。

「あ、アークナイトだと!?!」

「効果発動。ツイン・バーストをエクシーズ素材にする！」

ツイン・バーストが消え去った。

「むうう……」

「バトル。アークナイトでダイレクトアタック！」

『リビングゲテッドの呼び声』を発動。『青眼の亜白龍』を特殊召喚！」

青眼の亜白龍 ATK3000 ☆8

「安定して攻撃力3000を出してくるか……」

「それが青眼の力でもある。さあ、どうする」

得意げになる豪真。

しかし……。

「なら、そいっ……メインフェイズ2。手札から『RUMーリミテッド・バリアンズ・フォース』を発動。ランク4のアークナイトをカオス・エクシーズ・チェンジ！『C No. 101 S・H・Dark Knight』！」

C No. 101 S・H・Dark Knight ATK2800 ★5

「もうランクアップを……」

「効果発動。青眼の亜白龍をエクシーズ素材にする」

さらに消えて行くブルーアイズ。

「私はこれでターンエンドだよ」

「むうう。私のブルーアイズをよくも！私のターン。ドロー！『マジック・プランター』を使い、リビングゲテッドを墓地に送り二枚ドロー！」

豪真はドローしたカードを見て、にやりと笑った。

「私は魔法カード『復活の福音』を発動。甦れブルーアイズ！」

青眼の白龍 ATK3000 ☆8

「そしてバトルだ！ダークナイトを粉碎せよ！」

「……」

由井 LP4000↓3800

「でも、忘れてないよね。ダークナイトの効果。このモンスターを特殊召喚して、その攻撃力分のライフを回復する」

CNo. 101 S・H・Dark Knight ATK2800 ★5

由井 LP3800↓6600

戻って来るダークナイト。

エクシーズ素材を持つていれば破壊されても戻って来るというのに、自分の能力でエクシーズ素材を調達するという、何ともいえないしぶとさを持っているモンスターだ。

「フーン！私はカードを一枚セット、ターンエンドだ」

豪真の手札は二枚。そして一枚はブルーアイズだ。

まだ『融合』が引けないのだろうか。

「私のターン。ドロー」

だが、ターンは進む。

「ダークナイトの効果で、『青眼の白龍』をエクシーズ素材にする」

「罨カード『ブレイクスルー・スキル』を発動。ダークナイトの効果が無効にする！」

恵遊が使う『スキル・プリズナー』では防げないが、こちらのカードでは防ぐことが出来る。

毛色がことなるものの、使われる二種類のカードだが、親子でもそのあたりは異なるのだろうか。

「なら……私は『ガガガシスター』を召喚、『ガガガリベンジ』をサーチ。そして発動。『ガガマジシャン』を特殊召喚！」

ガガガシスター ATK 200 ☆2

ガガガマジシャン ATK1500 ☆4

「ガガガマジシャンのレベルを6にして、ガガガシスターの効果を発動してお互いのレベルを8にする。そしてオーバーレイ！『No. 107 銀河眼の時空竜』をエクシーズ召喚！」

No. 107 銀河眼の時空竜 ATK3000 ★8

「今度はタキオンだと……まさか……いや、そんなデツキを組むようなデュエリストが……」

「さあ、どうだろうね。ただ、『ガガガリベンジ』の効果で、私のフィールドのエクシー

ズモンスターは全て、攻撃力が300ポイントアップするよ」

CNo. 101 S・H・Dark Knight ATK2800↓3100

No. 107 銀河眼の時空竜

ATK3000

↓3300

「な……」

「バトルフェイズ。タキオンの効果は使わないよ。私はダークナイトで青眼の白龍を攻撃！」

「墓地の『復活の福音』を除外する！」

豪真 LP4000↓3900

「そんなことは百も承知だよ。タキオンで攻撃！」

今度こそ青眼の白龍は破壊される。

豪真 LP3900↓3600

「私はカードを一枚セットして、ターンエンド」

「私のターン。ドロー！」

豪真はドローしたカードをすぐに使った。

「私は『竜の鏡』を発動。墓地の『青眼の白龍』と『青眼の亜白龍』を除外し、二体目の『青眼の双爆裂龍』を融合召喚！」

青眼の双爆裂龍 ATK3000 ☆10

「このタイミングで……」

「バトルだ。二体を攻撃し、そして除外する！」

豪真 LP3600↓3500↓3200

ライフの上では豪真の方が次々と下がっている。

だが、少し、豪真の方がカードパワーが強い。

「私はカードをセット、ターンエンドだ」

「私のターン。ドロー」

由井はドローしたカードを見る。

「私がドローしたのは、『RUM―七皇の剣』！」

「ちっ……それか」

「メインフェイズ。これをこのまま発動。エクストラデッキから『No. 102 光天使グロリアス・ヘイロー』を特殊召喚するとともに、オーバーレイ！『CNo. 102 光墮天使ノーブル・デーモン』をエクシーズ召喚！」

CNo. 102 光墮天使ノーブル・デーモン ATK2900 ★5

「次はノーブル・デーモンか……」

「効果発動。エクシーズ素材を使って、相手モンスター一体の攻撃力を0にして、効果も

無効にする。そして、エクシース素材が無くなったことで、1500ポイントのダメージを与える」

青眼の双爆裂龍 ATK3000↓0

豪真 LP3200↓1700

「ぐおおー！」

「バトルフェイズ。ノーブル・デーモンで、青眼の双爆裂龍を攻撃！」

「畏発動。『ガード・ブロック』！ダメージを0にして一枚ドロー！」

耐える豪真。

それに対して、由井は表情を崩さない。

「私はターンエンドだよ」

「私のターンだ。ドロー！」

豪真の手札はこれで三枚。

そのうち一枚である『青眼の白龍』が動かないが、それらを展開できなければどうにもならないはずである。

だが、豪真は気色の悪い笑みを浮かべた。

「私は魔法カード『儀式の下準備』を発動！」

「え……ブルーアイズデッキで『儀式の下準備』!？」

ブルーアイズにも儀式モンスターはいるが、二種類であり、その内の一種類には対応していない。

「フッフ、ハハハハハ！」

高く、それでいて君の悪い叫びを上げると、黒い何かが豪真の体から溢れてくる。それと同時に、彼のそばにいた従者からも、似たような黒いものが出始めた。それらは集合すると、一つの人型になる。

黒で塗りつぶされたようなものであり、とげとげしい部分があるが、すくなくとも地球上の生物としてはどれにも該当しない。

黒いものが抜けきったからだろうか。豪真を含め、従者たちはその場に倒れる。

由井は驚いたが、予想の範疇だったこともあり、冷静さを保っていた。

「あなた、一体何？」

「我に名前はない」

「じゃあ『黒塗りA』でいいかな」

「良いわけがないだろう！」

「もつとも。」

「我は崇高なる『シークレット・アライアンス』の第六席である。常に我に敬意を表すべきだぞ下等種族が！」

三点ほど、由井はツツコミを入れたいと思った。

一点目、『シークレット・アライアンス』は日本語にすると『秘密同盟』になるのだが、いつても大丈夫なのかということ。

二点目、『第六席』といわれても、すごく微妙であり、自慢できるほどなのかということ。

三点目、下等種族だとか言っているが、このタイミングでそんなこと言っても死亡フラグにしかならないということ。

「まあいい。今はデュエルを続けてやろう。寛大な我に感謝するがいい」

「……デュエルディスク。豪真についたままだよ？」

「あ。そうだった」

素が出た。

由井はそう思ったが、少しかわいそうだったので言わないことにした。

そう思っているうちにデュエルディスクをつけ直したようで（ちよつと苦戦していたが）、構えなおしてくる。

「デュエル続行だ。我は『儀式の下準備』の処理を進めよう」

デッキから二枚のカードが手札に加わる。

「我がデッキから手札に加えるのは、『闇の支配者との契約』と『闇の支配者―ゾーク』だ」

「え……」

「そして我はこのまま、『闇の支配者との契約』発動。手札の『青眼の白龍』をリリース。『闇の支配者ーゾーク』を儀式召喚！」

闇の支配者ーゾーク ATK2800 ☆8

「効果発動！ダイスロールを一度行い、それに寄り効果を適用する！」

サイコロが出現。

だが……。

「ちよ……すべての目が『1』なんだけど!？」

「我の力だ！」

やっていることがカイジと同じなのだが、そこのところどうなのだろう。

出た目は当然1だ。

ノーブル・デーモンが破壊される。

「そしてダイレクトアタック！」

「チツ……」

由井 LP6600↓3800

「我はこれでターンエンドだ。さあ、どんなモンスターでも出すがいい。全て我の力で潰してやる！」

「私のターン。ドロロー！」

由井は呆れたような表情だった。

「私は『ダーク・バースト』で『ガガガシスター』を手札に戻して召喚。『ガガガリベンジ』をサーチして使って、『ガガガマジシャン』を特殊召喚、さらに『二重召喚』を使つて、『ガガガガール』を召喚！」

ガガガシスター ATK 200 ☆2

ガガガマジシャン ATK1500 ☆4

ガガガガール ATK1000 ☆3

「む……並べたか。残るのは103、104、105、106。出すとすれば……」

「私は三体のマジシャンをのレベルを3にして、シスターの効果で両方を5に変更。ガガガガールもレベル5にするよ」

ガガガシスター ☆2↓5

ガガガマジシャン ☆4↓3↓5

ガガガガール ☆3↓5

「レベル5だと？」

「私はレベル5のガガガたち三体でオーバーレイ、エクシーズ召喚『CNo. 103 神葬零嬢ラグナ・インフィニティ』！」

C N O . 1 0 3 神葬零嬢ラグナ・インフィニティ A T K 2 8 0 0 ★ 5

「直接カオス化したモンスターをエクシーズ召喚するだ?!」

「ガガガガールの効果が適用されるよ」

闇の支配者ゾーク A T K 2 8 0 0 ↓ 0

ラグナ・インフィニティの効果を言えば、このまま終わる。

だがしかし……。

「まだまだ。私はラグナ・インフィニティでオーバーレイネットワークを再構築! 『C X

冀望皇バリアン』!」

C X 冀望皇バリアン A T K 0 ↓ 4 0 0 0 ★ 7

「そんな馬鹿な……」

「バトル。バリアンでゾークに攻撃! 『ランドチャリオッツ スラッシュ』!」

黒塗りA L P 1 7 0 0 ↓ 0

ゾークは粉碎された。

「ぐ……だ、だが、まだ我は終わらない。『シークレット・アライアンス』に今すぐ戻るだけだ!」

そのまま突如姿を消していく黒塗りA。

数秒後、もうすでにそこにはいなかった。

「やれやれ、面倒なことになってきたね。でもまあ、後は任せよっか」
由井はそう言うと、病院に連絡するのだった。

★

数キロ離れた裏路地。

黒塗りAは、息を切らせながら周辺を確認していた。

「クソ、まずはここまで逃げるのが出来た。後は本部に戻れば、我はまた……」

「悪いが、もうお前に先はない」

黒塗りAは驚愕したように振り向く。

そこには、『本日限定！』と書かれた袋を片手にハンバーガーを頬張る恵遊の姿があった。

……ハンバーガーを食べていなければすぐかつこいいのに、なんとも惜しいやつである。

「フン！我に先がないだど？どういうことだ」

「単純な話だ。俺がお前を倒すからだよ」

「我は倒されただけで終わるほどの雑魚ではないがな。クツクツク」

黒塗りAは笑みを浮かべる。

……まあ、黒塗りなので笑みを浮かべてもあまりわからないのだが。

「覚えてるぞ。貴様の父親も、何千回と倒しながらも、何度も立ち上がる我に、最後は屈した。たった一度の勝利を収めるだけで、我はその人間の思考を黒く染める。我が取り付く限り、永遠に！」

「知っているさ。だが、それでもお前が終わることに変わりはない」

恵遊はデュエルディスクを構える。

「お前の名前を聞いておこうか」

「我に名前はないが、たどり着いた『種』として、『ブラック・ペイント・エターナル』と呼ばれる唯一無二の存在だ」

「……略するとBPEか？日本語で言うと『ブープ』になるけど」

「……黒塗りAよりはました。さっさと始めるぞ！」

ブープはデュエルディスクを構える。

だが、そんな状態でも、恵遊は考えていた。

(ブラック・ペイント・エターナル……日本語にすると『黒塗りの永遠』かな。『黒塗りの永^{えい}』っていうのも、案外的外れではないかもしれない)

とはいえ、デュエルにはそんなことは関係ない。

恵遊は、勝ち方を考えるのだった。

第十二話

惠遊 LP4000

ブープ LP4000

裏路地で始まった惠遊とブープのデュエル。

いつも通りの雰囲気がかまえる惠遊と、闇の力が溢れるデッキをディスクに装填しているブープ。

「先攻は譲ってやろう」

「つていうか。エースを考えると、明らかに後攻のデッキだもんな」

惠遊は微笑む。

そして、手札からモンスターを召喚した。

「俺は『おろかな埋葬』で『カードガンナー』をおとして、『クレーンクレーン』を召喚して釣り上げる。カードガンナーの効果を発動。デッキから三枚を墓地に送る」

クレーンクレーン ATK300 ☆3

カードガンナー ATK400 ☆3

現れる潤滑油。

リロードが行われるが、それもまたいつも通りだ。

「二体でオーバーレイ。『彼岸の旅人 ダンテ』をエクシース召喚。効果を発動して、デツキから三枚を墓地に送る」

彼岸の旅人 ダンテ DFE2500 ★3

「さらに、永続魔法『星邪の神喰』を発動。ターンエンドだ」

「なるほど、ある意味、万全の構えと言うわけか。我のターン。ドロロー！」

ブープはドロローしたカードを見て微笑む。

「我は手札から『高等儀式術』を発動。デツキから『デーモン・ソルジャー』二体を墓地に送り、『闇の支配者ーゾーク』を儀式召喚する！」

闇の支配者ーゾーク ATK2800 ☆8

「そして、『闇の量産工場』を発動。墓地に送った『デーモン・ソルジャー』二体を回収。一体を召喚」

デーモン・ソルジャー ATK1900 ☆4

本来ならあり得ない。

ゾークの効果は、六分の一の確率で自分フィールドのモンスターを全て破壊する。

普通なら効果を使った後に通常召喚するはずだ。

「そして、我はゾークの効果を発動！」

そして出現するサイコロ。

当然とばかりに、それはすべてが『1』だった。

「フフフ。当然、出る目は1だ。貴様のモンスターを全て破壊する！」

「チツ……」

ダンテが破壊される。

「バトルフェイズ。ゾークでダイレクトアタック！」

「墓地の『ネクロ・ガードナー』を除外して攻撃を無効にする。そして、『星邪の神喰』の効果で、デッキから『SR三つ目のダイス』を墓地に送る」

「なるほど、そうして防御札を集めるわけか。デーモン・ソルジャーでダイレクトアタック！」

「当然、三つ目のダイスを除外して攻撃を無効にする」

もともと、相性の悪いカードではない。

少々、デッキの消費が大きくなるが。

「フーン！我はカードを一枚セット。ターンエンドだ」

手札は三枚残っている。そのうち一枚はデーモン・ソルジャーだ。

ある意味で余裕があるといえるだろう。

「俺のターン。ドロロー！『儀式の下準備』を発動。デッキから『ハンバーガーのレシピ』

と『ハングリーバーガー』を手札に加える。そして発動。墓地からデモリツシャー、プレコグスターを除外、『ハングリーバーガー』を儀式召喚！」

ハングリーバーガー ATK2000

「クツクツク。やはりそいつか」

「当然だ。『最強の盾』を装備させる」

ハングリーバーガーに最強の盾が添えられる。

ハングリーバーガーは上機嫌だ。

ハングリーバーガー ATK2000↓3850

「そして『カードガンナー』を召喚して、効果を発動する」

カードガンナー ATK400↓1900 ☆

「『補給部隊』を発動して、バトル。ハングリーバーガーで、ゾークを攻撃！」

「『ガード・ブロック』を発動。ダメージを0にして一枚ドロロー！」

ゾークの破壊を許した……。

だが、恵遊は見た。

墓地に送られるゾークから、闇の力が抜けだして、デッキに戻っていくところを。

「クツクツク。私の力は基本的に、三枚のゾークに蓄積される。だが、破壊された場合は、すぐにデッキに戻るのだ。そして、墓地にあったとしても、デッキに戻せばまた使

うことは可能」

「……三枚を倒す必要があるってことか」

詳細は不明だが、それもそれである意味想定通りだ。

「だが、関係はない。カードガンナーでデーモン・ソルジャーに攻撃！」

お互いに破壊される。

「カードガンナーと補給部隊の効果で合計二枚ドロウ。メインフェイズ2だ。墓地から

『ADチェンジャー』を除外して、ハングリーバーガーを守備表示に変更」

ハングリーバーガー ATK3850 ↓DFE3850

「『星邪の神喰』の効果で、デッキから『ネクロ・ガードナー』を墓地に送る。ターンエ

ンドだ」

「我のターン。ドロウ！」

ドロウしたカードを見ていい顔をしている。

ドロウ運がいいな。と思う恵遊だが、人のことは言え無い。

「我は手札から『サイクロン』を発動。その目障りな永続魔法を破壊する！」

星邪の神喰が破壊された。

まあ、嫌になる理由が分からないわけではないが。

「さらに、『儀式の下準備』を発動し、二枚を手札に加える。『闇の支配者との契約』を発

動。手札の『青眼の白龍』を墓地に送り、『闇の支配者―ゾーク』を儀式召喚！」

闇の支配者―ゾーク ATK2800 ☆8

「懲りないな……それにしてもブルーアイズか……」

持ってきていたみたいだな。まあ、今は置いておこう。

「我はゾークの効果を発動！」

またもや出現する全一サイコロ。

ハングリーバーガーが破壊された。

「補給部隊で一枚ドロー」

「構わん。『デーモン・ソルジャー』を召喚する」

デーモン・ソルジャー ATK1900 ☆4

蘇生カードを一枚も使っていないのに、同じフィールドになっている。

なんだかんだ言って気色が悪いデツキだ。

「バトルフェイズ！ゾークでダイレクトアタック！」

「墓地から『超電磁タートル』を除外する」

「硬いな……我はカードをセット。ターンエンドだ」

ブープの手札がなくなった。

「俺のターン。ドロー！」

さて、このままだとじり貧だ。

一発ドカツとやらないとどうにもならない。

まあそれは向こうも同じだが。

「ここまで効果破壊を連発してくるのはなかなか……『真紅眼融合』を発動！ デツキの『真紅眼の黒竜』と『ハングリーバーガー』を融合。現れる。『真紅眼の黒竜』！」

真紅眼の黒竜 A T K 2 8 0 0 ☆7

「そしてバトルフェイズ。黒竜で攻撃！ この瞬間、黒竜の効果発動。墓地のハングリーバーガーを装備する！」

よっこいしょ。と言った感じで装備されるハングリーバーガー。

そして、その肉の円盤を飛ばす。

真紅眼の黒竜 A T K 2 8 0 0 ↓ 3 0 0 0

「ぐ、ぬう……」

ブープ L P 4 0 0 0 ↓ 3 8 0 0

「これでターンエンドだ」

「私のターン。ドロー！ 『契約の履行』を発動。墓地より蘇生せよ『闇の支配者―ゾーク』」

ブープ L P 3 8 0 0 ↓ 3 0 0 0

闇の支配者ーゾーク ATK2800 ☆8

また出てくるのか……ん？

「黒オーラがない」

墓地から特殊召喚されたゾークに、あの黒いオーラは乗っていないかった。

「我は永続罫『出たら目』を発動」

「それを入れるってことは……」

「当然、墓地から蘇生したゾークのためだ」

なるほどねえ……。

……予定は決まった。

「効果発動。む……目は6か。だが、『出たら目』を効果を適用し、1にする！」

黒刃竜が破壊される。

ここが恐ろしいところだ。

ゾークの効果は、

1・2 相手全破壊

3・4・5 相手一体破壊

6 自分全破壊

であり、出たら目は、

1・3・5↓6

2・4・6↓1

となる。しかも、適用するかどうかは自由なのだ。

実際にサイコロを振った場合。

『1』 適用させずに全破壊

『2』 適用させずに全破壊

『3』 適用させずに一体破壊

『4』 適用させて全破壊

『5』 適用させずに一体破壊

『6』 適用させて全破壊

となる。

相手モンスターを全破壊する確率が三分の一から三分の二になり、自分のモンスターが全破壊される可能性がなくなる。

ある意味で最高のサポートカードである。永続罠なのでちよつと遅いが。

「だが、補給部隊の効果で一枚ドロッド。そして黒刃竜の効果。戦闘、効果で破壊された時、装備していたモンスターを特殊召喚できる。戻って来い。ハングリーバーガー！」

ハングリーバーガー DFE1850 ☆6

恵遊のデュエルで、ハングリーバーガーが守備表示になることはそう多くはない。珍しい光景である。

「ならば、ゾークでハングリーバーガーを攻撃！」

ハングリーバーガーが消し飛んだ。

「我はこれでターンエンドだ。さあ、次はどうする？」

何度でも出してくるのはお互い様か。

ならば……。

「俺のターン。ドロロー！『強欲で貪欲な壺』を使って、デッキから十枚除外して二枚ド

ロー。来た！」

「何？一体何のカードを……」

恵遊は上機嫌だ。

「ブープ。お前のデッキに眠っている最後のゾーク。その一枚に、お前の力が全て乗っている。それは間違いないな？」

「その通りだ。私の精霊力が全て乗ったこのカード。出すことが出来れば、相手のドロローの下方修正すらも可能となるだろう。素晴らしい力だと思わないか？」

「さすがにすごいな。ただまあ……俺は魔法カードを発動する」

「何？」

「俺は魔法カード」

恵遊は一枚のカードを発動する。

「『天声の服従』を発動!」

「何!?! 『天声の服従』だと!?!」

「俺はライフを2000支払い、モンスターカードの名前、今回は『闇の支配者—ゾーク』ダーク・マスターを宣言。さあブープ。最後の一枚が残っているんだろう。そのカードを、俺の手札に加えるか、俺のフィールドに、召喚条件を無視して特殊召喚するか、選ぶんだな」
「く……手札に加えてもらおう」

ブープのデッキから一枚のカードが出てきて、それが恵遊の手札に来た。

恐ろしいほど闇にあふれたカードだ。普通のデュエリストなら、持っただけで精神を侵食される可能性もある。

恵遊 LP4000↓2000

「だが、どうする? 貴様のデッキに、『闇の支配者との契約』が入っているのか? 貴様のデッキの構築を考えれば、『高等儀式術』を入れる枠など存在しないだろう」

「確かに、俺にはそんなカードを入れる枠はないな。魔法カード『儀式の準備』を発動。デッキの『ハングリーバーガー』と、墓地の『ハンバーガーのレシピ』を手札に加える」
「何?……ん?……ま、まさか……!」

ブープの顔が蒼くなった。

「俺は『ハンバーガーのレシピ』を発動。リリースするのは、お前のゾークだ!」

闇にあふれるゾークが出現するが、突如出現したおっさんに寄って、ただの食材に変わってしまった。

黒い肉（焦げてないよ）となって、それを挟み込んで、儀式召喚される。

「儀式召喚、『ハングリーバーガー』!」

ハングリーバーガー ATK2000 ☆6

出現したハングリーバーガーだが、何かと黒いオーラにあふれている。

「まさか、私のゾークを素材にしてしまうとはな……だが、それに意味はない! 貴様のカードに一時的に宿っただけだ。デュエル終了と共に、私のデッキに戻る」

「そのデッキに戻る部分にも条件があるんだろう?」

「そこまで言うつもりはない」

「当然だな。ただ、俺だっここで終わらせるつもりはない」

「何?」

「俺は速攻魔法『神秘の中華なべ』を発動」

時が止まった。

おっさんがまた出現。

だが、時が止まったかのような空気に『あれ、今って出てきてよかつたの?』と言った感じになる。

「おっさん。よろしく」

おっさんは敬礼した。

……さすがに、デュエリストである恵遊の方が階級は上のようなようだ。

おっさんはハングリーバーガーを見る。

ハングリーバーガーは頷いた。

おっさんはキッチンを創造する(!?)と、すごく大きな中華鍋をとりだした。

ハングリーバーガーは、黒い肉を鍋の中に飛ばす。

いろいろな調味料がかけられ、調理され……再びハングリーバーガーのもとに収まった。

そしてハングリーバーガーがジャンプすると、普通のハンバーガーのサイズになって、恵遊の手に収まる。

「名付けて、『中華風ハンバーガー』闇にあふれた精霊仕込み」だ」

「絶対に体に悪いって！」

恵遊も実はそう思う。

が、安全なのだ。おっさんが頑張ったからな。

「というわけで、いただきまーす！」

ハンバーガーのがぶりとかみつく恵遊。

そして、目を見開いた。

「旨い！めっちゃうまい！うまく説明できないけど！」

「リポーターとしての才能が皆無ではないか！ちよつと期待した私の感動を返せ！」

「知るか！」

どうせみんなギャグ要因。

この二人にシリアスな雰囲気など到底不可だったのだ。

「ふう、ごちそうさま。と言うわけで……お前のすべての精霊力は俺の糧となった」

恵遊 LP20000↓4000

「精霊力を『食べる』など、まるで意味が分からんぞ……」

「これが、小五のころに神代家を追い出されてから俺が鍛えてきた力だ。実はどんなゲテモノだってオレは食べられるんだよね」

「私の精霊力をゲテモノ扱いする気か貴様！」

「やかましいー！もとよりまともな食材なわけないだろー！」

……正論である。

「話がそれた」

「チツ。我としたことが……だが、いいのか？我のフィールドにはゾークが健在、だとい
うのに、折角のモンスターをリリースしてしまうとはな」

「いいのさ……だってもう終わってるようなものだからな」

「どういふことだ」

「お前のライフは残り3000で、ゾークの攻撃力は2800だ。要するに、攻撃力6000以上のモンスターを出して瞬間に俺の勝ちだ。というわけで、『サイバネティック・フュージョン・サポート』『パワー・ボンド』を発動！」

「何!?!」

恵遊 LP4000↓2000

「久々の登場だぜ！パワー・ボンドで、墓地の『ユーフォロイド』と『ハングリーバーガー』
を除外、『ユーフォロイド・ファイター』を融合召喚！」

バーガー・オン・ザ・ユーフォー！

ユーフォロイド・ファイター ATK3200↓6400

「バカな……」

「さあ、決闘終了だ！ユーフォロイド・ファイターで、ゾークを攻撃！」

ハングリーバーガーが射出した肉の円盤が、ゾークを貫き、ブープに直撃する。

「ぐ……うおおおおお！」

ブープ LP3000↓0

ブープが吹き飛んでいった。

そして、ブープを構成していた闇の力が次々と拡散していく。

「……なんだあれ」

「わ、我の……我の力が離れていく！今までこのようなことはなかったぞ！」

「そりゃあ……俺の糧になったからな。お前の力」

「ゆ、許さん。許さぬぞ！何時の日か、必ずこの雪辱を晴らす！首を洗って待っている。

青芝恵遊！」

素晴らしい残すと、ブープは消えて言った。

「……また来るんだろうな。まあそれはいいか。全部終わったぜ。父さん」

恵遊はデュエルディスクをしまうと、また、いつもの用にハンバーガーを食べ始めた。

第十三話

神代家は、完全な設備がそろった病院が敷地内にある。

神代家は数多くの功績を積み上げてきた名家であり、体調管理に関してもすごいのだ。

医者は何と言うかすごく高齢の者もいるが、その分、経験を感じさせる人も多い。

いや、医学的な部分だけではない。

料理に関しては、一流のシェフが最高峰の食材で作るし、服に関しても、明日だけ着る服をオーダーメイドで作ってくれるレベルだ。

正直なところ、サービスの幅を広げ過ぎて、使いきることそのものが難しいといえるレベルである。

その話は今は置いておこう。

神代家は、病室でもかなりの設備が整っている。

病院食と言うのは精進料理のようなものが並べられるものだが、その時点でもいろいろと美味しいものなのだ。はつきり言って意味が分からない。

デュエリストの体はいろいろな意味で頑丈である。その分、ケガをするというのはよ

ほどのことであり、病室と言うのは嚴重に管理されている。

無論、そんなセキュリティを、ほぼ素通りで通る方法もある。

「……ドアが新しくなってるな」

恵遊は、そんな病室の自動ドアの前に立ってそうつぶやいた。

ドアの横にあるスキャナーに『青眼の白龍』をスキャンすると、ドアが左右に開く。

その奥には、病室とは思えないほど様々なものが広がっていた。

どちらかと言うとホテルに近い。

高級な病室と言うのはそう言う内装になっていると聞いたことがあるが、この部屋はそんな感じだった。

そして、ベッドでは一人の男性が横になっていた。

短く切りそろえた黒い髪には、若干青い色が混じっており、とても整った顔立ち。

とても若々しく、引き締まった筋肉がついた体つきで、高身長だ。

「やあ、恵遊。久しぶりだね」

「……療養中の身で何やってんだ？ 父さん」

そう、神代豪真なのである。

ピフォーアフターでたまにすごい感じになる人がいるが、このおっさんも例に漏れなかった。

病室にふさわしい服装だが、部屋が豪華すぎてあまり適していない。

が、イケメンの特権だ。何を着ても似合う。

恵遊はさわやか系のイケメンと言われるが、このおっさんはお兄さん系といえるだろう。

簡単に言う『飄々としているがいざという時頼れる』という感じだ。

……おっさんに対してお兄さん系のイケメンと言うのも日本語的に変な感じがするが。

「久しぶりに息子と話すからね。あんな体で会うわけにもいかないだろう」

「いや、そこは普通にジツとしてろよ……抵抗し続けていたんだ。無理した後遺症が残ってるんじゃないか？」

「実は体の節々が痛くてね」

「そこは年齢を考えると不思議ではないと思う」

見た目は二十代半ばだが、実年齢は四十八だ。

体格を気にするのは恵遊としても別に気持ちも分からないわけではないが、それでも、もうそろそろジジイの領域に足を踏み入れていることを自覚すべきだと思う。

「まだ体が若さを放してくれなくてね」

「全国のいろいろな人を敵にまわしてるな……」

惠遊は溜息を吐いた。

本当に話すのは久しぶりだ。

だが、その時間の流れも、豪真のなかでは大したものではない。

まだ十六歳の子供でしかない惠遊にとっては違うのだが、年の差が三倍もあるとそれも当然である。

「……それにしても、まさか、本当にあの黒いアレを倒してしまうとは……」

「あ。俺たちの中ではブープって言う名前になってるから。アイツ」

「そうか……それでいいのかな？まあそういうことにおこう」

豪真は微笑む。

「あと、倒したわけじゃない。一時的に、力をそいだけだ。また出てくると思う」

「それはそれでいいだろう。初見ではしてやられたけど、もう、僕としても負けるつもりはない」

確かに宿る信念。

時折、豪真はそう言った部分を見せる。

責任が常に共にある立場なのだ。そういうふうにもなる。

「……神代家の主要な人材を、母さんが本家から遠ざけていたからどうにかなっただけだろ」

「ハツハツハ！本当、感謝してもしきれないね。後で話しておくことにするとしよう。それにしても……」

豪真は笑った後、恵遊を真正面から見る。

「……強くなつたな。恵遊」

「五年だぞ。強くなるに決まつてる」

「それでも、僕はうれしいよ」

微笑んで、そして続ける。

「ただ、まだ、僕には勝てないだろうけど」

豪真のその言い分に、恵遊の額にしわが寄った。

「いくなあ父さん。今からやってもいいんだぞ？」

「望むところだ」

ベッドから降りてデュエルディスクを構える豪真と、持ってきたデュエルディスクを構える恵遊。

さらに言えば、片方は病室着であり、片方は学校の制服姿と言う、何とも表現しにくい違いがある。

ただし、お互いが持つそのオーラは、強者としてのそれを示している。

「デュエルができるほど広い病室というのも珍しいものだが、まあいい。久しぶりの

デュエルだ。恵遊。本気でかかってきなさい」

「言われなくてもそのつもりだ」

お互いにカードを五枚引いた。

「デュエル！」

恵遊 LP 4000

豪真 LP 4000

デュエルディスクが示した先攻は恵遊。

「俺の先攻。『おろかな埋葬』で『カードガンナー』を落として、『クレインクレイン』で蘇生させて、効果発動。その後、二体で『彼岸の旅人 ダンテ』をエクシーズ召喚」

彼岸の旅人 ダンテ DFE2500 ★3

「効果を発動して、三枚を墓地に送る。『予見通帳』を発動してターンエンドだ」

「なるほど。僕のターン。ドロロー。ふむ、『青き眼の乙女』を召喚して『ワンダー・ワンド』を装備させよう。『青眼の白龍』を特殊召喚して、ワンダー・ワンドを使って二枚ドロローだ」

青眼の白龍 ATK 3000 ☆8

実質手札消費なしで出て来る青眼の白龍。

なんだかんだ言って強いのだ。

「青眼の白龍で、ダンテを攻撃！」

「当然効かん。墓地から『ネクロ・ガードナー』を除外する」

「だろうね。僕はカードを一枚セットして、ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロロー！」

さて、やるか。

「まずはダンテの効果を使って三枚墓地に送る。そして、『儀式の下準備』を発動。デッキからバーガーセットを手札に加える」

「ほう……」

「レシピを発動。墓地のプレサイダー。ディザーズ。クリボールを除外、『ハングリーバーガー』を儀式召喚！『最強の盾』を装備させる」

ハングリーバーガー ATK2000↓3850 ☆6

出現するハングリーバーガー。

久しぶりに見る正常な豪真と、その豪真のそばにいる青眼の白龍を見てテンションを上げている。

「バトル！ハングリーバーガーで、青眼の白龍に攻撃！」

「ここはあえて受けておこうか」

豪真 LP4000↓3150

「一枚ドロロー。ターンエンドだ」

「僕のターン。ドロロー」

豪真はドロローしたカードを見て楽しそうな表情になる。

ぶつちやけ恵遊よりも子供っぽい。

「僕は手札から、『高等儀式術』を発動。デッキの『青眼の白龍』を墓地に送り、『ブルーアイズ・カオス・MAX・ドラゴン』を儀式召喚！」

ブルーアイズ・カオス・MAX・ドラゴン ATK4000 ☆8

出現する儀式モンスター。

豪真の相棒にして、神代家の当主を継ぐことになったモンスターだ。

「バトルだ。カオス・MAXで、ハングリーバーガーを攻撃！」

「墓地から『SR三つ目のダイス』を除外する！」

「相変わらず硬いな。カードをセットしてターンエンドだよ」

「俺のターン。ドロロー！」

よし。

「俺は『RUMーアストラル・フォース』を発動。ランク3のダンテでオーバーレイ。『神聖騎士王アルトリウス』をエクシーズ召喚！墓地のガラディーンとカリバーン、エアトスを装備する！」

「な……アルトリウスだつて!？」

神聖騎士王アルトリウス ATK2200↓4200 ★5

「しかし、アストラル・フォースとは……レイド・フォースじゃないのかい？」

「カオス・MAXを切り札にしている奴に対して、ライズ・ファルコン狙いのカードを持つてくるわけねえだろ！」

ライズ・ファルコンは対象に取る必要があるのだ。

カオス・MAXには無力である。

それを思いだした豪真は笑う。

「ハツハツハ！それもそうだね。そう言えば、ダンテからアストラル・フォースを使つて出せるのは、ホープ関連とプレアデス。あとはアルトリウスだつたね」

「チツ。カリバーンの効果で、500回復だ」

恵遊 LP4000↓4500

「バトルフェイズ！アルトリウスでカオス・MAXを攻撃！」

アルトリウスがカオス・MAXを切り裂いた。

豪真 LP3150↓2950

「よし。ハングリーバーガーで、ダイレクトアタック！」

「罨カード『緊急儀式術』を発動！」

「何!？」

豪真は墓地の『高等儀式術』を除外する。

「僕は墓地の『高等儀式術』を除外し、効果発動。デッキから『青眼の白龍』を墓地に送り、降臨せよ『ブルーアイズ・カオス・MAX・ドラゴン!』」

ブルーアイズ・カオス・MAX・ドラゴン ATK4000 ☆8

またもや出現するカオス・MAX。

恵遊も、ハングリーバーガーに関しては何度でも登場するが、そもそも儀式召喚でしか場に出せないカオス・MAXを簡単に操る豪真の方が、いろいろな意味で上である。

「また出てきた……ターンエンド」

「僕のターンだ。ドロロー。永続魔法『闇の護封剣』を発動」

「チツ……」

恵遊のフィールドのすべてのモンスターがセット状態になる。

なんだかんだ言って、色々なデッキに刺さるカードだ。

恵遊の場合、墓地で発動する効果が多いとはいえ、ハングリーバーガーの装備魔法は外されるし、儀式魔人による付与はなくなるのでかなり嫌いである。

「カオス・MAXで、セットされているハングリーバーガーに攻撃!」

「墓地から『ネクロ・ガードナー』を除外する!」

まだ、止められる。

「僕はカードをセットしてターンエンド。硬いな。恵遊。だが、その程度では、僕には届かないよ」

「分かつてるはずなんだけどなあ……」

「フフフ。まあいい。その通帳に何を見たのか、見せてもらおう」

恵遊は苦い顔をした。

いろいろな意味で、この父親にはばれているようだ。

「俺のターン。ドロロー。そしてスタンバイフェイズ。『予見通帳』の効果で、除外していた三枚を手札に加える」

手札に加えたカードを見て、恵遊は、何を言えればいいのか、一瞬だけわからなくなつた。

が、すぐに見せることにする。

「俺は、セットされているハングリーバーガーとアルトリウスをリリース。現れる。『青眼の白龍』！」

青眼の白龍 ATK3000 ☆8

「……いれていたのか」

「もちろん」

恵遊は、自分のフィールドに出現したブルーアイズを見る。

(……後姿を見るのは、久しぶりだな)

本当に久しぶりだ。

「カオス・ソルジャー」を使っていた時、『カオス・フォーム』に対応するのでいれていたくらいで、あまりフィールドにも出していなかった。

攻撃力3000というのは低い数値ではないが、あまり頼もしい印象がなかったのは、当時の恵遊が弱かったからだろう。

だが、恵遊が成長したからなのか、青眼の白龍が自分を認めたからなのか、今では頼もしく感じる。

「バトルフェイズ。青眼の白龍で、カオス・MAXを攻撃。その攻撃宣言時、手札の『オネスト』の効果を発動！」

「オネストだど!?!」

恵遊のデッキのエースを考えると、あまり投入は考えられない。

だが、入っているのだ。

青眼の白龍 ATK3000↓7000

「やれ!ブルーアイズ!オネステイ・バースト・ストリーム!」

自らの翼に加えて、オネストの翼を出現させたブルーアイズが、必殺のプレスを放つ。

「罨カード『ガード・ブロック』を発動。ダメージを0にして一枚ドロ―だ」

「だが、カオス・MAXは破壊される！」

ダメージは通らない。

だが、攻撃力7000の青眼の白竜の攻撃を受けたカオス・MAXは破壊され、爆散した。

「父さんは、ガード・ブロックでドロ―したカードしか持っていない。あと一歩で――」

「ほう……」

爆散したカオス・MAX。

だが、その奥に、影が差した。

「え……」

何かいる。

「無窮の時」

静かに、豪真の聲が響く。

「その始原に秘められし白い力よ」

爆発した痕。その煙が晴れていく。

「鳴り交わす魂の響きに震う羽を広げ」

輪を象徴する、羽が広がっていく。

「蒼の深淵より出でよ！」

煙は晴れた。

「『デーパーアイズ・ホワイト・ドラゴン』！」

デーパーアイズ・ホワイト・ドラゴン ATK 0 ↓ 4000 ☆10

カオス・MAXの力を引き継ぎ、降臨する。

「ば、バカな。デーパーアイズだって!？」

今も恵遊の頭の中に残っている、小さなころの恵遊の記憶。

ブープにとられる前の、本来の豪真の姿。

その中にいる豪真は、一度も使っていない。

「僕も、このカードを入れようと思ったのは、解放されてからだ。効果発動。墓地のドラゴンの、怒りを受けてもらう！」

墓地のドラゴンは五体。

「くらうか！手札の『クリアクリボー』の効果を発動。効果ダメージを無効にする！」

「なるほど。それで、どうする？ADチェンジャーは墓地にいないようだが」

「……『戦線復活の代償』を使って、青眼の白龍を墓地に送り、墓地の『ハングリーバーガー』を特殊召喚だ」

ハングリーバーガー DFE1850 ☆6

「なるほど、さすがの僕も、次にドロウする一枚だけで、カオス・MAXまでは出せない
と踏んだわけか。『戦線復活の代償』は僕のモンスターも特殊召喚できるが、出せるのは
青眼の白龍と青き眼の乙女だけ。デーパーアイズに対して考えると、ほとんどのモンス
ターの守備力では意味が無い。そんな中でハングリーバーガーを選んだのは……安心
感かな？」

「……その通りだ」

「まあいい。僕のターンだ。ドロウ」

豪真は、引いたカードをすぐに発動する。

「『強欲で貪欲な壺』を発動。十枚除外して二枚ドロ。引いたのは『サイクロン』だ。戦線復活の代償』を破壊しよう」

それと同時に、ハングリーバーガーも消えて言った。

だが……。

「何?！」

ハングリーバーガーがいなくなると同時にあふれた『精霊力』が、恵遊のデッキトップに注がれる。

「……なるほど。墓地にクリアクリボーがいる。可能性があるということか」

「そうだ。まだ、俺は諦めていない」

「結構なことだ。『一騎加勢』を発動して、バトルフェイズ。ディープアイズ・ホワイト・ドラゴンで、ダイレクトアタック！」

ディープアイズ・ホワイト・ドラゴン ATK4000↓5500

ディープアイズ・ホワイト・ドラゴンが、輪の中にエネルギーを集中させていく。

「俺は墓地の『クリアクリボー』の効果発動!墓地のこのカードを除外して、自分はデッキから1枚ドロする。そのドロしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚することが出来る。その後、攻撃対象をそのモンスターに移し替える」
「カオス・MAXがいれば、確実に使っていないだろうね。だが、ディープアイズが相手

なら、まだ可能性がある」

守備表示に対して倍の貫通ダメージを与えるカオス・MAXなら、使えない。

惠遊のデッキに、それをどうにかできるカードはない。

だが、デープアイズなら……。

「いくぞで」

デッキトップのカードに指をかける。

「ド——」

「一体何をしているのですか？」

「「え？」」

惠遊の手が止まった。

そして、病室の出入り口を見る。

そこには、満面の笑顔で怒りの眼をした（この時点でいろいろと日本語がおかしいが
そうとしか表現できない）美咲が立っていた。

ど、どうしよう。

惠遊は豪真を見る。

豪真は冷や汗をかいていた。

惠遊はデープアイズを見る。

ものすごく怖くなったのだろうか。輪っかに集中させていたエネルギーが沈黙している。

「あの。美咲？」

「使用人の皆さんからお聞きしました。ずっと、憑りつかれていたみたいですね」

「あ、ああ。そうなんだよ」

「お兄様も、それを知っていましたよね」

「あ。うん。実はそうなんだけどさ……」

「私にはずっと秘密だったのですね」

「あ。ああ。これには理由があつてね。解決した後にしつかりと話そうと思つて——」

次の瞬間、圧倒的な精霊力がオーラとなって美咲の体からあふれ出る。

「ヒイツー！」

揃つて悲鳴を上げる親子。

「……」

美咲は無言で一枚のカードをデュエルディスクに乗せる。

【※脳内再生でいいので、『神の怒り』をお願いします】

病室が震え始める。

「え、え?! 一体何が起こってるんだ!？」

「ちよつと、美咲。これは明らかに危ないやつだと僕は思うんだけど!」

震えていると、『ビキツ!』という音が聞こえて、病室の床が割れ始める。

「ちよつと待つて! ヤバいつて!!」

親子が混乱している内に、床だけではなく壁、そして天井まで割れ始める。

「なあ、父さん。ヤバくね?」

「そりゃやばいだろう。ディープアイズだつて震えあがつてるし」

会話しているが、ぶつちやけそんな余裕はない。

美咲の背後の床に、何か黒いモヤ画集減したと思つたら、マグマのようなものが爆裂する。

そして……。

「イヤアアアアアアアア!! オベリスクウウウウウウウ!」

当然、壁や天井を砕き、すごい低音の唸り声のようなものを出しながら、オベリスクの巨神兵が出現する。

「いやあれはヤバいつて! しかも『真祖』じゃん!!」

「美咲。わかつた。父さんたちが悪かつたから! ……ん?」

いつの間にか、美咲のデュエルディスクには『ドラゴノイド・ジェネレーター』が出現しており、たった今、トークンが二体とも悲鳴を上げながらオベリスクの右手にエネ

ルギーを吸収されていった。

(あ。これ。ぶっ殺す気満々だ)

「……父さん。どうする?」

「惠遊。まだあきらめてはダメだ。これは本来のデュエルではない。あくまでも精霊力のぶつけあいだ。惠遊もモンスターを早く出すんだ!」

「よっし」

惠遊はデッキで刃なく墓地に振れる。

デッキトップは非常に気になるが、こんな時に限ってデッキトップにかけることはしない。

惠遊の前にハングリーバーガーが出現する。

出現したハングリーバーガーは『よっし!俺、参しよ……おい!なんてタイミングで呼び出してんだ!殺す気かい!!』と言った様子ですごく慌てている。

「オベリスク。やりなさい」

オベリスクはどこか恐れたような雰囲気、拳を振るう。

ハングリーバーガーが最大エネルギーを円盤の肉に集中させて、ディープアイズが背中にある輪っかにエネルギーをフルチャージする。

そして、円盤の肉と、レーザーが放出された。

……片方の攻撃方法がすごく妙な感じだが、一応、親子での共同作業である。ある意味。

だが。

「無駄です」

真祖のオベリスクにはそんなものは通用しない。

振るわれた拳は、まるで障害物ですらなかつたかのように、二体のモンスターを粉碎する。

「うわああーだが、デーブアイズの効果を知らないわけじゃないだろうー」

デーブアイズが最後に一矢報いようと、第三の効果、相手の効果で破壊された時に発動する破壊効果を発動する。

先ほどよりも大きなレーザーがオベリスクに向かう。

「僕のデーブアイズの最強攻撃だ。これで破壊出来ないモンスターが存在するわけが……」

「何を言っているんですか？」

美咲はきよとんと首をかしげる。

かわいと思うだろう。普段なら。

「モンスターではありませんよ……神です！」

ディープライズの砲撃すら、全く効かない。

「あと、兄さん。父さん。しっていますか？これは効果であつて、攻撃ではないんですよ？」

「「え？」」

「メインフェイズが終われば、何があるかわかっていますよね」

親子の頬に汗が流れる。

「オベリスク。ヤレ」

すごく低い声とともに命令されるオベリスク。

そして、右腕を振り上げる。

「いや！ちよつと待て！」

「そうだぞオベリスク！君には神としてのプライドがないのか？」

プライド。

その言葉を聞いて、オベリスクは一瞬だけ反応。

拳が止まる。

親子は内心ガッツポーズ。

「オベリスク。ナニヲシテルノデスカ？」

オベリスクが震えたのを親子は見逃さなかつた。

振り上げられた拳は、まっすぐに恵遊たちのもとに炸裂する。

「く……こうなれば最後に一矢報いて見せる。父親として！」

すぐくかつこ悪い宣言である。

豪真はカードをドロ―した。

祈るような目で見る。

『炸裂装甲』

「効かねーよー！」

次の瞬間、二人はゴツドハンド・インパクトに飲み込まれて行った。

壁まで飛んでいき、そして貫いて、二十五階から落ちていく。

「落ちるううううううう！」

二人の叫び声は聞こえなくなつて行った。

「ふう、すつきりしました。あら、朱里、どうしたのですか？」

「あ、い、いえ、何でもありません」

全身を震わせながら美咲の方を見る朱里。

その目には、『逆らつたら死ぬ！』という怯えの表情があつた。

「さあ、いきますよ」

「あ、えっと、その……」

「イキマスヨ？」

「は、はい！」

慌ててついていく朱里。

この場において、彼女は神をも超える存在だった。

★

二十五階から落下していた恵遊と豪真だが、途中、『蒼眼の銀龍』が助けてくれた。

「……蒼眼の銀龍だね」

「母さんのドラゴンか。助かった」

あのままだったら、まあ、死んではいけないが、確実にやばいことになっていた。

「娘とは言え、あまり怒らせるものではないね。昔から、仲間外れにされるのは嫌がつていたからなあ」

「しかし、本当に危なかったな。蒼眼の銀龍も、もうちよつと早く来てくれるとうれしかったんだが」

恵遊の言い分に、蒼眼の銀龍は『無茶いうなよ』と言う顔をしていた。
当然である。

「それにしても、デュエル、決着は着かなかったね」

「ああ」

あそこまでめちやくちやになったが、デュエルとしては、今もカードがしっかりデュエルディスクに残っている。

ディープアイズ・ホワイト・ドラゴンは、しっかりと豪真のデュエルディスクに存在するのだ。

「どうする？」

恵遊は自分のデツキトップを見る。

ここには、あのデュエルの結末が記されている。

「……いや、今はいいよ」

シャツフル機能を作動させた。

それと同時に、デュエルが中断されて、お互いのカードが全てデツキに戻って行く。

「まあ、恵遊がそう言うのならそれでいい」

いつの間にか地面についていたので、二人とも降りた。

蒼眼の銀龍が消えて行く。

「強くなったね。恵遊」

「いや……なんか、まだまだなんだなって思ったよ」

恵遊は豪真に背を向ける。

「フフ。何時でも相手になろう」

「……ああ」

「それと、一番重要なことだから聞いておくが、神代恵遊に戻るつもりはないのかい？」
「今はないな。青芝恵遊としてでしか、かなえられない約束が残ってる」

「……いいだろう。それまで待つとしよう」

「ああ。だから、俺はもう行くよ」

「うん——いや、ちよつと待って、美咲を説得するの手伝ってほしいんだけど……」

空気が凍った。

そして、恵遊は全速力で逃げだす。

「待って！待ってくれ！」

豪真が恵遊を羽交い絞めにする。

「嫌だ！俺は今の美咲とは会いたくない！ほとぼり冷めるまであつてたまるか！」

「そんなこと言わずに助けてくれ！というか、このままだと朱里ちゃんが死んじやうつて！」

「一人で行けよ！」

「無理だよ！あれは僕たちを殺す目だったよ！」

「大丈夫だって！美咲はああ見えて一撃を入れたらすつきりするタイプだからもう戻ってるって！」

「だったら一緒に会ってくれよ！頼むから！」

「嫌だ！無理！」

情けない男たちの勝負は、まだ終わらない。

第十四話

ブープから解き放たれ、本来の性格に戻った豪真。

その姿がネット上に乗ると同時に『そのビフォーアフターはおかしいだろ！』と言われつつも、豪真の性格がもとに戻ったことは受け入れられた。

というより、神代家を支えた恵遊の母が、もともと神代家と密接にかかわっていた重鎮たちを連れて帰ってきたことで、正常な形に戻ったといえる。

当然、今までのように無茶を言うことはなくなった。

それにより、デュエルスクール・ボーダーでは、今まで神代家に抑えられていた『青芝恵遊をエキセントリック・テンスにする』という議題が浮上してくる。

エキセントリック・テンスは、一位は決まっているが、ほかの順位は決まっていない。

その一位の生徒を倒した恵遊は当然、エキセントリック・テンスになるのが当然の實力といえる。

ボーダーでは、實力のある生徒がエキセントリック・テンスになるのは『義務』である。

そういった評価に興味がないようなものが二名ほど（猪八重銀二と神楽真司）いるが、

所属しているのは自薦ではなく義務だからだ。ちなみに、真司は知っていたが銀二は知らなかったらしい。周りの情報を集めなくとも人は生きていけるのだということを示してくれる男だ。

ただ、エキセントリック・テンスは学校が与える称号である。

数々のサービスをどうするのかは周辺企業が決めることだが、この称号というのは適当につけることは当然できない。

その前提で考えると、今回のような『まぎれもない実力を示している恵遊』が議題に上がるのはわかりやすい。

そして、学校側はいつも、もう一つの生徒を特定している。

それは、もしもこれからエキセントリック・テンスに選ばれるような実力者が現れた場合、エキセントリック・テンスから外れる生徒である。

★

「恵遊君がエキセントリック・テンスになるのはほぼ確定みたいだけど、外れる人が誰なのかって言われてるね」

「実際、誰なんだ？」

「戦績的に言えば、高等部三年にいる人と、あと、プライバシーブレイカーかな。ほぼ同じなんだよね」

恵遊は凜子と話していた。

話しているのは、エキセントリック・テンスについての内容である。

というより、学校中がその話題になっている。

新しくエキセントリック・テンスになるといのは、そのほとんどが卒業式あたりから入学式にかけてのことだ。

デュエリストとして見逃せないのは当然として、いろいろな企業から意見が来るらしい。

エキセントリック・テンスから外れるということは、それまでかかわっていた周辺企業との関係が危ぶまれるのだ。

エキセントリック・テンスだった。ということは確かにすばらしいことだが、それは要するに、学校側が認めていないということでもある。

そんな生徒に周辺企業が金を出すのかということなのだ。

一部、ゼルダの伝説を購入するためにその資金を使っているバカとか、双眼鏡と高性能カメラのために金を使っている変態がいるのだが。そこは誰かが妥協するべきだろう。

「あ、このステージで決めるらしいよ」

凜子が指差す先には、周辺企業ではなく学校が管理しているデュエルコートがあつ

た。

すでに観客席は満席である。

「すごいね……」

「それだけ気になるってことなんだろうな……」

見渡す限りの人の数だ。

放課後になると同時にまつすぐここに来た生徒がほとんどだろう。

「あ。出てきたよ」

一つの入り口から出てきたのは、全身をすっぽり覆うフードマントをかぶった生徒だ。

腕章をつけているのが目印らしい。

「……フードマントを深くかぶっててわからないな」

「正体不明っていうのが肝だからね」

本来の身長よりも高くしているのだろうか。靴音が変な感じだ。

底が高いブーツを履いているような音がする。

フードマントもぶかぶかで、体格が分かりにくい。

おそらく、男子とも女子ともとれる平均を狙っているのだ。

あれではわからない。

「そういえば、プライバシーブレイカーって戦績が悪いのか?」

「戦績はいいけど、それは勝率の話であって、勝利数じゃないみたいだね」

「情報収集に時間をかけてるってことか」

「だと思っ」

そこまで話した時、反対側から男子生徒が出てきた。

小太りの生徒だ。

エキセントリック・テンスになると資金は使いたい放題なので、太るのもわかるのだが……。

「梶原樹かじはらい、つぎっていう生徒だね。こっちは、勝率もエキセントリック・テンス同士だとそう

でもないかな。勝たなければならないところでは勝っているけど、戦績はよくないって

聞いている」

「要するにギリギリってことか」

「そうなるね」

二人がデュエルディスクを構えている。

「プライバシーブレイカー。すまないが、今日は勝たせてもらうぞ。僕はまだ。この立場を手放したくないからな」

「……」

ライブバシーブレイカーはしゃべらない。

あわてて、焦っている様子の樹と比べて、落ち着いている。

「話さないんだな。ライブバシーブレイカーって」

「むやみに情報を与えないためじゃないかな。たぶんそんな感じだと思うよ」

ちらつと審判席を見ると、学園長が立ち上がったところだった。

「それではこれより、デュエルを開始する」

それを聞いて、二人がカードを五枚引いた。

恵遊の目には、ライブバシーブレイカーの全身が、一瞬だけ震えたような気がした。

樹のほうも手札が悪いわけではないようだ。

「デュエル開始！」

「デュエル！」

樹 LP4000

ライブバシーブレイカー
P B LP4000

ライブバシーブレイカーのほうから聞こえてきた声は、何か、変成器を使った女性のような声だった。

まあ、そもそも中のほうは性別すら違う可能性があるものでわからないのだが。

ランプがついているのはライブバシーブレイカーのほうだ。

「……私の先攻。カードを三枚セット、ターンエンド」

セットしただけでターンを終了。

何か狙っているのか？

「僕のターンだ。ドロー！」

樹は元気よくカードをドローする。

そして次に動いたのは、樹ではなかった。

「ドローフェイズ終了時、『強欲な贈り物』を発動。相手はデッキから、カードを二枚ドローする」

この瞬間、会場が震えた。

エキセントリック・テンスでいられるかどうかという重要な一戦。

その戦いで、相手にメリットを与えるカードを使う理由がわからない。

「ば、バカにしているのか？だが、慈悲は与えんぞ！」

樹はカードを二枚ドローした。

そして、八枚になった手札を見て、笑みを浮かべる。

ほぼデッキの四分の一が手札に加わった。

デッキはわからないが、キーカードがそろってないはずがない。

「……スタンバイフェイズ、『大暴落』を発動」

空気が凍った。

「だ……大暴落だと?」

「効果を知らないのなら、教える。相手の手札が八枚以上あるとき、そのすべてをデッキに戻して、シャッフル。二枚引いてもらう」

後攻になったばかりで、手札が二枚になる。

絶望的どころの話ではない。

「ぐ……」

樹は八枚のカードをデッキに戻す。

シャッフルされて、祈るようにしてカードを二枚ドロウした。

「よし、まだ可能性が……」

「……まだ終わってない。『緊急儀式術』を発動。手札の『リチュアの写魂鏡』を除外。ライフを3000支払って、『イビリチュア・ガストクラーケ』を儀式召喚」

PB LP4000↓1000

イビリチュア・ガストクラーケ ATK2400 ☆6

「が、ガストクラーケだと?」

「効果により、相手の手札を二枚確認。一枚を、デッキに戻してもらう」

「そ……そんな馬鹿な」

プライバシーブレイカーのそばに、二枚のカードが表示される。

「ドローカードは、『神の宣告』と『強欲で貪欲な壺』……『強欲で貪欲な壺』をデッキに戻してもらう」

「ぐ……ぬうう」

樹はデッキに戻した。

「まだ、あなたのターン」

「ぼ、僕はカードをセットして、ターンエンドだ。まだまだ、まだ可能性はある。貴様が攻撃力1600以上のモンスターを出さなければ、まだ次のターンがある。貴様の手札はゼロ。伏せカードもないのだからな！」

言っていることは事実だ。

「……私のターン。ドロー。『巨大化』を発動する」

イビリチュア・ガストクラーケ ATK2400↓4800

「は……ははは……」

乾いた笑い声を出し始める。

伏せられている『神の宣告』は、使ったところで意味などない。

使ったら、ガストクラーケの攻撃力、2400を下回るライフになってしまうのだ。

「バトルフェイズ。ガストクラーケでダイレクトアタック」

「う、うわあああああああ！」

樹 LP4000↓0

デュエル終了。

勝利したのは、プライベートブレイカーだ。

「……恵遊君」

「案外、何もできずに負ける時っていうのはある。ピーピンググハンドスのギミックがデッキにあると分かった時点で、その可能性を考えるべきだ。ただ……神の宣告でなければ、まだ可能性があったかもしれないがな。ただ、今回は、プライベートブレイカーの運が強すぎた。それだけのことだろ」

恵遊は何も言わずに歩き出した。

★

恵遊は学校の敷地を出ると、ハンバーガーショップに向かっていた。

プライベートブレイカーのデュエルはそれなりに気になるものではあったが、彼の中にあるのは常にハンバーガーのことだけだ。

販売時間的问题がないのであれば多少他のことにも気が向くのだが、新商品が発売されるとかそういう話になると恵遊の頭の中はすぐにハンバーガー一色になる。

「さてと、新商品も手に入れたぞ」

満面の笑みを浮かべて幸せそうな表情で店を後にする恵遊。

先ほどまでのデュエルなど頭に残っていないかのようだ。

「新商品を手に入れたことがそこまですれいいのかい？」

恵遊がテーブルに座った時、横から話しかけてくる奴がいた。

恵遊は振り向いた。

そこにいたのは、真つ白な制服を着た男子生徒だ。

流れるような銀髪のを伸ばしており、なんとというか『うさん臭さ』を感じる。

「……かいと界人。お前か」

「ああ。久しぶりだね。恵遊」

たそがれかいと
黄昏界人。

恵遊の小学校のころの同級生で、恵遊にとっては、もつとも黒星が多い相手だ。

「その白い制服。エクソダスカ」

「ああ。恵遊の紺色のブレザーは、ボーダーのものだろう」

「知っていてここに来たくせに」

「当然だ」

界人は反対側の席に座る。

「聞いたよ。君の父親を取り戻したようだね」

「ああ」

「それは何より」

「んなことはないだろ。お前はそんなことを言いに来るような奴じゃない」

「ふむ……確かにそうだね」

界人は微笑む。

「君はエキセントリック・テンスになるのかい？」

「なるだろうな」

「となると、学園対抗戦に出場することになるだろう」

「対校戦？」

「まだ聞かされていないのか……ボーターとエクソダスは、毎年、それぞれ十人の代表を出しあつてデュエルをするんだよ」

「へえ……確かに対抗戦だな」

そのような祭りがあるのか。

「今までの戦績はどうだったんだ？」

「いたちごっこ。と言ったところだね。確かに君の妹は強かったが、他のデュエリストがね……」

「ああ。なるほどな」

なるほど、確かにいたちごとくである。

「まあ、私も参加していなかったからね。君が参加するというのなら、私も出る意味があるというものだ」

「今まで出てなかったのか？」

「ああ。私も、少しやる気が出なかったからね」

気分でいろいろと決めるのは相変わらずか。

「対校戦か……出る時は、お前を相手にすることを考える必要があるってことか」

「その通り」

恵遊はあからさまに嫌そうな顔をした。

「ここで一戦してもかまわないが……」

「いや、楽しみは後に取っておくさ……で、はづき葉月ととこは常葉は元気なのか？」

あと二人の同級生を思いだして、恵遊はそう言った。

界人は頷く。

「ならいいさ。あと、裏でこそそこそ嗅ぎ回っている奴がいるかもしれない。覚えて置けよ」

「もちろんだ。ところで、君はプライベートブレイカーについてどう思う？」

「……今、その話題を出すのか？」

「先ほど行われたデュエルことは私も聞いたからな。なかなか刺激的だったそうじゃないか」

「……俺は別にどうも思わないさ。ただ、頼むから喧嘩なんて吹っかけるなよ。あの程度のデュエリストだったら、お前が本気なんて出したら本当につぶれちまうからな」
「私は別に見境がないわけではないよ」

界人は微笑んだ。

「対校戦。楽しみにしている」

界人は立ち上がると、フードコートから去っていった。

残された恵遊は呟く。

「……父さんの問題は一先ず片付いたが……今度は対校戦か」

荒れそうだと恵遊は感じた。

第十五話

「親善デュエル？」

放課後。

恵遊は美咲からそのデュエルの存在を聞いた。

「はい。エキセントリック・テンスは全員が学園對抗戦に参加することになりますが、お互いのことを理解することも含めて、デュエルを行うことになっています」

「エキセントリック・テンス全員か……」

青芝恵遊

神代美咲

久我昇平

猪八重銀二

神楽真司

西条剛毅

PB

「俺三人くらい知らないんだけどさ。なんかギャグ要因しかない気がするんだけど」

「今更ですよお兄ちゃん」

それを元一位が言うのはどういふことなのだろうか。

まあいいだろう。

「それと、お兄ちゃんは先ほど三人知らないと言いましたが、その三人との顔合わせもあ
りますね」

いろいろ目的はあるようだが、エキセントリック・テンスそのものは義務である。

親善デュエルも当然必要だ。

対抗戦に出場し、界人に挑みたいと考える恵遊にとっては必須である。

「行ってみるか」

「そうですね」

フツツと微笑む美咲。

楽しそうだが、実際楽しいと考えているのだろうか。

まあ、いざとなればちよつとO☆H A☆N A☆S H Iすればいいと考えているのだ。
絶対に父さんは子育ての仕方を間違えている。

★

敷地内に高層ビルがある。

意味が分からないが、エキセントリック・テンス全員がこのビルにお世話になること

が多いようだ。

エキセントリック・テンスに必要な施設がそろっていることはもちろん、セキュリティも高い。

通信のための電腦世界には『ファイアウォール・ドラゴン』がいるらしい。意味あるの？あるんです。

そんなビルに連れてこられた恵遊。

警備員がいたのだが、美咲と恵遊を見た瞬間に道を開けた。

これから中で何があるのかを知っている様子である。

中に入っても受付があったり、小さなレストランまでついていることが分かった。

ただ……従業員の動きに隙がないのだ。

「なんか……物騒な雰囲気があるな。スタッフが荒事に慣れてるって言うか……」

「警備が付くのはいつものことみたいですね。すごくひどいことになった経験がある要です」

「聞きたくなかった」

さて、そんなことを言っているうちに目的地に着いた。

デュエルコートが五つ存在する部屋である。

中では全員がそろっていたようだ。

P Bに関しては、先日のデュエルの時と同じ服装である。

聞いていたことだが、周辺メンバーというか、側近に当たる生徒はいないようだ。

「む。来たか」

ゲーム端末をスリープモードにして、銀二がこちらを見る。

「これで全員がそろったね」

真司もスマホをポケットに突っ込んだ。

今まで何を見ていたのだろうか。

「まっ、惠遊はエキセントリック・テンスになったばかりだし、そんな感じだと思うぞ」

昇平はいつも通り、からからと笑った。

「……」

P Bは沈黙している。

そして、何かを見ているようにも見えない。

本当に何もしていないのだ。子の空気でそれは何かすごいことのように感じる。

「まあいい。全員そろった。これで親善デュエルができる」

剛毅は通常通り済んで問題ないと思っただようだ。

惠遊は残っている三人を見る。

「自己紹介した方がいいかな？ 僕は菊地昂だ」

朗らかな笑みを浮かべた男子生徒だ。

黒い髪はやや伸ばしてボサボサだ。

そして、カメラを首からぶら下げている。かなり本格的なものだ。

「因みに高等部三年で、写真部の部長でもあるんだ。よろしく」

「よろしくです」

次。

「私は聖野理央ひじりのりおだよ。何時も妹がお世話になってるね」

「ええもう本当に……」

部屋に入った時から『!?』という感じに一瞬だったが、姉か。

長い金髪であり、確かに妹の凛子によく似ている。

だが、明らかに別な部分があった。

……胸である。

妹は大きいのだが、この人はその……慎ましいのだ。はい。

あと……少し、PBの体が震えている気がした。

「何か失礼なことを考えてない?」

「いえ、なにも」

外見的特徴なのだ。恵遊としてはどうしようもない。

次。

「私は天塚吉野だ。高等部二年。この学校の生徒会長を務めている」

「……え、この学校って生徒会あったの？」

「知らなかったのか？」

「気配なかつたです」

黒い髪を切りそろえて、さらに黒縁の眼鏡をかけている。

見た感じは『優等生』と言えるだろう。

「……まあいい。それで、デュエルは実際にどうする？」

「タツグデュエルでいいんじゃないかな。恵遊君は私たち三人をわかってないだろう

し、それで十分わかると思うよ」

「僕はそれでいいよ」

「私もそれでかまわないが、恵遊。それでいいか？」

「俺もそれでいいです」

というわけで……。

何故か美咲がくじを持っていたので、チームも決めた。

恵遊&理央

吉野&昴

そのチームでデュエルすることになった。

デュエルコートに立って、全員がデュエルディスクを構える。

ギャラリーでも、いろいろと思うことはあるようで……。

「どういうデュエルになるんだろうね」

「真司。決まっているだろう。恵遊が混ざっている方が大体勝つ」

「デュエルと言うのはそう言うものではないと思うゾ？」

「私もそう思うが、まだ未知数の部分があるからな」

「お兄ちゃんは強いですからね」

「……」

P Bが何も言わないのは相変わらずだが、予測として、恵遊がいる方が勝つというのが共通認識のようだ。

(それにしても、聖野家の人間とばかりタッグを組んでいるような……まあいいか)

恵遊は一先ずそう言うことは置いておくことにした。

「「デュエル！」」

恵遊&理央 LP4000

吉野&昴 LP4000

先攻は吉野。

「私か。まずは『おろかな埋葬』を発動。デッキから『ワイトプリンス』を墓地に送る。効果で『ワイト』と『ワイト夫人』を墓地に送る」

「ええ!？」

わ、ワイトだと……いや、別に悪いわけじゃないんだけどさ。

デッキを見る。ふむ、カードは多いようだ。今は引いていないようだが『芝刈りワイト』の可能性が高い。

「『ワイトキング』を召喚。カードを一枚セットしてターンエンドだ」

ワイトキング ATK? ↓3000

降臨するガイコツ。

なんだかんだ言っただけ強いなだけだなあ……。

「私のターン。ドロロー! ふーむ。良い感じかな? まずは『バイス・ドラゴン』を特殊召喚!」

バイス・ドラゴン ATK2000 ↓1000 ☆5

惠遊は出てきたモンスターを見て表情を変える。

もしや……。

「そして、『フレア・リゾネーター』を召喚!」

フレア・リゾネーター ATK300 ☆3

「早速か」

「私はレベル5のバイス・ドラゴンに、レベル3のフレア・リゾネーターをチューニング。王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000↓3300 ☆8

フレア・リゾネーターが素材になったことで攻撃力が上昇している。

「スカーライトじゃないのか？」

「聖野家でスカーライトを使っているのは凜子ちゃんだけだよ。まあとにかく、私はレッド・デーモンズを強くなって来たわけだからね。と言うわけで『クリムゾン・ヘル・セキユア』を発動。相手の魔法・罠を全て破壊する！」

『針虫の巣窟』を発動する。キングとプリンセスが落ちたことで2000上昇だ」

ワイトキング ATK3000↓5000

これがワイトの意味不明なところだ。

というより王子がちよつと自重してほしい感じなのだが……そのあたりは言っても仕方がないだろう。

「ここまではほとんどいつも通りだな」

「ワイトキングの攻撃力が確保されているのも、レッド・デーモンズ・ドラゴンが出て来

るのも、確かにいつも通りですね」

剛毅と美咲が呟いた。

ほかのメンバーももうなずいている。

PBは沈黙しているので分からないが。

「そして『月の書』を発動。ワイトキングをセット状態にするよ」

瞳はないが涙目になりながらも裏に引っ込んだワイトキング。

とはいえ……こうなってしまうと、レッド・デーモンズ・ドラゴンとの相性は最悪だ。

「そしてバトルフェイズ！レッド・デーモンズ・ドラゴンで、ワイトキングを攻撃。『ア
ブソリユート・パワー・フォース』！」

掌底をワイトキングにたたきつけるレッド・デーモンズ。

ワイトキングは『あれ、ちよつとコーヒーブレイクを……つてギヤアアア！』と言つた感じで、コーヒー豆が入った袋を手に散っていった。

「……いや、いいのかあれは」

恵遊でもちよつとへこむ可能性がある。

ちなみに、ワイトキングが自身の効果で復活できるのは戦闘で破壊された時のみ。

レッド・デーモンズ・ドラゴンが守備表示モンスターに攻撃する場合、戦闘破壊の前に効果破壊の効果が適用されるので、丸ごと砕け散るのだ。戦闘破壊に対応するリク

ルーターの天敵である。

「安心しろ。マロンが慰めているだろうからな」

「目に浮かぶようだよ」

針虫の巣窟で落ちていたのだろうか。

「私はカードを二枚セットして、ターンエンドだよ」

そんなことは丸つとスルーするかのようには、リオはカードを伏せてエンド。

デュエルは続行だ。それは間違いない。

「僕のターン。ドロー！」

昴がドローする。

「フフフ……僕は『天帝従騎イデア』を召喚！効果に寄り、『冥帝従騎エイドス』を特殊召喚する！」

天帝従騎イデア ATK800 ☆1

冥帝従騎エイドス ATK800 ☆2

帝？

何か珍しい感じが……。

「クッククク……ヒャーハッハッハ！全開で行くぞ！僕はイデアとエイドスをリリース。『The grand JUPITER』をアドバンス召喚！」

突如降臨するプラネットシリーズ。

あと……。

「……なあ、なんかもう見ていられないくらいイタイ感じになってんだけど」

「生暖かい目で見守つてあげてね。本人はあまり気にしていないんだけど、プラネット

シリーズみたいなカードを使った時はあんな感じになるから……」

「もしかして、デツキに大量に投入されているのか？」

「そうだよ」

ちなみに、地球と海王星は入っていないらしい。

地球 ↓無理

海王星 ↓牢屋

と言った感じだろうか。いずれにせよそれが限界である。

「話はすんだか？ ジュピターの効果発動！ 手札二枚をコストに、レッド・デーモンズ・ドラゴンを装備する！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンが吸収されていく。

シンクロモンスターは奪われる運命にあるのだろうか。

まあそれはそれとして……。

The grand JUPITER ATK2500↓5500

ちよつとえぐい攻撃力になってきたな。

「バトルフェイズだ！ ジュピターでダイレクトアタック！」

「罨カード『ガード・ブロック』を発動。ダメージを無効にして一枚ドロードよ」

「チツ……カードを一枚セットしてターンエンドだ」

プラネットシリーズには驚いたが、手札消費の多いデッキのようだ。

そもそも、プラネットシリーズはそういうものだが。

「俺のターン。ドロード！」

やつとターンが回ってきた。

「まずは『手札抹殺』を発動して手札交換。『儀式の下準備』『アームズ・ホール』を発動して、デッキからバーガーセットと『最強の盾』を手札に加える」

不自然なほど手札に加わるが、まあ、精霊力込みのデッキだ。

そもそも、ドロード運がないと回らないピーキーデッキである。

ただ、どうせピーキーなデッキを作っても回せる運があるのなら、他のカードを使つた方がいいというのが周りの意見なのだが……まあ、それはそれである。

「そして、『ハンバーガーのレシピ』を発動。墓地のプレサイダー、デザイナーズ、クリボーを除外、ハングリーバーガーを儀式召喚！最強の盾を装備させる」

ハングリーバーガー ATK2000↓3850 ☆6
降臨するバーガー。

『俺、参上……あれ、攻撃力5500って、ちよつとヤバくない?』と言った感じで、いろいろな意味で危機感を持った状態で登場。

攻撃力3850までなら大体正面から殴り倒す恵遊のハングリーバーガーだが、それ以上の攻撃力は苦手である。

「無駄だぜ!俺のジュピターの前に、そんな攻撃力のモンスターは通用しねえんだよ!」
一人称まで変わるのか。この男。

恵遊はかなり精神的につかれてきた。というか、見ているだけで何か痛々しいので、恵遊の方に耐性がないのである。

「そんな優位は、汎用カード一枚で覆るということを身を持って教えてやるさ。『サイクロン』を発動!」

モンスターカードが効果に寄って装備カードになる場合、その全てはルール上、装備カードとなる。

まあ、ハングリーバーガーに装備カードを付けて何とかしている恵遊が言うのも何だが、パワーだけでは解決できない世知辛い世の中なのだ。

竜巻が発生すると、ジュピターが装備しているレッド・デーモンズ・ドラゴンが破壊

される。

The grand JUPITER ATK5500↓2500

「何!？」

「バトルフェイズだ。ハングリーバーガーでジュピターに攻撃!」

最強の盾の中央にエネルギーが集約され、放出。

ジュピターは粉々になった。

吉野&昴 LP4000↓2650

「効果で一枚ドロウする」

「いやー……まさか。こんな簡単に突破されるなんてね。僕としてもなかなかないこと

だよ」

……戻ってる。

恵遊は何を言えばいいのかわからなくなった。

いや、言いなおそう。最初から分からなかった。

「俺はターンエンドだ」

「私のターンだ。ドロウ」

吉野がカードをドロウする。

『『馬頭鬼』をコストにして『ワン・フォー・ワン』を発動。デッキから『ワイトキング』

を特殊召喚する」

ワイトキング ATK? ↓ 6000 ☆1

「そして、『馬頭鬼』を除外することで、墓地から『ワイトキング』を特殊召喚する」

ワイトキング ATK? ↓ 5000 ☆1

ワイトキング ATK 6000 ↓ 5000

「……攻撃力5000が二体か」

ワイトというのは、デッキにおける『目標』が定まっている。

即ち、ワイトカードを墓地に送り、ワイトキングを場に出す。それだけだ。

夫人がいればなおさら強い。

「バトルだ。ワイトキングで、ハングリーバーガーを攻撃！」

「『超電磁タートル』を使って、バトルフェイズを終了させる！」

「むう……墓地から除外するカードを引けないとあまり意味がないな。ターンエンドだ」

エンド宣言をした瞬間。理央が恵遊を見た。

恵遊はそのアイコンタクトに答える。

「『リビングデッドの呼び声』を発動。墓地から『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を特殊召喚！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000 ☆8

復活するレッド・デーモンズ。

それを見て、吉野は苦い顔をした。

だが、既にエンド宣言は済ませている。

これ以上のことはできない。

「私のターン。ドロロー！『紅蓮魔竜の壺』を発動して二枚ドロロー。『闇の護封剣』を発動するよ！」

「バカな……」

再び、セット状態になるホワイトキングたち。

「確かに相性がいいのは分かるけどさ。ちよつとドロロー運がよすぎだゾ？」

「ハングリバーガーがフィールドにいるからだろう。よくあることだ」

「だな。大体いいカードを引ける」

昇平が苦い顔をするが、身に覚えがある真司と銀二は頷く。

「バトルフェイズ。レッド・デーモンズ・ドラゴン。もう一度全てぶつ壊せ！」

アブソリュート・パワー・フォースを連続で叩きこむ。

二体のホワイトキングは『ま、またコーヒータイムが……』『コーヒースーバーが粉々に！』と言った感じで、コーヒード豆と、粉々になったサーバーを手に散っていった。

なんとも形容しがたい光景である。

「よっしや！ハングリーバーガーでダイレクトアタック！」

「まだだ。手札から『バトルフェーダー』を特殊召喚。直接攻撃を無効にして、バトルを終了させる」

バトルフェーダー D F E O ☆1

上手い。

現在のハングリーバーガーは、デザイナーズを素材にしているので罠カードを効果を受けない。

そのため、モンスターか魔法で対応することになるのだが、手札に握っているとは思っていないかった。

「むう……私はターンエンドだよ」

「僕のターン。ドロロー！『強欲で貪欲な壺』を使って、さらに二枚ドロローだ」

ドロローしたカードを見た瞬間、昴の表情が変わる。

「フハハハハ！行くぞ！俺は手札から『ハーピィの羽根箒』を発動だ！」

「嘘……」

ハングリーバーガー ATK3850↓2000

ハングリーバーガーは装備魔法に寄って攻撃力が上がっているし、レッド・デーモン

ズ・ドラゴンはリビングゲデッドの呼び声によって蘇生している。

この状況においてはかなり刺さるのは間違いない。

「そして、『リビングゲデッドの呼び声』を俺も発動するぜ。墓地から『ガーベージ・ロード』を特殊召喚し、『タンホイザーゲート』で、バトルフェーダーとガーベージ・ロードのレベルを6に変更し、オーバーレイ！エクシース召喚！『No. 25 重装光学撮影機フォーカス・フォー』！」

No. 25 重装光学撮影機フォーカス・フォー ATK2800 ★6

「……プラネットじゃないのに豹変するのか？」

「まあその……ナンバーズだから……」

もうすでに恵遊もよく分からなくなっている。というか思考を放棄したい。

「バトルフェイズ！フォーカス・フォーでハングリーバーガーを攻撃！」

恵遊&理央 LP4000→3200

防御カードが墓地にたまっていないのは珍しい。

戦闘破壊されるのもそうそうないことだ。

「俺はこれでターンエンドだ」

「俺のターン。ドロー！」

四枚になった手札。

「よっしゃ！まずは墓地の『ブレイクスルー・スキル』を除外して効果発動。フォークス・フォースの効果を無効にする！」

「チツ……」

「そして、『契約の履行』を使って、墓地のハングリバーガーを特殊召喚！」

恵遊&理央 LP3200↓2400

ハングリバーガー ATK2000 ☆6

「二枚目の『最強の盾』でも握ってんのか？」

「そうじゃないんだよなあ！手札の『融合』を発動。フィールドのハングリバーガーと、手札の二枚目のハングリバーガーを融合！」

手札からもハングリバーガーが出現して、二体のバーガーがぐるぐると混じりあう。

「融合召喚！レベル10『覇勝星イダテン』！」

覇勝星イダテン ATK3000 ☆10

降臨するイダテン。

無論、二体のハングリバーガーは肩に乗っている。

本人からすればすごく邪魔だろうが……。

「い……イダテンだ?!?だが、俺のフォークス・フォースはエクシーズモンスターだ。確

かに攻撃力は負けているが、フォーカス・フォースの攻撃力を0にすることはできねえ！」

「それでもないぞ。イダテンの効果で、デツキからレベル5の戦士族モンスター『ターレット・ウオリアー』を手札に加える。そして、二枚目の『融合』を発動！」

今度はイダテンとターレット・ウオリアーがぐるぐる混ざりあう。

「融合召喚！レベル12『霸道星シユラ』！」

霸道星シユラ ATK0 ☆12

もちろんハングリーバーガーは二体ともいる。

「このタイミングで『融合』を二枚も抱えていただと!?!」

はつきり言ってちよつとヤバかった。

「バトルフェイズに効果発動。相手モンスター全ての攻撃力を、0にする！」

No. 25 重装光学撮影機フォーカス・フォース ATK2800↓0

「そして、墓地の『スキル・サクセサー』を除外して、シユラの攻撃力を800ポイントアップさせる！」

霸道星シユラ ATK0↓800

「さあ、決闘終了だ！シユラでフォーカス・フォースを攻撃して、効果発動。レベル×200ポイントアップだ！」

覇道星シユラ ATK800↓3200

シユラの肩の上にいるハングリーバーガーが、巨大な円盤肉を同時にフォーカス・フォーカスに叩きこむ。

吉野&昴 LP2650↓0

勝者、恵遊&理央

「なんていうか……すごいデュエルだったな」

昇平はそうつぶやいた

恵遊は相変わらずで、ワイトキングはちよつとユーモアにあふれすぎで、昴は痛々しい。

理央が普通に見えるという現状だ。

妹があれなので少々珍しい感じがする。

「まあとにかく、これで恵遊も、今のエキセントリック・テンスのことをわかったわけだ。これからも研鑽しよう」

剛毅の言う通りだ。

もうすぐ始まる学園対抗戦。

そこでおそらく、界人も来る。

恵遊としても、強くならなければならない。



「ふむ、私は『アルカナフォーエックスXII―THE WORLD』で、ダイレクトアタックだ」

白いスタジオアム。

界人の命令を受けたアルカナのラストナンバーは、その命令を執行する。

放出された光線は、ステージの反対側に立つデュエリストに直撃し、そのライフを消し飛ばした。

「これで、私も学園對抗戦に参加できるだろうね」

デュエルは終わった。

デュエルディスクを待機状態にして、すべてのカードをデッキに戻しながら、界人はステージを去っていく。

「さて、惠遊。一波乱あるかもしれないが、良い戦いにしようじゃないか」

余裕がありながらも、獰猛な笑みを浮かべる界人。

その顔は、久しぶりに会って確認した好敵手を思いだしていた。

第十六話

エキセントリック・テンスの全員と知りあつて、それぞれの特徴を把握した恵遊。

青芝恵遊　　【ハングリーバーガー】

神代美咲　　【青眼の白龍】

久我昇平　　【方界】

猪八重銀二　【エルフの剣士】

神楽真司　　【ロリシスターズ】

西条剛毅　　【ギャラクシー】

P B　　【ピーピングハンデス】

菊地昂　　【プラネット・フォーカス】

聖野理央　　【レッド・デーモンズ・ドラゴン】

天塚吉野　　【ワイト】

という感じになるだろう。

すごく特徴的だが、実力は確かだ。

何かと面倒なことになる可能性が高いが……大丈夫なのだろうか。これは。

とはいえ、今更どうにかできるものではない。

ボーダーの学生は、『多分これから、ボーダーは変態の巣窟として続いて行くんだろうな』と諦め始めていた。

★

「辻デュエル事件？」

「うん。ボーダー周辺でいろいろあるみたいだよ」

茜から話を聞いている恵遊。

「どうやら、そういう事件が発生しているようだ。」

「辻デュエルが起こっている……というのはいいが、負けるとどうなるんだ？」

「意識不明になってるって私は聞いてるよ。ただ、ダメージが実体化したとかそういう話じゃなくて、外傷がないみたい」

茜からの情報を聞いて考える恵遊。

「恵遊君は何か知ってる？」

「いや、分かんらん」

一瞬、精霊力のことなのかと恵遊は思った。

デュエルモンスターズのオカルト要素にかかわっている粒子であり、機密事項ではあるが、デュエルディスクのソリッドビジョンシステムにもかかわっていると父さんが

言っていた。

だが、精霊力はそもそも、急激に減ったとしても身体に影響が出ないのだ。

(抜き取られているものがないとすると……何かを埋め込まれている可能性があるが……)

結局のところ、分からないということである。

「そういえば、最近欠席している生徒が多いような気がしたが……」

「うん。その被害者が多いんだよ」

「それなりに被害件数が多いみたいだな……組織的なものか」

「私もそう思ってたところだよ。だから、若干警備が厳しくなってるみたい」

チラツと窓の外を見ると、確かに、警備員が増えている。

「一応気を付けるか」

「惠遊君はハンバーガーがあったら罨ごと踏み抜いてでも進むからね……」

ちなみに今も食べながら話している。

惠遊は咀嚼しながらでも普通に喋れるのだ。すごいことだが行儀が悪い。

さすが、ボーダーの中でも五指に入る変態である。

「エキセントリック・テンスの中でも被害が出る可能性もあるからなあ……気に掛けるくらいはしておくか」



恵遊は放課後、新発売のハンバーガーを買いに行っていた。

……人を話を覚えていないのだろうか。この男。

「美咲にも電話くらいはしておくか」

電車を降りた恵遊だが、ぶっちゃけそれなりに店まで距離がある。

暇つぶしと言うわけではないが、連絡しておこう。

「美咲」

『お兄ちゃん。どうしたのですか？』

「いや、辻デュエルの影響で意識不明になってるやつが多いみたいだからな」

『辻デュエル……あ、はい。そうですね。私も気に掛けておきます』

……？

美咲の言い分は、なんというか、今知ったような感じだ。

「美咲。今、知ったのか？」

『はい。確かにネット上ではそう書かれていますから、それを確認しました』

「そうか。まあいいけど、気を付けろよ」

『問題はありませんよ。朱里もいますから』

「どういこと？」

『フッフ。神代家の長女である私の側近ですからね。朱里はボディーガードとして訓練を積んでいるのですよ』

……。

ちよつと前に死ぬほどビビっていたような気が……。

『オニイサマ。ナニヲカンガエテイルノデスカ?』

「いや、なんでもない。まあ、用心するに越したことはないから気を付けろよ」

そういつて、惠遊は通話を終了した。

どこからどう見ても逃げている。

「……ボディーガードとかいるのか?」

オベリスクを思いだして青い顔になる惠遊。

すつかりトラウマである。

とはいえ、店についても事実だ。

「さて、新商品が出るって話だったが、どんなものなのかはお楽しみだったからな。楽しみだ」

そういつて店に入る惠遊。

「客が少ないんだな……」

かなりガラツとしている。

テーブル席に一人の男が座っているだけだった。

その男がこちらを向く。

そして、驚いたような表情をした。

「まさか。本当にかかるとは……」

「え？」

男が指をパチンと鳴らすと、いきなりシャツターが下りた。

出入り口の向こうでおろされているため、例え自動ドアが開いたとしても意味はない。

「何!？」

「残念だが、ここで貴様を倒させてもらうぞ。青芝恵遊」

「へえ。俺のことを御存知か」

「エキセントリック・テンス序列一位。と言う点もそうだが、貴様を倒せば、膨大な量の精霊力を手に入れることが出来るからな」

膨大な精霊力を狙ってきた。

と言うことは……。

「……シークレット・アライアンスか」

「その通り」

男はデュエルディスクを構える。
すると、見た目が変わり始める。

普通の中年男性だったのに、紫色の体の悪魔のようなものになる。

ところどころ機械的なものになっているため、サイボーグ的な何かを感じる。

「な……何だお前は」

「シークレット・アライアンス序列五位。サーガ。さあ、デュエルだ。私を倒さない限り、貴様はここから出ることはできない！」

「……一応聞いておく。最近発生中の辻デュエルは、お前たちか？」

「そうだ。と言ったら？」

「お前が作戦のトップなのかどうかは知らんが、こっちは学園對抗戦の準備で忙しいんだ。片づけさせてもらおうか！」

惠遊もデュエルディスクを構える。

お互いのカードを五枚引いた。

「デュエル！」

惠遊 LP4000

サーガ LP4000

「先攻は私だ。まず手札から『名推理』を発動。さあ、レベルを宣言するといいい」

先攻の一ターン目に『名推理』

恵遊はそのカードの存在に、界人の姿を幻視したが、アイツほどの理不尽な戦術を持つデュエリストはいない。

ならば、ここは王道に乗ったものがいいだろう。

要するに、1か4か8だ。

多くのデッキに投入できることを前提とするならば、そのあたりのレベルのモンスターが該当するだろう。

無論、何を宣告されてもあまり関係のない「インフェルノイド」のようなカードの可能性もあるが。

「4だ」

「いいだろう」

サーガはカードをめくっていく。

『安全地帯』『メタル・リフレクト・スライム』『闇次元の解放』

そして……『暗黒の召喚神』

「暗黒の召喚神……まさか、三幻魔」

「その通りだ。レベル5のモンスターのため、召喚神を特殊召喚する」

暗黒の召喚神 ATK0 ☆5

「そして暗黒神をリリース。現れる。『神炎皇ウリア』」

神炎皇ウリア ATK0↓3000 ☆10

「私は『失楽園』を発動し、カードを二枚ドロ。ふむ、一枚セットしてターンエンドだ」
「俺のターン。ドロ！」

驚いたが、別に致命的な部分はまだない。

「俺は『ジャンク・フォアード』を特殊召喚して、『カードガンナー』を召喚、デッキからカードを三枚墓地に送って攻撃力を上げる。二体でダンテをエクシーズ召喚して、さらに墓地肥しだ」

彼岸の旅人 ダンテ DFE2500 ★3

ここまではいつも通りの恵遊の潤滑油だ。

「『儀式の下準備』を発動して、バーガーセットを手札に加える。そして、レシピを発動。手札の『サクリボー』と、墓地のプレサイダー。ディザーズを素材に、『ハングリーバーガー』を儀式召喚！サクリボーの効果で一枚ドロして、『最強の盾』を装備する！」

ハングリーバーガー ATK2000↓3850 ☆6

降臨するバーガー。

『お、今度は幻魔か』と言った表情でウリアを見ている。

「フフフ。相変わらず、ふざけた攻撃力だ」

「幻魔使いのお前がそれを言うのか……バトルフェイズ！ハングリーバーガーで、ウリアを攻撃！」

「罨カード『和睦の使者』を発動。これで、私のウリアは破壊されない」

「……ターンエンドだ」

おそらく、戦闘と言う意味では無事だと思われる。

幻魔は実際問題、出すのが面倒なモンスターだ。

全てを使っているのかどうかがいまいちよく分からないのだが、視えたカードの中には『暗黒の召喚神』をどうにかして出すギミックが入っている。

あのカードのデメリットを考えると、いろいろと可能性は高い。

「フッフ……私のターン。ドロロー……さらに『失樂園』の効果で、カードを二枚ドロウする」
ただ、この『失樂園』が面倒と言えば面倒なのだが……。

「私は『おろかな埋葬』を発動して、『ヘルウェイ・パトロール』を墓地に送り、除外すること、二体目の『暗黒の召喚神』を特殊召喚する。リリースし降臨せよ。『降雷皇ハモン』！」

降雷皇ハモン DFE4000 ☆10

(……守備表示?)

確かに、他のモンスターを守る効果があることは知っている。

『失楽園』はすべての幻魔に適用されるので、それらを考えると強固なものだ。だが、何かが薄い。

「さらに、墓地の召喚神の効果。このカードを除外して、デッキから『幻魔皇ラビエル』を手札に加える」

「ラビエル……！まだ、召喚権が……」

「その通りだ。私は『幻銃士』を召喚してトークンを生成、そして、悪魔族モンスターを三体リリース。現れる。『幻魔皇ラビエル』！」

幻魔皇ラビエル ATK4000 ☆10

「……こんな簡単に三幻魔が……」

「だが、召喚神の効果で攻撃はできない。私はカードを二枚セット、ターンエンドだ。いろいろな向こうがそろって来ているな……」

「俺のターン。ドロー！」

「スタンバイフェイズ、『サンダー・ブレイク』を発動。手札の『グラヴィティ・バインドー超重力の網』を捨てて、ダンテを破壊する！」

消し飛ぶダンテ。

神炎皇ウリア ATK3000↓4000

そして上がるウリアの攻撃力。

なかなか悪いし、しつかりと覚えている。

ディザーズを素材にしたハングリーバーガーは、罠の効果を受けない。

サンダー・ブレイクをハングリーバーガーに使っていたら何も影響はなかったのだが、そんなことはなかった。

三幻魔は現在、失楽園に寄る耐性を持ち、そもそもハモンにしか攻撃できない状態だ。

『『ADチェンジャー』を墓地から除外して、ハモンを攻撃表示に変更!』

降雷皇ハモン DFE4000↓ATK4000

ハモンを攻撃表示に変更すれば問題はない。

さらに言えば、ADチェンジャーの効果は対象に取らないのだ。

「そして、『捕食植物サンデウ・キンジー』を召喚!」

捕食植物サンデウ・キンジー ATK600 ☆2

「サンデウ・キンジー……なるほど、そう言うことか」

「そういうことだ。俺はサンデウ・キンジーの効果で、このカードとハングリーバーガーを素材に、融合召喚! 『捕食植物キメラフレッシュ!』」

捕食植物キメラフレッシュ ATK2500 ☆7

攻撃力4500以下であれば容赦なく殴り倒す魅惑の花。

『失楽園』の影響を受けた幻魔であろうと、このモンスターなら怖くない。

「バトル！キメラフレシアで、ハモンを攻撃！そして攻撃宣言時、キメラフレシアの効果発動！……な、なんで、キメラフレシアが攻撃しないんだ……」

キメラフレシアは、恵遊我命令しても、何も反応しない。

「残念だが、私は『威嚇する咆哮』をバトルフェイズに入った時点で発動していた。攻撃宣言は、行え無いのだよ」

「カードをセットして、ターンエンドだ」

カードをセットしたとしても、スタンバイフェイズでも発動できるようなフリーチェインのカードでなければウリアに破壊されてしまう。

ので……。

「私のターン。ドロロー！」

「スタンバイフェイズ。『針虫の巣窟』を発動！デツキから五枚を墓地に送る！」

「構わん。『失楽園』の効果で、さらに二枚ドロロー。『禁じられた聖杯』を発動、対象はキメラフレシアだ！」

捕食植物キメラフレシア ATK2500↓2900

「バトルフェイズだ！ウリア、ハモン、ラビエル、攻撃しろ！」

「チツ……」

恵遊は墓地から、三枚のカードを除外する。

ウリアの攻撃を『ネクロ・ガードナー』が。

ハモンの攻撃を『タスケルトン』が。

ラビエルの攻撃を『SR三つ目のダイス』が。

全て、相手の攻撃を止めるカードだ。

しかし、確実に限界が来る。

「なかなかしぶといな。私はカードを二枚セットして、ターンエンドだ」

捕食植物キメラフレシア ATK2900↓2500

「俺のターン。ドローー！」

恵遊はドローしたカードを見る。

そして、愕然とした。

恵遊の手札は二枚。

だが、この状況を打破する手段を、有してはいなかった。

「ば……バカな。こんなこと、今までなかったのに……」

「『手札事故』と言うわけではなく、単純に『力不足』といった状況でしょうね」

サーガは笑う。

「今のあなたは、あのブープの精霊力のすべてをとりこんでいる状態」

「そうだ。あの精霊力は、俺の糧になった。俺が『ハングリーバーガー』を中心とした

デッキを組んでいる限り、パワー不足なんてことは……」

「それは間違いですよ」

「え？」

恵遊は驚いた。

「あなたはブープの精霊力を糧にしました。あいつが持っていた力を、デュエルと言う儀式の中で調理し、体内に取り込むことで奪ったあなたには脱帽ですよ……ですが、それによって、あなたはとある特性を無視できなくなりました」

「何？」

「ブープの精霊力を得たあなたは、その力の特性に支配されるしかない。私が持つ力は、ブープに対して好相性なのですよ」

「何？」

「まあ力と言っても、力と言う名の『波長』のようなものですがね」

クツクツクと笑うサーガ。

「さて、どうします？」

「俺は……カードを一枚セットして、キメラフレシアを守備表示にして、ターンエンドだ」

捕食植物キメラフレシア ATK2500↓DFE2000

「私のターン。ドロロー！」

「この瞬間、『ダメージ・ダイエット』を発動。俺が受けるダメージを、このターン全て半分にする！」

「なるほど……まあいいでしょう。『失樂園』で二枚ドロローします……フフフ。私は三体の幻魔を除外！」

サーガの宣言と共に、三体の幻魔が交わる。

「まさか……」

「その通り。降臨せよ『混沌幻魔アーミタイル』！」

混沌幻魔アーミタイル ATK0↓10000 ☆12

「……このタイミングでアーミタイルを……」

「魔法カード『守備』封じ』を発動。さあ、攻撃表示してもらいましょうか」

「しまっ——」

捕食植物キメラフレシア DFE2000↓ATK2500

「さらに、1000ポイントのライフをはらい『ソウルドレイン』を発動！」

サーガ LP4000↓3000

「ソウルドレインだ?!？」

「アーミタイルで、キメラフレシアを攻撃！」

「キメラフレッシュアの効果発動！」

捕食植物キメラフレッシュア ATK 2500 ↓ 3500

混沌幻魔アーミタイル ATK 10000 ↓ 9000

「その程度、減った内に入りませんよ！」

キメラフレッシュアが破壊される。

恵遊 LP 4000 ↓ 1250

恵遊は衝撃で吹き飛ばされて、シャッターに激突した。

「グッ……」

「ダメージ・ダイエツトが効いていますねえ。まあいいでしょう。私はカードを二枚

セットしてターンエンドですよ」

混沌幻魔アーミタイル ATK 9000 ↓ 0

「俺のターンだ……」

そういつてデツキトップに触る恵遊。

「ド……口……」

アーミタイルが保持する精霊力。

それは、数値としてのライフポイント以上に、恵遊の精霊力にダメージを与えた。

さらに言えば、恵遊は現状、ブープの精霊力をとりこんだことで、本来の人間よりも、

体を構成する精霊力の比率が高くなっている。

精霊力に対する影響。

それは、恵遊の意識を消滅させるのには、十分だった。

糸の切れた人形のように、床に倒れる恵遊。

「フフフ。フハハハハハハハハ！デュエル前から、こうなることは分かっていましたよ。

ブープの力がある故に、私が勝つとね！」

高笑いするサーガ。

「デュエルが続行不可となったことで、あなたの負けですよ。青芝恵遊！」

そう宣告した。

デュエルディスクも、そう宣告しようとした。

しかし……。

このとき……。

ハングリーバーガーが、ある『許可』を出した。

「やれやれ、なんで僕がマスターの尻拭いをするハメに……」

倒れたはずの恵遊が、何事もなかったかのようにおきだした。

サーガは驚愕する。

「ば、バカな。アーミタイトルの攻撃を受けて、ブープの精霊力をとりこんだお前が立つて

いられるはずがない。本来ならば、命すらも消し飛ばす一撃だぞ！」

「あ、殺す気満々だったの？まあ、別にそれはいいさ」

起き上がり、自分の状態を確認する恵遊。

いつからか、彼の青いメッシュは、紫色になっていた。

「僕のターンだ。ドロロー！ふむ、『貪欲な壺』を使って、ジャンク・フォアード、カードガンナー、ダンテ、サンデウ・キンジー、キメラフレシアをデッキに戻して二枚ドロロー。あと『強欲で貪欲な壺』も使っておこう。あ、これは勝ったね」

「な……ふざけるな！永続罠『宮廷のしきたり』『スピリットバリア』を発動。アーミタイルは確かに、貴様のターンでは攻撃力が0になるが、これで私は——」

「いや、僕にはあまり関係のない話だよ」

「は？」

理解できない状況になったことで焦り始めたサーガに対して、何ともなさそうに話す恵遊。

「僕は『カードガンナー』を召喚。効果でデッキトップ三枚を墓地に送ろう」

カードガンナー ATK400↓1900

今までと変わらない。

そんな恵遊のデュエルに、サーガは困惑する。

「どういふことだ?」

「さらに『至高の木の実』を使って2000回復だ」

恵遊 LP1250↓3250

「そして、『契約の履行』を発動しよう。戻ってくるんだ。『ハングリーバーガー』

恵遊 LP3250↓2450

ハングリーバーガー ATK2000 ☆6

「な、なんだ、そんなカードを出したところで、意味などないぞ!」

「これを見てもまだそんなことが言えるかな?僕はライフを2000払って、『レジエンド・オブ・ハート』を発動!」

「なんだと!」

恵遊 LP2450↓450

発動とともにハングリーバーガーも消えていく。

「そして、カードガンナーで落とした三枚の魔法カードを除外。デッキから、この三体を

特殊召喚するよ」

伝説の騎士 クリテイウス ATK2800 ☆8

伝説の騎士 テイマイオス ATK2800 ☆8

伝説の騎士 ヘルモス ATK2800 ☆8

「馬鹿な。伝説の騎士だど!？」

「三体の効果発動。君のフィールドの『失樂園』『スピリットバリア』『宮廷のしきたり』を除外する」

伝説の騎士たちが走っていき、それぞれのカードを切り裂いた。

「ば、馬鹿な……」

「ま、こんなものだよ。僕は伝説の騎士たちで、アーミタイルを攻撃。戦闘破壊はできなくても、ダメージは受けてもらおう」

「う、うあああああああー!」

サーガ LP3000↓200↓0

サーガはライフが消し飛ぶ。

だが、別にブープのように奪ったわけではない。

彼はまだ、彼のままだ。

「ま、まさか、この私が……」

「君の着眼点はいいんだけどね。僕のマスターのデッキは、良くも悪くも精霊力に頼りすぎた。ブープを相手にする以上、仕方のないことではあるけどね。その精霊力を狙った君の作戦は悪くない。でも、意味はないよ」

「お、お前はいつたい何者なのだ」

「僕かい？僕は青芝恵遊というデュエリストの、『融合召喚の才能そのもの』だ。まあ詳しい話は今は置いておこう」

シャツターが上がっている。

ここから出られるのだ。

「君としゃべるのも悪くはないかもしれないが、デュエルが終了した時点で、僕が活動できる時間は長くない。帰らせてもらおう」

「ま、待て……」

「それは無理な相談だね」

恵遊はその場を離れていった。

最後に残ったサーガは、オーバーキルをかました伝説の騎士の影響もあったのか、意識を失った。

第十七話

「……あれ？」

惠遊は起きて驚いた。

学生寮の自分の部屋。

それだけならば何も問題はない。

しかし、あの時惠遊は、デュエルをしていたはずだ。

その結末がわからない。

「……誰かが俺を運んだのか？少なくとも、自分の足で帰ってきたわけではないみたいだな」

周りを見て確信する惠遊。

そしてそれに気が付いた理由だが……。

「ハンバーガー。買いに行くか」

そう、ハンバーガーを調達せずに部屋に帰ってくるわけがないのだ。

そのため、部屋にハンバーガーがないことを察した時点で、惠遊はそれに気が付くのだ。

末期症状なのだ。これが惠遊の正常である。

★

「辻デュエルも件数はかなり減ったね」

「みたいだな」

放課後。ハンバーガーを食べながら茜と話す惠遊。

確かに、茜の言うとおりだろう。特に何か起こっている様子はなかったし、学校にも欠席者はいなくなった。

辻デュエルに関しては収まったのは間違いない。

「そういえば、首謀者はまだ見つかっていないみたいだよ」

「そうなのか？」

惠遊はうつすらの脳裏をよぎるサーガの姿を思い浮かべるが、しっかり思い出せない。

「惠遊君は何か知ってる？」

「いや、俺もよくわからん」

いずれにせよ確定したことはない。

それに、またあいつとは戦うことになるだろう。

その時にどうにかすればいい。

(どうやって勝ったのかわからない。いや……俺は勝てるのか?)

惠遊はあのデュエルで、負けていたことしかわからない。

最後に引けたカードがなんだったのかわからない。

伏せカードまで用意していたサーガを突破できたのか、わからない。

わからないのだ。

「……惠遊君？」

「え？」

「ボーつとしてたよ。ハンバーガー食べながら」

「あ。そうか。悪いな」

「私思っただけどき」

「なんだ？」

「なんでボーつとしてるときもハンバーガー食べれるの？」

「本能だ」

「……………」

「……………」

「そうなんだ」

「ああ」

すごく長い沈黙があつたが、とりあえずそれは二人ともおいておくことにした。
「んっ。」

着信音が聞こえる。

恵遊のスマホからだ。

「ちよつとすまん」

「あ、うん。いいけど」

恵遊はスマホを耳に当てる。

「はいもしもし」

『私だ』

「なんだ界人か」

『なんだとはなんだ。まあいいとしよう。私は今気分がいい』

「……それだけで俺に何かを察しろというのか？」

『いや、それだけが言いたかつただけだ。それではまた』

通話終了。

「どうだったの？」

「界人からだつたんだが……さっぱりわからん」

不思議な奴だつたが、ついに薬でもキめたのだろうか。

首をかしげる恵遊だった。

★

「ふむ、なかなか爽快な眺めだ」

「界人様。さすがにこの数のデュエリストはまずいと思いますが……」

デュエルスクール・エクソダス。

ボーダー以上に名家出身のものが少なく、それでいて実力主義の校風が強くなっている。

ちなみに、割合で『エリア』と選定し、数字的な序列を設定していないボーダーだが、エクソダスではすべての生徒が序列としての数字を持っている。

さらに言えば、どこか校舎も重い雰囲気を感じさせるものだ。

それもそのはず、エクソダスは、『監獄』を改造してデュエルスクールにした経緯がある。

正門の前に立つ彼ら二人の前には、何百人といえるほどのデュエリストがいた。

中には金属バットや角材といった、ヤが付きそうな者たちもいるのだが、まあそれはいいでしょう。

「おいおい、お前たち二人で俺らの相手をしようっていうのか？」

「ふむ……いや、私だけで君たちの相手をしよう」

一歩進み出て、界人はそういった。

チンピラたちはそれだけで眉間にしわを立てているが、界人は気にしていない。

「まあいいじゃねえか。なら、貴様からぶっ潰してやるよ！」

「いいだろう」

界人はデュエルディスクを構える。

すると、チンピラのデュエルディスクからアンカーが出てきた。

「界人様！」

後ろから女子生徒が叫ぶが、肝心の界人は気にしていないようだ。

「三春^{みはる}。安心してそこで待っているといい。第一、ここに来るまでに見た葉月と常葉の

二人を思い出すんだ。二人とも、小学校からのクラスメイトである私のことを全く心配していなかっただろう」

界人のそばにいる女子生徒は周防三春^{すおうみはる}。

もともと白いエクソダスの制服を改造してなんとメイド服にしている女子生徒だ。

知的な印象があり、黒い髪を腰まで伸ばしている。

メイド服に包まれた体も女性らしさのあふれるもので、胸は大きい。まあ、大きすぎるということもないが。

ただし、腰は括れているし、尻も育った魅力がある。

「そ、それはそうですが」

「まったく、あの姉妹。私がいるからとこういった襲撃には自分の出番がないとばかりに余裕だからね。まあその通りなのだが」

界人はチンピラのほうを見る。

「さて、はじめようか」

「クッククック。お前をぶつ潰して、横にいるその女で遊んでやるよ」

「やれるものならやってみるといい。まあ、序列一位である私を倒すことができれば、序列最下位である彼女を抑えることは呼吸するより簡単だろうね。まあそれはいいとして……」

からからとわらって、目を閉じる界人。

そして、瞳を開く。

「処刑開始だ」

「——！」

誰が見てもわかるほど『ビビった』チンピラの男。

「どうしたんだい？まさか、私が少しやる気になった程度で戦意喪失とか、そういったつまらないことは勘弁してくれよ？」

「うるせえ！ぶつ潰してやる！」

「デュエル！」

界人 LP4000

E1 LP4000

「む？なんだこの表記は」

「クツクツク。お前言ったよな。お前ひとりで俺たち全員と相手するってよ」

「確かに言ったね……ああ。要するに、Eというのは『エネミー敵』という意味で、君はその一人目ということか」

「その通りだ！俺が倒されたとしても、ターンが終了する前に二人目が出てくるぜ。あと、サレンダーは不可だ」

「なるほど、一人を倒したとしてもデュエルそのものが終了するわけではない。さらに言えば、これほどの人数が相手だと、もし倒し続けることができたとしても、デツキのほうを持たない。ということか」

「そういうことだ！まあもともと、俺たち全員を倒すなんてことは不可能だけだな」

※言い換えるなら5Dsの『WRGP』のような引継ぎルールです。

「界人様……」

不安そうな三春。

だが、界人は特に気にした様子はない。

「ふむ、私のデュエルディスクにランプがついているところを見ると、私が先攻のようだね」

「クツクツク……要するに、てめえは次のターンからなぶり殺しにされるってことだ！」
 「元氣だねえ……まあ、私の先攻でいいというのならはじめさせてもらおう」

界人が使うのは、一枚の魔法カード。

「私は『名推理』を使おう。さあ、レベルを宣言するといいい」

「なら、俺は4を宣言するぜ」

「なるほど、僕のデツキを知らないわけだ。僕は『ライトロード・ビースト ウォルフ』
 二体を墓地に送るとともに、『アルカナフォースXXIーTHE WORLD』を特殊召喚しよう。当然、ウォルフたちもフィールドに特殊召喚だ」

アルカナフォースXXIーTHE WORLD ATK3100 ☆8

ライトロード・ビースト ウォルフ ATK2100 ☆4

ライトロード・ビースト ウォルフ ATK2100 ☆4

「な、なんだと……」

「WORLDの効果により、コイントスを行う。が、当然正位置だ」

WORLDのカードが界人の頭上に出現するとともに回転し始めるが、表で止まった。

「ま……まさか……」

「何人で挑んで来ようと、一人ずつ来るといふのなら問題などない。私は『ドラゴノイド・ジェネレーター』を発動しよう。トークン二体を特殊召喚する」

界人 LP4000↓3000

ドラゴノイドトークン ATK300 ☆1

ドラゴノイドトークン ATK300 ☆1

「さて、私はカードを一枚セットしてターンエンドだが、君のフィールドにトークンを二体特殊召喚して、私のフィールドのトークン二体をリリースすることで、君のターンをスキップする」

ドラゴノイドトークン ATK300 ☆1

ドラゴノイドトークン ATK300 ☆1

「ば、馬鹿な……」

「ふむ、ここまで何もしないということ、君は手札誘発を握っていないということか」
界人は納得したようにうなづく。

「そして私のターン。ドロ」

「なるほどな。俺はここで終わりか。だが、俺らの中には手札誘発カードをデッキに盛り込んでいる奴もいる。俺たちは、カードを引き継げる。いくらおまえでも……」

「永続罨『メンタルドレイン』を発動しよう」

界人 LP30000↓2000

チンピラから表情が消えた。

「うそ……だろ……」

「残念ながら、嘘ではない。ジエネレーターを使おうか」

ドラゴノイドトークン ATK300 ☆1

ドラゴノイドトークン ATK300 ☆1

「そして、ウォルフ二体で君のフィールドに出しておいたトークンを攻撃し、さらに、WORLDでダイレクトアタック」

「う、うああああああああ！」

E1 LP40000↓22000↓4000↓0

トークンなどほぼ無視。

ウォルフに殴られ、そしてWORLDが放出した閃光で焼かれる。

そうして、彼は散って行った。

「さて、強制的にエンドフェイズになり、交代するという話だったね。次のデュエリストは出てくるといい」

すると、その次のデュエリストであろう男の上に矢印が出現する。

「ふむ、君になるのか」

「ふ、ふざけんな！こんなデュエルやってられるか！」

その男は背を向けて帰って行く。

「三春。連れてきなさい」

「はい」

三春が走っていく男を子ども扱いできる速度で走り抜けると、そのまま脇腹に一発手刀を叩き込んで、抱えて界人の前に運んでいく。

「さて、次は君か。なら、再度デュエルになるね」

界人 LP2000

E2 LP4000

「い、いやだ……た、助けてくれ！」

「いやだね。それと、私は最初に言ったはずだよ。『処刑開始』とね。それと彼が言っていたじゃないか。サレンダーは不可だと。当然、途中棄権だって私は認めないよ」

「ぐ……だが、貴様のデッキが持つはずが……」

「まあ、それに関しては置いておこう。この瞬間にエンドフェイズになるとのことだったね。君のフィールドにトークンを二体特殊召喚だ。そして、WORLDの効果で私はトークン二体をリリースして、君のターンをスキップする」

ドラゴノイドトークン ATK300 ☆1

ドラゴノイドトークン ATK300 ☆1

「ぐ……」

界人は微笑む。

「フフ。せめてデュエリストなら、手札のカードとしてカードを五枚引くくらいはしてもいいだろうね。まあ、そうしたところで結果は変わらないが、せめて引いておくとい

い」

男がデッキのカードを五枚引く。

「とはいえ、手札誘発はすべて発動不可であり、さらに言えば、君のターンが回ってくることはないのだがね」

「ぐ……クソオオオオオオオ！」

「私のターンだ。ドロ。トークンを特殊召喚。さあ、行くんだ」

ドラゴノイドトークン ATK300 ☆1

ドラゴノイドトークン ATK300 ☆1

界人の命令を受けて、ウォルフたちとWORLDが動きだす。

E2 LP4000↓2200↓400↓0

「さて、二人目がもう終わってしまった。次のデュエリストは出てくるといい」

その宣言に、三人目のデュエリストが選出される。

「次は君か。ああ、ちなみに言っておくと、私のデッキがなくなることはないよ。『貪欲な瓶』を三枚入れているし、他にもデッキ枚数を回復できるカードは入っているからね」

その宣言に、デュエリストたちが絶望する。

「さて、処刑を続けようか」

デュエルスクール・エクソダス。

黄昏界人というデュエリストが作り出した処刑場。

その正門前から悲鳴が聞こえなくなるまで、長い時間がかかったそうだ。

第十八話

「ふああ……結構楽勝だったね」

「ドローカード連発して騎士たちでぼこぼこにしたただけだろお前」

「まあ、私はそれでもいいと思うが……」

とある空間。

どんな場所なのか、と言われても説明が難しいので何があるかを説明しよう。

① 草原

② 青空

③ 大樹

まあこんな感じの空間だ。

そこに、四つの意思を持つ存在が話している。

あくびをしているのは、言ってしまうと『合神竜ティマイオス』だろう。顔は某相棒ではなく恵遊だ。

メッシュも紫色で、一瞬だけでてきたときの容姿である。

白い光に包まれた存在は、形が整っているのに、大事なピースが欠けたような水晶。

黒い光に包まれているのは、ピースはそろっていているが、エネルギーが足りていないよ
うだ。

「……」

黙り込んでいるのは、フードをかぶった少年。

まだ幼い容姿で、身長も低く、顔を隠している。

ただ、その奥に、青いメッシュがちらりとみえている。

「で、黙り込んでいるけど、君はどう思うんだい？」

「……僕は、学園対抗戦が始まるまでに、僕ら四人が全員、とりあえず完成しておくべき
だと思う」

ティマイオスにこたえるのは、声変わりしていない高い声。

「フーン！我は、我に匹敵する存在のカードがなければ憑代にはせんぞ！」

「私はすでに決めてているが……まだエネルギーが足りないな……」

「……こんな事情だけど、大丈夫なのかな」

ティマイオスは苦笑いになった。

そしてそんなティマイオスを、フードの少年が見つめる。

「どうかしたのかい？」

「……ティマイオスって長いから、ティオスでいい？」

「構わないけど……長いかな」

「うん」

少しの間沈黙が流れる。

「まあ、うん。わかった。僕のことはティオスと呼ぶといい。僕も、これからはそう名乗るとしよう」

器が広いというより、これ以上話しても面倒だと思っただろうか。

ティオスは、なんだかんだと受け入れるのだった。

★

ボーダーとエクソダスを襲ったシークレット・アライアンス。

作戦を考えていた隊長はボーダーで倒され、エクソダスに向かったアウトローたちは処刑人のもとで断罪された。

二つのデュエルスクールにかかわる事件ではあったが、解決したかどうかはともかく、区切りがついたのは事実だろう。

「特に何もなかったみたいにな通りになったね」

「まあ、たぶんすぐにそうなるとは思っていたけどな」

ボーダーのほうは、まだ予測は不可能。

だが、エクソダスには、界人がいる。

だからこそ、恵遊は心配などしなかった。

「もうそろそろ、学園対抗戦だな」

「そうだね。私も見るのは楽しみだよ」

「すごいデュエルばかりだからね」

恵遊は、興奮した様子の凜子と茜をみて、それほど興奮するものなのだろうかと思っ
た。

恵遊が学園対抗戦に臨むのは、ただ一つ。界人に勝つため。

青芝恵遊としてしかかなわない、『約束』の一つだ。

(……………?)

恵遊はふと、何か不思議なものを感じた。

興奮している様子の二人。

その興奮の質が、二人で異なるのだ。

(……………まあいいか)

ひとまず置いておくことにした。

「それにしても、何か不穏な空気が流れているよね。一段落ついたのに」

茜が外を見てそうつぶやいた。

「……………そうだな」

恵遊も感じ取っていた。

言葉では説明しにくいものだが、そういったものを感じる。

その時、思い出したように凜子が言った。

「最近、エキセントリック・テンスに対して護衛をつけるって意見もあるね」

「……それ、PBはどうするんだ？」

正体不明であるPBの護衛などどうやってつけるのだろうか……。

「アハハ……確かにそうだね」

茜がうなずく。

「それにしても護衛か……」

恵遊がどうにかする前に、神代家が動きそうだが。

「とにかく、気を付けないとね。この時期になると、いろんな人たちが動き出すから」

茜の言うとおりだろう。

表にしても裏にしても、動くものは多いはずだ。

(それにしても、シークレット・アライアンスか……)

どうしたものかと恵遊は思っていた。

ただ、考え事をしているときであつてもハンバーガーを食べる手が止まらないところを見ると、優先順位に変わりはないらしい。

★

いやな行動。というのはいろいろあるものだが、少なくとも隠れて動くのなら『夜』だ。

ボーダーは監視カメラも多く、よく凜子^{バカ}が連行されている。

だが、運がいいのか悪いのか、大した準備もないのに計画を進めることができる人間はいるものだ。

「よし、あとはこれを使って恵遊から精霊力を回収すれば、グフフフフ」

梶原樹。

少し前までエキセントリック・テンスにいたデュエリスト。

成績に関してはいいものではないといわれており、PBとのデュエルでエキセントリック・テンスの座を降りることになった。

それからの彼はゆがんだ。

もとより、実力というより親からもらったデツキで強くなっていたこともあり、モンスターの動かし方も親から言われた通りであり、『親の七光り』で生きていた人間。

親から教えられたタクティクスが解析される前に戦績を積み上げてエキセントリック・テンスになったが、そこからはとにかく負けないうためのデツキ構築を続けた結果、戦績は落ちていき、そしてあのPBとのデュエルでその権威はなくなつた。

あのデュエルを境に、梶原家の当主でありプロデュエリストでもある親からは見捨てられ、いないも同然の関係になってしまった。

そんな彼に近づいたのは、シークレット・アライアンス。

彼らは復讐心をたぎらせている樹の心にすべりこんだ。

簡単に要点だけまとめると、

・ 恵遊はシークレット・アライアンスから精霊力を奪った。（視点を変わると一応間違っていない）

・ シークレット・アライアンスの壮大な計画のためにはその精霊力が必要。

・ 恵遊のデュエルタクティクスは、精霊力に依存したもの。我々から奪ったもので強くなったに過ぎない。

・ 君が彼から奪い返すことで、彼の實力は盛大に落ちる。

・ そして、我々から与えた報酬で、君はエキセントリック・テンスに返り咲く。

とまあ、いまだ小学生でも信じないようなのだが、親の言うことだけを聞いて傲慢な態度だった彼には、納得できるだけの指示を出すことができるものがいれば簡単に乗っかるのだ。

ちなみに、気持ちの悪い笑い声を出している樹だが、その鼻の下は伸びている。

シークレット・アライアンスとどのような契約をしたのか、少なくとも頭のいい契約

ではないだろう。

報酬に関していえば、いい話があるようだ。

「これは回収。奪ったものを取り返す聖なる任務だ」

だったら堂々と正面から行けばいいだろうに。

「この機械には、奴が持つ精霊力に共鳴し、眠らせる効果がある。今頃ぐつすり眠っているだろう。あとはこれを使って……」

そういつて樹が取り出したのは『掃除機』であった。

……シークレット・アライアンスにも技術者はいるのだが、回収装置を作ったときになぜかこんな形になったのだ。

掃除機を構えて男の部屋に侵入するという図が何となく嫌だったので、簡単に引っかけりそうな樹に任せたといいわけである。別に誰でもよかつたけど。

「よし、鍵は空いているな」

大丈夫かセキュリティ。

……と言いたいところだが、精霊力と言うよく分からんエネルギーを使った技術を用いて向かって来ている連中だ。いくら電子世界をファイアウォール・ドラゴンが泳いでいるとはいえ、無理なものは無理である。

恵遊はぐつすり眠っているようだ。

相変わらずの青いメッシュもへなへなになっている……いや、関係ないか。

「あとは合言葉を声量大で言えば機械が動きだすわけだ。ボタンを押さず、音声認証と
言う、ドジを防ぐにはもってこいのシステム。完璧だ。実に良い作戦だ」

さっさとやれ。

「ではいくぞ」

掃除機を向ける。

「起動せよ！スピリット・エナジー・バキューーーーーーーム！」

「……なんていうんだろう。言われたことを言われた通りにするって、実はすごいこと
なんだって思えてきた……」

「……え？」

樹はポカンとした。

その視界には、とてもかわいそうなものを見るようで、何かさとしたような表情をし
た『紫色のメッシュの恵遊』がいた。

「……誰だお前は！」

「僕の名前はティオスだ。まあそうだね。その掃除機が気かない相手だということは確
かだよ」

「なら逃げる！」

言うが早いのか、樹はすぐさま逃走した。

「あ。こら、待ちなさい！」

テイオスはものすごく急いで寝間着から制服に着替えると、デュエルディスクを掴んで走りだした。

『おい、なにおいていかれてるんだ』

『まあ、私もあの頭の切り替え方には驚いたが……』

「いや、僕がみた限り、彼はマニュアル通りにするのが得意なタイプだ。ただ、そこに切り替わるのが早すぎる」

自らの意思が全く介在しない。

そう思えるほどに、樹の逃走までの時間は短かった。

「えーと、何処に行った？」

『Dホイールのエンジン音が聞こえる。多分、学園の外に向かってるね』

幼い声が聞こえてくる。

……というか、どうやって聞いているのだろうか。

「よし分かった！……あれ、恵遊ってライセンス持ってるよね」

『持っているぞ。我はしっかり確認しておいた。暇だったからな！』

そういうぶつちやけは良くない。

テイオスはDホイールにまたがって、エンジンをつける。

「精霊力は……向こう側だね」

発進させた。

はつきり言つて速度制限ギリギリだが、精霊力をたどっていつて追う。

十数秒後、高速道路に差し掛かった時、樹が見えた。

「よしー！」

Dホイールの通信モニターを起動する。

すると、走行中の樹のDホイールのモニターとつながった。

「追ってきたか」

「その通りだ。君が遭遇したシークレット・アライアンスの情報、それを聞かせてもらう

！」

「フン！話す義務はない……が、もし逃げきれそうにない場合、デュエルで撃退すること

も指示された。受けてやる」

そう言うと同時に、樹の体から『黒い精霊力』が溢れてくる。

『ブープが持っていた精霊力と似ているな』

『私が見る限り、サーガとも似ている』

『シークレット・アライアンスのベースになっているタイプなのかな。彼らほどの圧力

はないし』

三者三様。

ただ決まっているのは、デュエルするのはティオスだということだ。

高速道路に乗りこむ。

お互いにデュエルディスクを展開。

そして、カードを五枚引いた。

「ライディングデュエル。アクセラレーション！」

ティオス LP4000

樹 LP4000

「先攻は譲ってやろう」

樹が減速して後ろに下がってきた。

『……何を仕掛けて来るのかわからないな』

『ああ。彼に関しては情報が少ない』

『PBとデュエルした時、宣告と強食しかみなかったもんね』

そういうえばそうだった。

「僕は手札から、『クリティウスの牙』を発動。手札の『聖なるバリアー——ミラーフォース——』を墓地に送り、『ミラーフォース・ドラゴン』を特殊召喚！」

ミラーフオース・ドラゴン ATK2800 ☆8

「カードを一枚セット。ターンエンドだ」

「僕のターン。ドロー！」

樹がカードをドローして領いた。

「ミラーフオース・ドラゴン……確か、効果、攻撃の対象になった時、相手フィールドのカードを全て破壊する効果だったはず」

『聖なるバリアー——ミラーフオースー』と比べて格段に効果の範囲が広がっている。

無論、この対象範囲故に隙もあるのだが、ピンポイントで攻めるのは本来は難しい。

「僕は手札から、『太陽風帆船』を特殊召喚」

太陽風帆船 ATK800↓400 ☆5

少々意外なモンスターが飛んできた。

「手札を一枚捨てて、『クイック・シンクロン』を特殊召喚」

クイック・シンクロン ATK700 ☆5

「そして、このコストで墓地に捨てた『素早いアンコウ』の効果に寄り、デッキのアンコウを二体、特殊召喚する」

素早いアンコウ ATK600 ☆2

素早いアンコウ ATK600 ☆2

『む？ 我の予想より堅実な手だな』

『レベル7シンクロならドリル・ウオリアーだと私は推測するが……』

『ノヴァインフィニティ……いや、違うね。これ』

樹は天に手を伸ばす。

「僕は素早いアンコウ二体を、リンクマーカーにセット、『マスター・ボーイ』をリンク
召喚！」

マスター・ボーイ ATK1400↓1900 LINK2

『マスター・ボーイか……他にも候補はいろいろあると私は思うのだが』

『む？ 我はハリファイバーあたりが飛んでくると思っていたぞ』

『高かったんじゃない？ 値段』

そんなことを気にするタイプではないだろう。

あと、ティオスはすごく、うるさいと思った。

「そして、レベル5のチューナーである『クイック・シンクロン』と、レベル5モンスター
である『太陽風帆船』を墓地に送る！」

「そ……その召喚方法は……」

「現れる。『アルティマヤ・ツイオルキン』！」

アルティマヤ・ツイオルキン DFE0 ☆12

「え……」

『嘘だろ』

『な、なんで』

『この状況で、タクシーが……』

少年、それはダメだ。

ただ、あのモンスターは出せるカードが多すぎる。

警戒して損することはないだろう。

「僕はカードを一枚セット、そして紅き竜の効果。『月華竜 ブラック・ローズ』を特殊召喚！」

月華竜 ブラック・ローズ ATK2400 ☆7

「ぶ……ブラック・ローズ……」

ピンポイントで狙ってきやがった。

「効果を発動。ミラーフォース・ドラゴンには、エクストラデッキに戻ってもらう」

ミラーフォース・ドラゴンが消えて行く。

「そしてバトルフェイズ。ブラック・ローズでダイレクトアタック！」

「罫カード『ガード・ブロック』を発動。ダメージを0にして一枚ドロロー！」

ティオスはカードをドロローして、短く唸り声を上げた。

「マスター・ボーイでダイレクトアタック！」

ティオス LP4000↓2100

「ターンエンドだ」

「僕のターン。ドロロー！」

ティオスのターン。

手札は四枚。

「僕は『カードガンナー』を召喚！効果を使って墓地肥やしとパワーアップ！」

カードガンナー ATK400↓1900 ☆3

カードガンナーが出現。

リロードをすると同時に、『いやいや！Dホイール早すぎるって！』と言いたそうな雰
囲気で、全力でキヤタピラを動かし始めた。

そもそも、キヤタピラと言うのは不整地における安定走行のために開発された概念で
ある。

決して、舗装された高速道路で走り回るためには作っていない。

というかそもそも、一番早い戦車でも時速百キロは越えないのだ。八十キロくらい出
せるものも少数存在するので高速道路でもぎりぎり行けるけど。

「安心しろ。すぐに楽になる。もう少しの辛抱だ」

カードガンナーは『心配はいいから早くやれ!……え、楽になるってどういうこと!?』
 と言いたそうにしている。

「……ごめん。『リミッター解除』を発動!」

カードガンナー ATK1900↓3800

カードガンナーは『お前マジ後でぶつ飛ばすからな!』と言った感じでパワーを限界
 以上に引き出した。

「バトル!カードガンナーでブラック・ローズを攻撃!」

樹の目には同情の色があった。

樹 LP4000↓2600

「そして、メインフェイズ2だ。『儀式の下準備』を発動。デッキからバーガーセットを
 手札に加える。そして、レシピを発動。墓地のプレサイダー。クリボール。手札のサク
 リボーを素材に儀式召喚!『ハングリーバーガー!』!サクリボーの効果で一枚ドロ」

ハングリーバーガー DFE1850 ☆6

そして降臨するバーガー。

ちなみに恵遊のバーガーは必要に応じて宙を舞うので、カードガンナーのように忙し
 いことにはならない。

「そして、『補給部隊』を発動して、ターンエン——」

『『砂塵の大竜巻』を発動！』

「くっ……」

「補給部隊を破壊し、手札のカードをセット、紅き竜の効果で、『妖精竜 エンシエント』を特殊召喚」

妖精竜 エンシエント DFE3000 ☆7

『なんだか。普通に強いな』

『我も、あのように使いこなすとは想定外だった』

『ティオスがいいようにあしらわれてるね』

反論できない。

「ターンエンドだ。カードを一枚ドロウする」

カードガンナーが爆散した。

「僕のターン。ドロウ！」

樹はドロウしたカードを見て頷く。

「僕は『チキンレース』を発動」

「チツ……」

「エンシエントの効果で一枚ドロウ。そして、チキンレースの効果で、1000ポイント払って一枚ドロウだ」

樹 LP2600↓1600

「そして、リンク2のマスター・ボーイとエンシエントを、リンクマーカーにセット、『トライフックゴースト』をリンク召喚！」

トライフックゴースト ATK1800 LINK3

「実力が絶対におかしいって……」

「カードをセットして、紅き竜の効果。『スクラップ・ドラゴン』を特殊召喚！」

スクラップ・ドラゴン ATK2800 ☆8

「スクラップ・ドラゴンの効果。スクラップ・ドラゴンとハングリーバーガーを選択して破壊する！」

「む……」

ハングリーバーガーが吹き飛んだ。

恵遊とは違うデッキ構築のため、少々護りきるのが難しい。

「そして、スクラップ・ドラゴンが破壊されたことで『シャドー・インパルス』を発動！」

「バカな……」

「現れる。『クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン』！」

クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン ATK3000 ☆8

『あ、あり得ないほどかみ合っているタクティクスだ』

『我もこれは想定以上だぞ』

『もともと実力はある方だね。ただ……あの紅き竜。あいつが運命力を増幅させているんだ』

デッキにおいて、一枚のカードが他のどんなカードを組み合わせることが出来るのか。

サーチやリクルート、サルベージなど、他のカードを動かせるカードと言うのは多数存在する。

それらのカードを、デッキの中でうまく組み合わせていくことが重要だ。

よく重要視される『シナジー』というのはその言うものである。

「バトル。クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴンで、ダイレクトアタック！」

「手札のバトルフェーダーの効果を発動だ！」

「クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴンの効果で無効にする」

「ならば、墓地の『超電磁タートル』を除外する！」

「……ターンエンドだ」

やっとな終わったか。

テイオスのフィールドにカードはなく、墓地の防御カードもない。

そして、紅き竜の力で運命力が上がっているとすれば……

「僕のターン。ドロロー！」

いいのか悪いのかわからないカードが来た。

「まずはチキンレースの効果で一枚ドロローだ」

ティオス LP2100→1100

「……カードをセットして、『命削りの宝札』を発動してさらに三枚ドロロー。モンスターとバック二枚をセットして、ターンエンドだ」

「守ってばかりと言いたいところだが、油断はできないな。僕のターン。ドロロー！」

樹は引いたカードを見て表情を曇らせる。

「まずは、チキンレースを墓地に送って、新しいフィールド魔法をセット。これにより、

紅き竜の効果を発動。『魔王龍 ベエルゼ』を特殊召喚！」

魔王龍 ベエルゼ ATK3000 ☆8

「バトルフェイズ！クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴンで、セットモンスターに攻撃！」

「罨カード『ブレイクスルー・スキル』を発動。クリスタルウイングの効果は無効にする

！」

「構わない」

クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴンが攻撃したのは……。

「カードガンナーか」

「ああ。そうだ」

破壊されたことで一枚ドロ。

「なら、ベエルゼでダイレクトアタック！」

『パワー・ウォール』を発動。デッキから六枚。カードを墓地に送る！」

「むう……トラフィックゴーストでダイレクトアタック！」

「墓地肥しをさせた今。もう無駄だ。墓地から『ネクロ・ガードナー』を除外する！」

かなりエンジンが乗ってきた。

「……ターンエンドだ」

「僕のターンだ」

テイオスは考える。

ブレイクスルー・スキルを墓地に送ったことで、クリスタルウィングでもベエルゼでも破壊が可能になった。

(……は……)

そう考えた時だった。

『ふむ、テイオス。やつを奪え』

「え？」

『紅き竜だ。あれほど運命力を左右出来る力、我にふさわしい。我が力の糧としよう』
『無茶苦茶な……』

『いや、ティオスのフィールドに残ったセットカードは『リビングデッドの呼び声』で、カードガンナーの効果でドロローして手札も確保した。行けないことはないよ』
言いたいことは分かった。

幸い。まだ墓地の防御カードは余裕がある。

「僕のターン。ドロロー！」

ティオスはドロローしたカードを見て微笑む。

「まずは『リビングデッドの呼び声』を使い、『ハングリーバーガー』を蘇生！」

ハングリーバーガー ATK2000 ☆6

「このタイミングでハングリーバーガーだと。どういうことだ？」

「こういうことだ。僕は手札一枚をコストにして、速攻魔法『超融合』を発動！」

「超融合だ?!」

「僕のハングリーバーガーと、君のアルティマヤ・ツイオルキンを融合する！」

超融合の力の前には、いかなる力も通用しない。

さらに言えば、このようなパワーカード、普通なら引きこむことは困難。

しかし、『恵遊の融合召喚の才能その物』であるティオスなら、それは可能。

「融合召喚。『波動竜騎士 ドラゴエクイテス』！」

波動竜騎士 ドラゴエクイテス ATK3200 ☆10

「ドラゴエクイテス……む、な、なんだ!？」

力が衰えたようにDホイールが減速する樹。

(アルティマヤ・ツイオルキンの力がかかわっていたのは間違いないか)

そして、その奪った力は……。

『フフフ……フハハハハハハ！完成したぞ!』

『アルティマヤ・ツイオルキンっていうと長いから、アルテでいい?』

『水を差しすぎだよ……』

まあ、賑やかなエネルギーになっていた。

「だ。だが、まだ私の方が優勢だ!」

「それはここまです。墓地からブレイクスルー・スキルの効果。クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴンの効果を無効にする!」

色あせた。

「そしてバトルフェイズ。ドラゴエクイテスで、クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴンを攻撃!」

樹 LP1600↓1400

「ぐ……」

「僕はターンエンドだ」

「僕のターン。ドロー……くそっ」

カードが悪かったようだ。

『アルティマヤ・ツイオルキンを前提としたコンボ。私も悪くはないと思うが、蘇生制限が……』

『そのあたりが分かかっていなかったようだ。まあ、次からの教訓とするがいい』

『途中まで追いつめられていたのに……『パワー・ウォール』でずいぶん変わったね』

うるさいな。

「ベエルゼを準備表示に変更。トラフィックゴーストでセキュア・ガードナーをリンク召喚だ。ターンエンド」

魔王龍 ベエルゼ ATK3000↓DFE3000

セキュア・ガードナー ATK1000 LINK1

一応次善策も投入されていたようだ。

「僕のターンだ。ドロー！」

良いカードだ。

『マジック・プランター』を使って、リビングデッドの呼び声をコストに二枚ドロー。

『ハーピィの羽根箒』を発動！』

全てを割り尽くした。

「そして、墓地の『ADチェンジャー』を除外することで、ベエルゼを攻撃表示に変更し、

『一騎加勢』だ！』

魔王龍 ベエルゼ DFE3000↓ATK3000

波動竜騎士 ドラゴエクイテス ATK3200↓3700

「バトルだ！ドラゴエクイテスで、ベエルゼを攻撃！』

樹 LP1400↓0

消し飛ぶ樹のライフ。

「さて、話を……完全に気絶しているね」

樹は気を失っていた。

「どうする。起こすか？」

『いや、もうそろそろ恵遊が起きる時間だ。私たちの存在を恵遊が認知することを、ハン

グリーバーガーが許可していないから、帰ることを優先する必要がある』

『私は満足しているからな。問題はない』

『僕も帰っていいと思うよ』

そう言うわけで、ティオスは帰ることにした。



次の日の朝。

「……なんか、しつかり寝たはずなのに、疲労感があるな。病院に行った方がいいかな」
さすがにDホイールを操作しながら手加減することはテイオスには不可能。
しつかりと、疲労の方は恵遊の方に残るのだった。

あと、病院に行くことに関しては周りも納得するだろうが、おそらく精神科に行くことを進められるだろう。いろいろな意味で。